

狭山市埋蔵文化財調査報告書 19

小 山 ノ 上 遺 跡  
—— 第7・9～11次調査 ——  
英 遺 跡  
—— 第1・2次調査 ——

圃場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

埼玉県狭山市教育委員会



狭山市埋蔵文化財調査報告書 19

こ やま の うえ い せき  
小 山 ノ 上 遺 跡  
—— だい じちようさ  
第 7・9 ～ 11 次 調査 ——  
はなぶさ い せき  
英 遺 跡  
—— だい じちようさ  
第 1・2 次 調査 ——

圃場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

埼玉県狭山市教育委員会



# 序

狭山市域の遺跡は中央を貫流する入間川の左右両岸に、川に沿う形で所在します。いずれも当時の人々の生活を知る上で、たいへん貴重なものです。しかし、昭和40年代後半より増加した諸々の開発行為により、これらの遺跡は破壊の危機にさらされることとなります。狭山市はそれら開発行為によって消滅してしまう埋蔵文化財を事前に発掘調査し、記録保存を行っています。

この報告書もその記録保存事業の一つの成果を表したものです。

本報告書は平成5・8・9年度に実施した調査で、圃場整備に伴って行われたものです。遺構としては縄文時代の集石や、奈良・平安時代の住居跡などが発見され、隣接する同時代の遺跡群とともに、同時代の人々のくらしの一端を明らかにする資料が出土しています。

この成果が当地域の研究と埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、市民の皆様の生涯学習に資するものになれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査においてご理解いただいた関係各氏の皆様、献身的に調査に従事し、報告書刊行までご協力いただいた協力員の方々に厚く御礼申し上げます。

平成24年3月

狭山市教育委員会  
教育長 松本 晴夫

## 例 言

1. 本書は狭山市柏原字地内所在の小山ノ上遺跡第7・9・10・11次調査および英遺跡第1・2次調査の報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は圃場整備に伴うもので、狭山市教育委員会および狭山市遺跡調査会が発掘調査を実施した。
3. 発掘調査届に対する文化庁の受理番号及び発掘調査通知に対する狭山市の通知番号と調査原因は、以下のとおりである。

小山ノ上遺跡 第7次調査 平成5年11月2日付、委保第5-1371号 公共事業

小山ノ上遺跡 第9次調査 平成9年1月10日付、狭教社発第284号 公共事業

小山ノ上遺跡 第10次調査 平成9年5月1日付、教生文第2-26号 公共事業

小山ノ上遺跡 第11次調査 平成9年11月11日付、教生文第2-138号 公共事業

英遺跡 第1次調査 平成5年11月2日付、委保第5-1373号 公共事業

英遺跡 第2次調査 平成9年5月14日付、教生文第2-25号 公共事業

4. 発掘調査期間は、以下のとおりである。

小山ノ上遺跡 第7次調査 平成5年6月10日～平成6年3月8日

小山ノ上遺跡 第9次調査 平成9年1月7日～平成9年1月24日

小山ノ上遺跡 第10次調査 平成9年5月6日～平成9年5月30日

小山ノ上遺跡 第11次調査 平成9年11月17日～平成9年12月15日

英遺跡 第1次調査 平成6年2月21日～平成6年9月5日

英遺跡 第2次調査 平成9年4月20日～平成9年5月9日

5. 整理・報告書作成期間は、平成23年4月1日～平成24年1月31日まで行った。
6. 発掘調査は石塚和則が担当した。また、飯田優子、伊倉榮男、伊藤輝雄、今井綾子、薄田明子、久保正雄、坂入誠、坂入しげ子、佐々木美保子、田口文枝、田中トキ、指田ツネ、長根金作、那須テルヨ、那須洋紀、増田早苗、増田富雄、松本八重子、三橋文子、宮寺隆一、諸井芳子、山川淑恵、山本とし子が参加した（敬称略、五十音順）。
7. 図版の作成と出土品の整理は、三ツ木康介、安井智幸が担当した。また、江川久美子、岸幸子、小林はつみ、瀬戸山真由美、名雲教子、橋本弓子、古川恵子の補助を受けた。
8. 本書の執筆は三ツ木があたった。
9. 本書の編集は狭山市教育委員会社会教育課が行い、三ツ木が担当した。
10. 発掘調査および報告書作成にあたり、下記の諸機関から御教示・御協力を賜った。厚く感謝の意を表する（敬称略、五十音順）。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

# 凡 例

1. 挿図の縮尺は以下のとおりである。また、各挿図にスケールを付した。  
調査区位置図 1/5000、調査配置図：1/1500、調査区全測図：1/200、1/800、1/1500  
遺構図：1/20、1/60、1/200  
遺物実測図：1/3
2. 遺構平面図の方位は座標北を、遺構断面図の水糸レベルは、海拔高を示す。
3. 遺構の表記記号は以下のとおりである。  
住居跡：SJ、掘立柱建物跡：SB、土壙：SK、集石土壙：SC、溝跡：SD、不明遺構：SX、堀
4. 遺物観察表の表記は口径、器高、底径はcmを単位とし、( ) 内の数値は推定値・現存値である。色調は新標準土色帖を基準とした。胎土は肉眼で観察できるものを示し、焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。残存率は図示した器形に対し、5%単位で示したが、20%以下で特徴を示し難いものは「破片」として処理した。
5. 本報告書に掲載した出土品は狭山市教育委員会で保管している。

# 目 次

序

例言

凡例

目次

挿図目次

図版目次

I 調査の概要・・・・・・・・・・	1	V 小山ノ上遺跡 第10次調査・・・・	57
1 発掘調査に至る経過・・・・	1	1 調査の経過と結果・・・・	57
2 発掘調査の組織・・・・	2	2 検出遺構・・・・	58
II 遺跡の立地と環境・・・・・・・・	3	VI 小山ノ上遺跡 第11次調査・・・・	65
1 遺跡の立地と概要・・・・	3	1 調査の経過と結果・・・・	65
2 歴史的環境・・・・	3	2 検出遺構・・・・	66
III 小山ノ上遺跡 第7次調査・・・・	11	VII 英遺跡 第1次調査・・・・	71
1 調査の経過と結果・・・・	11	1 調査の経過と結果・・・・	71
2 検出遺構・・・・	12	2 検出遺構・・・・	71
IV 小山ノ上遺跡 第9次調査・・・・	55	VIII 英遺跡 第2次調査・・・・	79
1 調査の経過と結果・・・・	55	1 調査の経過と結果・・・・	79
2 検出遺構・・・・	55	2 検出遺構・・・・	79
		XII 結語・・・・・・・・	84

## 插图目次

第 1 图	狭山市遺跡分布図	4	第 33 图	第 27 ~ 38 号土壙	47
第 2 图	小山ノ上遺跡第 7・9 ~ 11 次 英遺跡第 1・2 調査区位置図	8	第 34 图	第 39 ~ 47 号土壙	49
第 3 图	小山ノ上遺跡第 7・9 ~ 11 次 配置図	9	第 35 图	第 48 ~ 56 号土壙	51
第 4 图	小山ノ上遺跡第 7 次調査区 全測図	10	第 36 图	第 1 号不明遺構・表面採集遺物	53
第 5 图	第 6 号住居跡	13	第 37 图	小山ノ上遺跡第 9 次調査区 全測図	54
第 6 图	第 6 号住居跡出土遺物 1	14	第 38 图	第 12 号溝・第 94 ~ 96 号土壙	56
第 7 图	第 6 号住居跡出土遺物 2	15	第 39 图	小山ノ上遺跡第 10 次調査区 全測図	57
第 8 图	第 7 号住居跡	17	第 40 图	第 8 号住居跡	59
第 9 图	第 7 号住居跡カマド	18	第 41 图	第 8 号住居跡出土遺物 1	60
第 10 图	第 7 号住居跡出土遺物 1	19	第 42 图	第 8 号住居跡出土遺物 2	61
第 11 图	第 7 号住居跡出土遺物 2	20	第 43 图	第 9 号住居跡・出土遺物	62
第 12 图	第 11 号掘立柱建物跡	21	第 44 图	第 10 号住居跡・出土遺物	63
第 13 图	第 12 号掘立柱建物跡	22	第 45 图	第 97 ~ 100 号土壙	64
第 14 图	第 13 号掘立柱建物跡	24	第 46 图	小山ノ上遺跡第 11 次調査区 全測図	65
第 15 图	第 14 号掘立柱建物跡	25	第 47 图	第 11 号住居跡	66
第 16 图	第 15 号掘立柱建物跡	26	第 48 图	第 11 号住居跡出土遺物	67
第 17 图	第 16・17 号掘立柱建物跡	27	第 49 图	第 21・22 号掘立柱建物跡	68
第 18 图	第 18・19 号掘立柱建物跡	28	第 50 图	第 2 号不明遺構	69
第 19 图	第 20 号掘立柱建物跡	29	第 51 图	英遺跡第 1 次調査区全測図	70
第 20 图	第 1 号溝	30	第 52 图	第 1・2 号溝	72
第 21 图	第 2 号溝	31	第 53 图	第 3 号溝	73
第 22 图	第 3・4 号溝	32	第 54 图	第 1 号堀	75
第 23 图	第 5 号溝	33	第 55 图	第 1 号堀 A・B 断面図	76
第 24 图	第 2 号堀	34	第 56 图	第 1 号堀断面図 C	77
第 25 图	第 2 号堀 A 断面図	35	第 57 图	第 1 号堀出土遺物 第 1・2 号土壙	78
第 26 图	第 2 号堀 B 断面図	36	第 58 图	英遺跡第 2 次調査全測図	80
第 27 图	第 1 号集石土壙	37	第 59 图	第 1 号住居跡	81
第 28 图	第 2・3 号集石土壙	38	第 60 图	第 1 号住居跡出土遺物 1	82
第 29 图	第 4・5 号集石土壙	39	第 61 图	第 1 号住居跡出土遺物 2	83
第 30 图	第 3 ~ 9 号土壙	41	第 62 图	第 3 号土壙	83
第 31 图	第 10 ~ 17 号土壙	43			
第 32 图	第 18 ~ 26 号土壙	45			

## 插图目次

図版 1	小山ノ上遺跡第 7 次調査 A 区全景 小山ノ上遺跡第 7 次調査 B 区全景	図版 6	小山ノ上遺跡第 10 次調査区全景 第 8 号住居跡全景 第 9 号住居跡全景 第 10 号住居跡全景
図版 2	第 6 号住居跡全景 第 7 号住居跡全景 第 12 号掘立柱建物跡全景 第 13 号掘立柱建物跡全景 第 15 号掘立柱建物跡全景 第 16 ~ 20 号掘立柱建物跡全景 集石土壙検出状況 第 2 ~ 5 号集石土壙検出状況	図版 7	第 8 号住居跡出土遺物 第 9 号住居跡出土遺物 第 10 号住居跡出土遺物
図版 3	第 6 号住居跡出土遺物 第 7 号住居跡出土遺物	図版 8	小山ノ上遺跡第 11 調査区全景 第 11 号住居跡出土遺物
図版 4	第 2 号堀全景 第 96 号土壙全景	図版 9	英遺跡第 1 次調査区全景 第 1 号堀全景
図版 5	小山ノ上遺跡第 9 次調査区全景	図版 10	第 1 号堀全景 第 1 号堀出土遺物
		図版 11	第 1 号住居跡全景 第 1 号住居跡出土遺物

# I 調査の概要

## 1 発掘調査に至る経過

狭山市教育委員会では、昭和 58 年度以降、国及び県の補助を得て、民間開発及び個人住宅建設等に関わる埋蔵文化財確認調査、および記録保存を目的とした発掘調査を実施している。これらの調査は通常、農業委員会事務局や建設部建築審査課および開発審査課などの開発行為に関わる部局との連絡、地権者との調整により随時行っている。

今回報告の小山ノ上遺跡第 7・9・10・11 次調査および英遺跡第 1・2 次調査は、圃場整備に伴うものである。発掘調査にいたる過程は、隣接地で遺構が確認されているため、直接発掘調査を行った場合と、事前に確認調査の依頼を受けて、遺構の有無を確認した場合とがある。遺構確認後は、開発者との協議の上、発掘調査を工事日程に支障のきたさないよう調整し、平成 5 年度及び平成 8 年度及び平成 9 年度に国庫補助事業と市事業として実施した。各調査の文化財保護法第 94 条第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘調査届に係る文化庁長官の受理通知と、文化財保護法第 99 条第 2 項の規定による埋蔵文化財発掘調査通知に係る狭山市の通知番号は例言に示したとおりである。

各調査区の所在地、調査面積等は下表のとおりである。

遺 跡 名	調査回数	所 在 地	調査面積	時 代
小山ノ上遺跡 (県遺跡番号 22-011)	第 7 次調査	柏原 1280-1 外	2,060㎡	縄文 奈良・平安 中世
	第 9 次調査	柏原 1501 外	179㎡	奈良・平安
	第 10 次調査	柏原 1280-1	173㎡	奈良・平安
	第 11 次調査	柏原 1288	149㎡	奈良・平安
英遺跡 (県遺跡番号 22-074)	第 1 次調査	柏原 1450 外	990㎡	奈良・平安 中世
	第 2 次調査	柏原 1533-1	45㎡	奈良・平安

## 2 発掘調査の組織

### 1) 発掘調査（平成5年度）

主体者	狭山市教育委員会 生涯学習部	教育長	武居富雄
		次 長	久津間利一
		参 事	水越昭久
担当課	社会教育課 文化財係	課 長	牛窪忠洋
		係 長	石田公一
		主 任	小淵良樹
		主 事	石塚和則
		主 事	松寫直人
調査担当			石塚和則

### 2) 発掘調査（平成8・9年度）

主体者	狭山市教育委員会 生涯学習部	教育長	野村甚三郎
		部 長	市村春子
		次 長	吉久隆男
担当課	社会教育課 文化財係	課 長	増嶋長次
		課長補佐	落合禮子
		係 長	増田俊夫
		主 査	小淵良樹
		主 任	原 肇
		主 任	石塚和則
調査担当			石塚和則

### 3) 整理・報告（平成23年度）

主体者	狭山市教育委員会 生涯学習部	教育長	松本晴夫
		部 長	向野康雄
		次 長	梅村貞之
担当課	社会教育課 文化財担当	課 長	白倉 孝
		主 査	半貫芳男
		主 査	石塚和則
		主 任	北山誠也
		主 事	三ツ木康介
整理担当			三ツ木康介

## Ⅱ 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の立地と概要

#### 小山ノ上遺跡

狭山市柏原字小山ノ上に所在する、縄文・古墳・奈良・平安時代の集落遺跡で、遺跡中央には県道堀兼・根岸線が走っている。入間川左岸の台地上に位置し、標高は北端部で約 54 m、南端部で約 61 m、沖積地との比高差は約 11 mを測る。

遺物の分布密度から推測するに、遺跡北東部が縄文時代、遺跡中央部が古墳時代、遺跡南半部が奈良・平安時代と考えられており、また遺跡北東部には古墳の石室で使用されたと思われる河原石が 20 個ほど見つかっており、古墳も存在していた可能性がある。

本遺跡の発掘調査は、昭和 60・61 年の（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団の調査を始めとし、圃場整備を中心に 11 回実施されている。検出遺構は縄文時代の集石土壙や奈良・平安時代の住居跡や掘立柱建物跡、溝、土壙、中世の堀などが確認されている。

#### 英遺跡

狭山市柏原字英に所在する奈良・平安時代および中世の遺跡で、入間川左岸の台地上に位置し、標高は約 55 mを測る。多量の金くそが採集されるため鑄造遺跡の可能性があり、また遺跡付近は俗に「神田屋敷」と呼ばれ、中世鑄物師が住んでいたとの伝承もある。

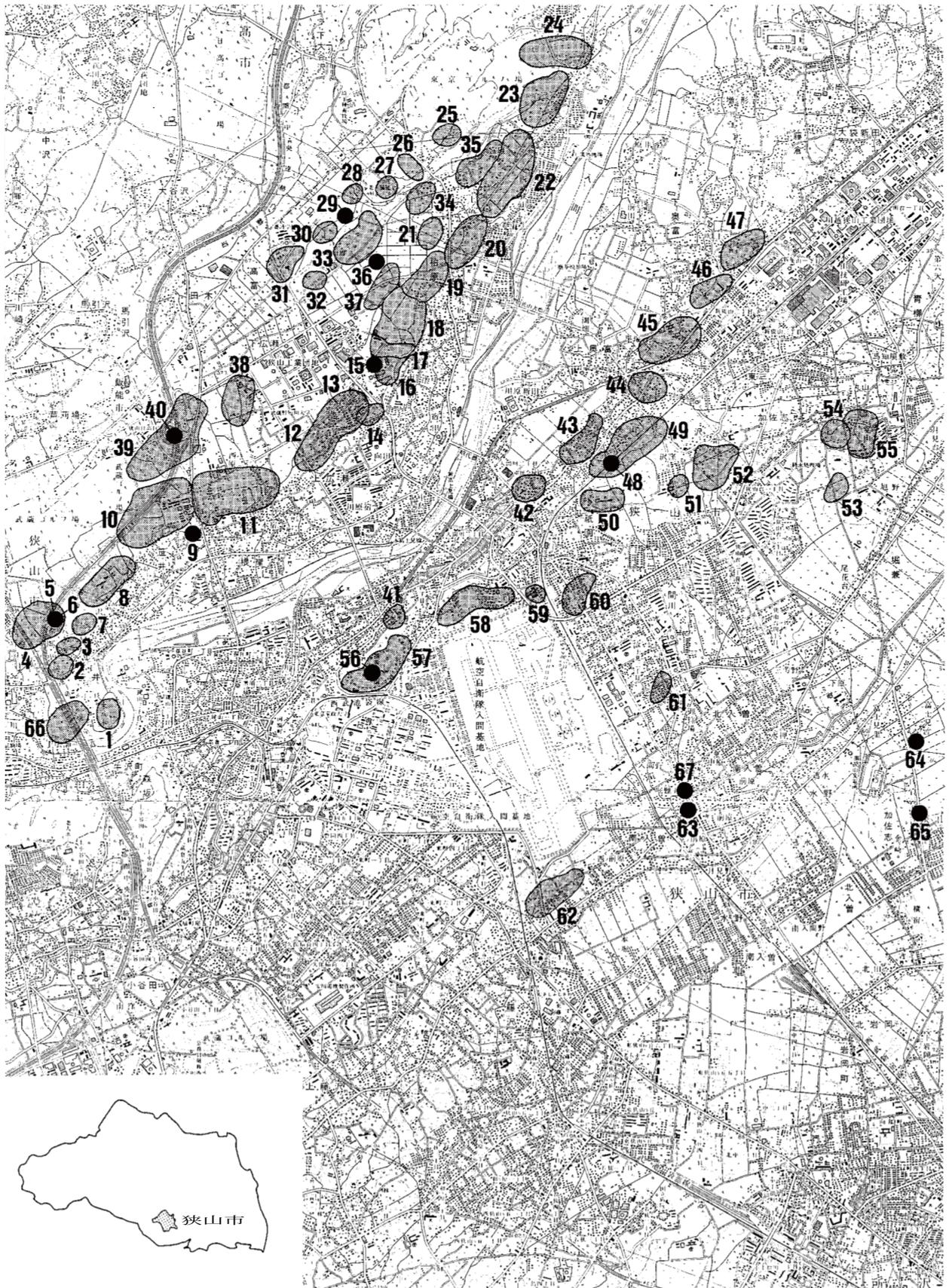
本遺跡の発掘調査は、圃場整備に伴う事前調査として 2 回実施されている。検出遺構は奈良・平安時代の住居跡 1 軒や中近世の土壙 5 基、堀 1 条などが確認されており、出土遺物には須恵器、土師器のほかには堀から中世のかわらけ、内耳鍋などが出土している。

### 2 歴史的環境

狭山市内には 67 箇所以上の遺跡が所在する（第 1 図）が、その大多数が縄文時代と奈良・平安時代の複合集落遺跡である。昭和 60 年代以降、首都圏中央連絡自動車道（以下、圏央道）関係の調査を含めて、数々の発掘調査が実施され、多くの成果が上げられている。これらの成果の蓄積と継続的に行う分析により、今後市域を含めた本地域の歴史的動態を明らかにしていくことが可能となろう。ここでは、近年の新知見を加えて概説するとともに、市内の各時代の遺跡群を俯瞰することにする。

旧石器時代の遺跡としては、平成 2 年度から平成 3 年度にかけて（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が圏央道に伴って実施した西久保遺跡（39）発掘調査において、旧石器時代の石器製作跡が多数発見され、本市における当該時代の一端が明らかとなった。狭山市遺跡調査会でも、平成 6 年度に同遺跡の発掘調査を行い、武蔵野台地第 4 層下部の良好な資料を得ている。また、宮地遺跡（8）では細石刃、細石核が表採されている。

縄文時代の遺跡は、大略草創期から後期後半までが確認されているが、早期末までは土壙、炉跡などの遺構が検出されるに留まる。集落の呈をなすのは前期黒浜期以降で、遺跡数の急激な増加でも画期となり得るが、集落規模の拡大、長期化の面では中期中葉勝坂期から後葉加曾利 E 期のものが大勢を占め、この時期偏差が市内の縄文時代遺跡を特徴づけている。過去の調査事例もこの時期に集中する。



第1図 狭山市遺跡分布図

## 狭山市内遺跡一覧（括弧内は県遺跡番号）

1. 東八木窯跡群（22049）奈・平
2. 八木遺跡（22068）縄（前・中）、奈・平
3. 八木北遺跡（22021）奈・平
4. 八木上遺跡（22022）縄（前・中）、奈・平
5. 沢口上古墳群（22020）古（後）
6. 笹井古墳群（22019）古（後）
7. 沢口遺跡（22080）縄（早～中）、古、奈・平
8. 宮地遺跡（22018）縄（中）、奈・平
9. 金井遺跡（22071）中
10. 金井上遺跡（22023）縄（草・前）、奈・平、中
11. 上広瀬上ノ原遺跡（22005）縄（草）、奈・平
12. 霞ヶ丘遺跡（22004）縄（中）、奈・平
13. 今宿遺跡（22002）縄（早～中）、奈・平
14. 上広瀬古墳群（22001）古（後）
15. 森ノ上西遺跡（22079）先
16. 森ノ上遺跡（22008）縄（中）奈・平
17. 富士塚遺跡（22009）縄（中）奈・平
18. 鳥ノ上遺跡（22010）奈・平
19. **小山ノ上遺跡（22011）縄（中・後）、古～中**
20. 御所の内遺跡（22012）奈・平
21. **英遺跡（22074）奈・平、中**
22. 城ノ越遺跡（22013）縄（前・中）、奈・平、中
23. 宮ノ越遺跡（22016）縄（前・中）、奈・平
24. 字尻遺跡（22075）縄（前～後）、奈・平
25. 丸山遺跡（22037）縄（早・前～後）奈・平
26. 金井林遺跡（22035）縄（前～後）
27. 鶴田遺跡（22044）縄（前・中）
28. 上ノ原東遺跡（22065）奈・平
29. 上ノ原西遺跡（22063）縄（中）
30. 半貫山遺跡（22061）中
31. 稲荷山遺跡（22058）縄（後）
32. 前山遺跡（22059）縄（中）
33. 高根遺跡（22062）縄（早・中・後）
34. 町久保遺跡（22034）縄（中）、奈・平、中
35. 宮原遺跡（22017）縄（前～後）
36. 下双木遺跡（22078）縄（草）
37. 上双木遺跡（22077）縄（中・後）、奈・平
38. 上広瀬西久保遺跡（22073）奈・平
39. 西久保遺跡（22069）先、縄（草）、奈・平
40. 東久保遺跡（22070）先
41. 上諏訪遺跡（22086）縄（中・後）
42. 滝祇園遺跡（22066）縄（草～後）、古、奈・平
43. 峰遺跡（22024）縄（中・後）、奈・平
44. 戸張遺跡（22026）縄（前・中）、奈・平
45. 揚榎木遺跡（22027）縄（前・中）、奈・平
46. 坂上遺跡（22029）縄（中）、奈・平
47. 稲荷上遺跡（22032）縄（前・中）、奈・平
48. 上中原遺跡（22025）先
49. 中原遺跡（22025）縄（早～後）、奈・平
50. 沢台遺跡（22079）縄（中）、奈・平
51. 沢久保遺跡（22041）縄（中）
52. 下向沢遺跡（22042）縄（中・後）、奈・平
53. 吉原遺跡（22067）縄（前）
54. 下向遺跡（22085）縄（前～後）
55. 台遺跡（22084）縄（前～後）
56. 稲荷山公園古墳群（22052）古（後）
57. 稲荷山公園遺跡（22051）縄（中）
58. 石無坂遺跡（22083）縄（中）奈・平
59. 富士見西遺跡（22082）縄（中）、奈・平
60. 富士見北遺跡（22072）縄（前・中）、奈・平
61. 富士見南遺跡（22081）縄（中）
62. 町屋道遺跡（22088）縄（前～後）、奈・平
63. 七曲井（22046）中
64. 堀兼之井（22047）中
65. 八軒家の井（22076）中
66. 八木前遺跡（22087）縄（前・後）
67. 堀難井遺跡（22089）中

草創期の遺跡としては、入間川左岸の金井上遺跡（10）、西久保遺跡、上広瀬上ノ原遺跡（11）、下双木遺跡（36）、丸山遺跡（25）、右岸では滝祇園遺跡（42）と市内各地で当該期のものと考えられる尖頭器が出土している。今後も単独出土例が増加するものと思われるが、現時点では土器を伴っていないため本期の詳細については不明である。

早期では押型文土器の小破片が高根遺跡（33）で出土している他、同一水系の日高市向山遺跡では本段階の住居跡6軒が検出されており、南小畔川右岸沿いには該期の遺跡が多く分布する可能性が指摘できる。早期後半では、今宿遺跡（13）で条痕文系土器を伴う炉穴が検出されている。

前期前半は花積下層式土器が今宿遺跡で、関山式土器が宮原遺跡（35）で出土しているが、未だ遺構の検出を見ていない。黒浜期には、市内でもまとまった集落調査例がある。昭和56年に調査された入間川右岸の揚楯木遺跡（45）では、段丘崖に沿って線状に展開する住居跡群が検出されている。本遺跡に近接する稲荷上遺跡（47）でも同時期の遺構が検出され、良好な一括資料を得ている。左岸では笹井地区に該期遺跡の集中があり、八木前遺跡（66）、八木遺跡（2）、八木上遺跡（4）では、圏央道関連の調査において黒浜期の遺構が調査され、これらを含めれば入間川両岸にわたって黒浜期集落が展開していた様相が明確である。諸磯期以降の遺跡としては、笹井に所在する金井上遺跡、八木上遺跡があり、前者では前期後半の包含層、後者では前期終末期の住居跡が1軒検出されている。

中期には表面採集資料も含めてであるが、遺跡数は39箇所と急増し市内遺跡全体の60%を超える。代表的な遺跡としては、入間川左岸では丸山遺跡、後期後半までの継続が確認されている宮原遺跡が市域東部の柏原に、大規模な集落跡として著名な宮地遺跡が市域西部の笹井に位置する。入間川右岸の遺跡としては稲荷上遺跡があり、近年の調査により中期後半の遺構が多数検出されている。宮地遺跡は現在までに7次にわたる調査が実施されている。100軒に及ぶ住居跡が検出され、それらの分布状況から双環状集落であることが確認された。主体となる時期は、勝坂期中頃から加曾利EⅢ期に及ぶが、称名寺式土器を伴う土壙も検出されており、後期初頭まで継続するのは確実とみられる。中期末から後期初頭では、周辺地域にも認められるように集落規模は急速に縮小する。中期末では、入間川左岸において前述の宮地遺跡、柏原の森ノ上遺跡（16）、字尻遺跡（24）、右岸では揚楯木遺跡等、市内各地で継続期間が限定的な小規模な集落跡が確認されており、加曾利EⅢ期から後期初頭の柄鏡形住居跡が数軒単位で検出されている。柄鏡形住居跡は、周辺の入間市、飯能市、日高市でも多くの検出例があり、県内でも入間地方は本種遺構の分布密度が濃いと思われる。

縄文時代晩期から弥生時代にかけては、当市では確認例が非常に少なく、森ノ上遺跡の土壙から弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる搬入土器が一点出土しているのみである。

古墳時代の遺跡として当市には沢口上古墳群（5）、笹井古墳群（6）、上広瀬古墳群（14）、稲荷山公園古墳群（56）と滝祇園遺跡が所在する。現在まで調査が実施されたのは笹井古墳群、上広瀬古墳群で、7世紀後半のものと考えられる。笹井古墳群は石室の構造が特異なため、奈良時代以降の墳墓の可能性も否定できない。当該期の集落遺跡は、現在のところ滝祇園遺跡が唯一であり、竪穴住居跡1軒が検出されている。

奈良・平安時代の集落は入間川左岸に帯状に23遺跡、右岸は久保・不老川流域を含めて14遺跡存在する。市域での集落形成の契機は、高麗郡の建郡と考えられる。高麗郡は渡来人の高度な技術で未開発地域の開墾を進めようとする中央政府の意図によって東海道・東山道に分散していた渡来人が集められ、霊亀2年

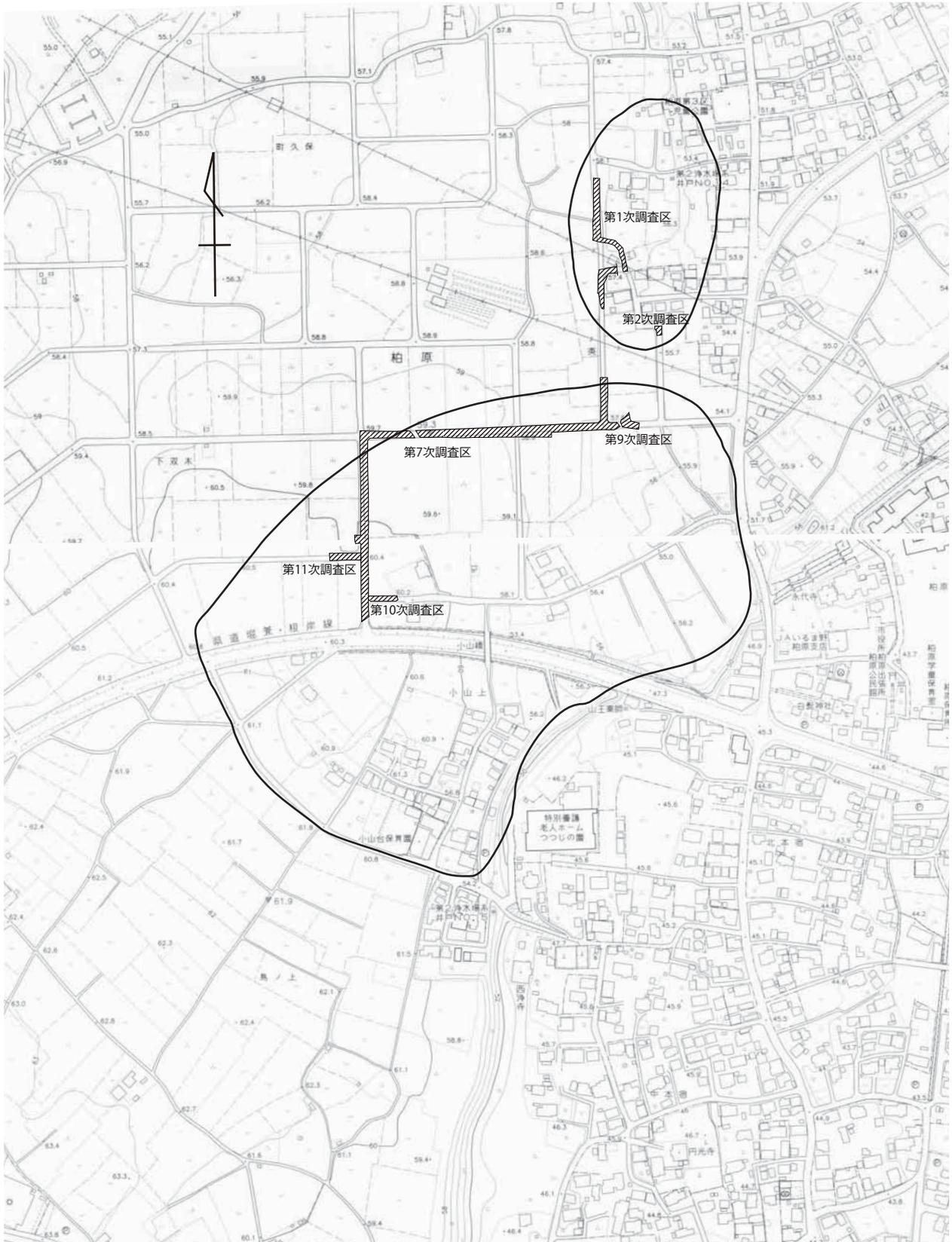
(716年)に入間郡の一部を割いて設置された郡である。当地方に移住してきた渡来人たちがもたらした技術は、主に窯業技術と鉄製品生産技術と考えられており、窯業については東八木窯跡(1)を含む東金子窯跡群の操業開始が、鉄製品生産技術に関しては羽口や鉄滓の出土状況から推定される小鍛冶の開始と在地産鉄製品の普及がその例として挙げられる。

8世紀中頃に東金子窯跡群での須恵器生産が開始され、入間川両岸での居住もほぼ同時期に開始されたと考えられる。当該期の遺跡として宮ノ越遺跡(23)、森ノ上遺跡、小山ノ上遺跡(19)、揚榎木遺跡等が挙げられ、東金子古段階の前内出窯古式とそれに並行する南比企の須恵器が出土している。

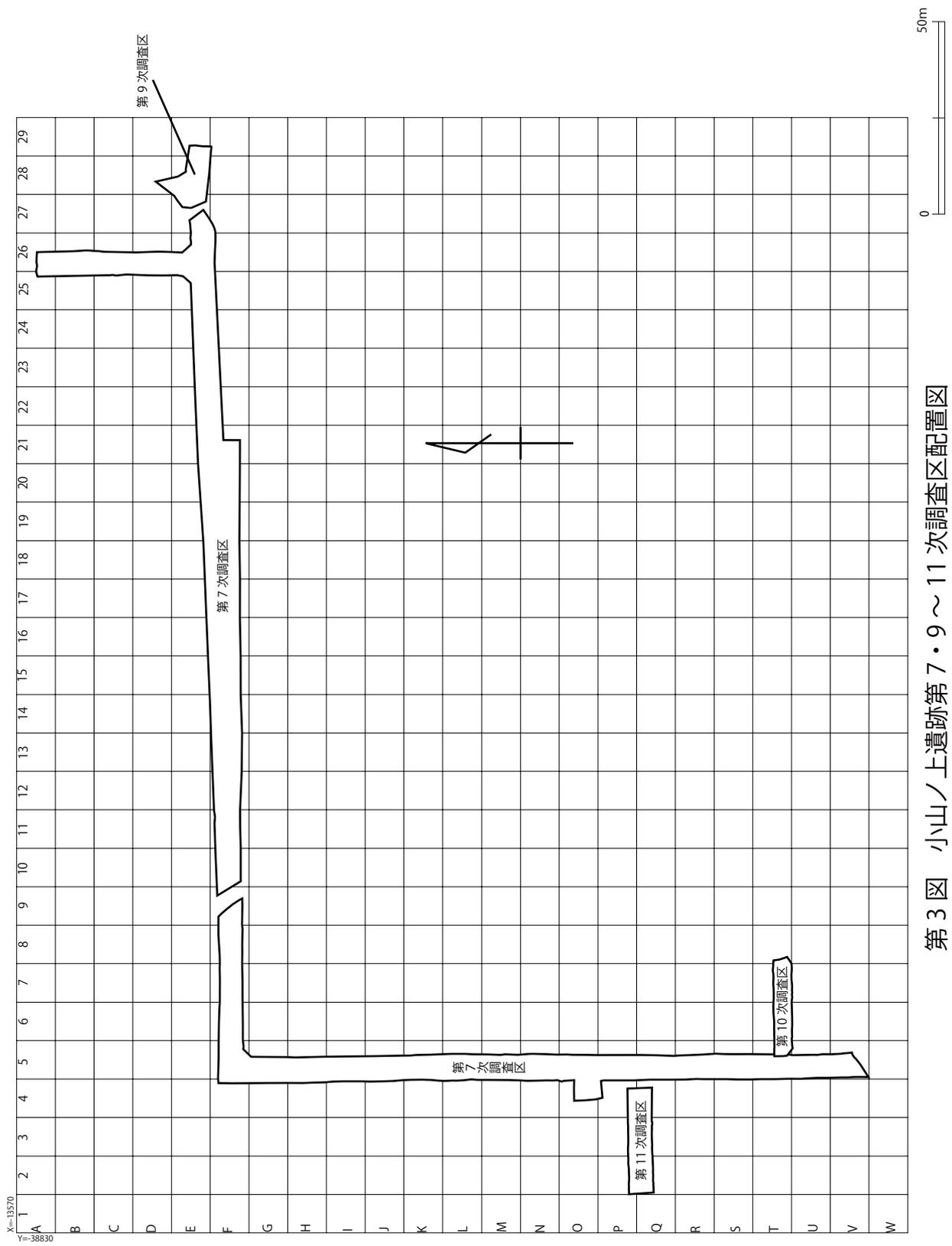
若干時代が下る8世紀後半から9世紀初頭には前内出窯新式の須恵器が普及し、入間川左岸の宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡(22)、上広瀬上ノ原遺跡(11)、小山ノ上遺跡、森ノ上遺跡、宮地遺跡では東金子産の須恵器の割合が南比企産を圧倒的に上回る。窯に近くなるほどこの東金子産の割合が大きくなるのだが、右岸の揚榎木遺跡では東金子窯跡群に近いにもかかわらず南比企産の須恵器が出土量遺物の1/3を占める。

9世紀中頃には、東金子窯産須恵器が当地方で広く使用されるようになる。入間川左岸では宮ノ越遺跡から城ノ越遺跡、御所の内遺跡(20)、小山ノ上遺跡、森ノ上遺跡、上広瀬上ノ原遺跡、霞ヶ丘遺跡(12)、今宿遺跡、金井上遺跡、宮地遺跡へと連綿と集落が形成されているが、当該期とされる住居跡が圧倒的に多い。右岸でも稲荷上遺跡、揚榎木遺跡、戸張遺跡(44)、中原遺跡(49)、峰遺跡(43)、滝祇園遺跡と、左岸ほどではないがやはり帯状に集落が形成されている。このような集落規模の拡大や住居跡軒数の増加は、承和12年(845年)に開始された国分寺の再建が契機となり、八坂前・新久A-1・2窯(入間市)で瓦焼成が行われたことによる大規模な人資の流入が直接的な要因と考えられる。また、東金子窯跡群の生産も増加し、例えば揚榎木遺跡では東金子産須恵器が左岸の遺跡と同等の9割合を占めるようになる。9世紀後半以降、住居数は次第に減少し、入間川両岸における住居数や密度の差異はほとんど見られなくなる。当該期の遺跡である宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、小山ノ上遺跡、今宿遺跡、稲荷上遺跡、揚榎木遺跡、戸張遺跡、中原遺跡からは新久A-1・2窯からD-1・3窯の東金子系須恵器が出土するが約半数は還元焼成が上手く行われていない。これに伴い、土師質須恵器の坏や壺も出現し始める。これら状況は、長期操業の弊害である燃料材不足など生産に関わる諸環境の悪化や、さらに国分寺再建事業の終了による窯跡群の衰退を明確に示していると思われる。瓦焼成終了後も須恵器は生産されているが、生産規模は縮小されており、操業を終えるとともに周辺集落の人口も減少していったものと考えられる。

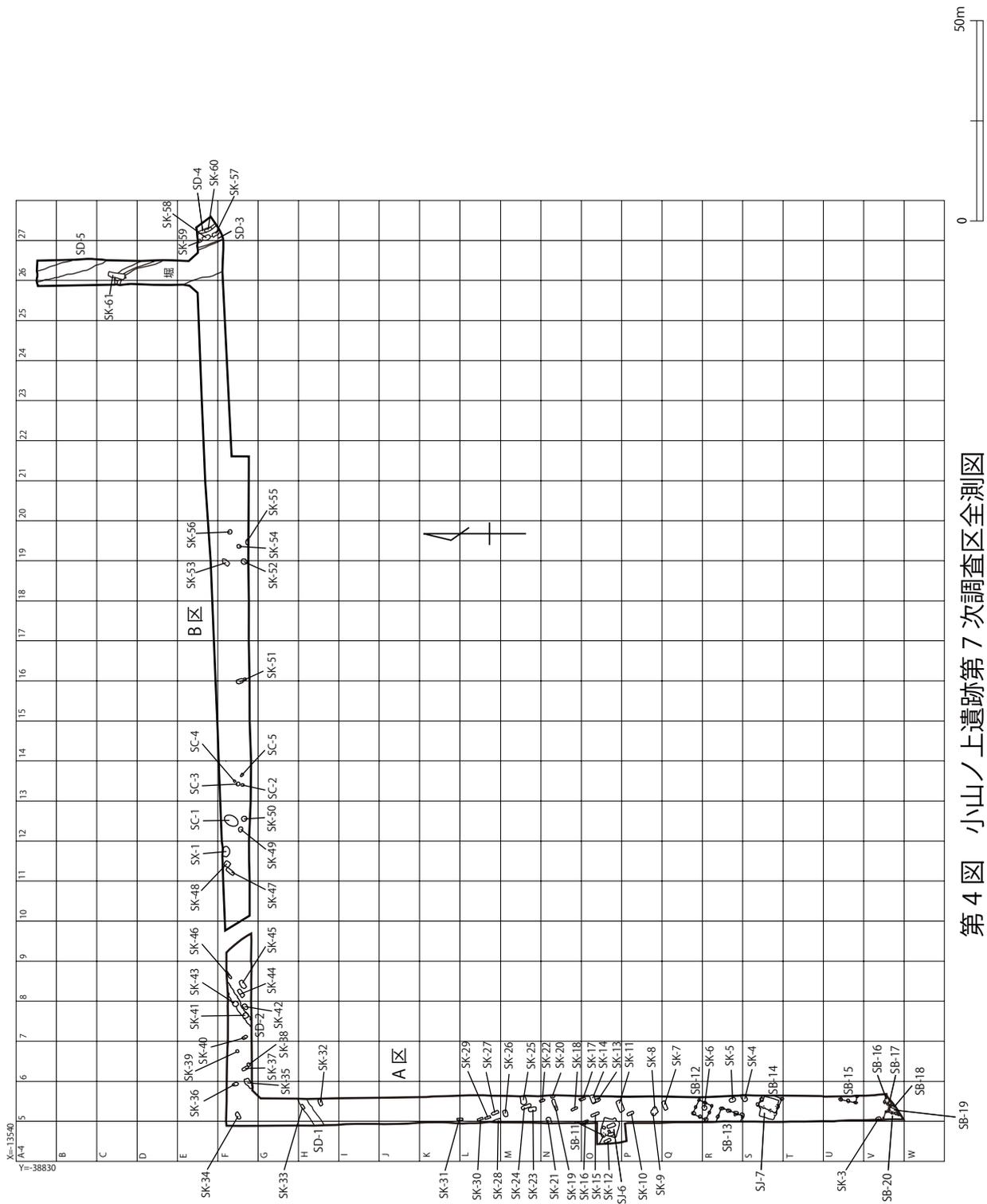
中世以降の遺跡としては、鎌倉街道上道と主要支道である堀兼道が市域を貫いているおり、一部には道路状の切り通しが往時の遺構として残存している。また、この路線に沿って七曲井や堀兼之井などの所謂「まいまいず井戸」が点在する。これらの井戸は、奈良・平安時代に由来すると考えられるが、七曲井は近世に至るまで修復され使用された記録が残されている。入間川左岸では、柏原に中世末の遺構とされる城山砦が城ノ越遺跡内に所在する。同じく柏原所在の小山ノ上遺跡で、平成5年度の調査で幅約6m、深さ2.8m前後を測る大規模な堀跡が検出されている。同遺跡では昭和60年度の(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査でも館跡と考えられる堀跡が検出されており、両者の関係が注目される。なお、隣接する鑄造遺跡とされる英遺跡でも同規模の堀跡が検出され、覆土中から15世紀末の内耳鍋、かわらけが出土している。いずれにしても、中世については断片的な遺構検出に留まっており、該期以降の市域の様相について、文献資料を補強する意味でも今後の考古資料の増加が望まれる。



第2図 小山ノ上遺跡第7・9・10・11次調査区  
英遺跡第1・2次調査区位置図



第3図 小山ノ上遺跡第7・9～11次調査区配置図



第4図 小山ノ上遺跡第7次調査区全測図

# Ⅲ 小山ノ上遺跡第7次調査

## 1 調査の経過と結果

調査原因が圃場整備のため、確認調査は行わず、本調査を平成5年6月10日から平成6年3月8日にかけて実施した。調査の経過は以下のとおりである。

平成5年度

- 6月10日(木) 重機による表土除去。
- 6月17日(木) 人力による表土除去。調査区壁の切りそろえ。遺構確認調査開始。
- 7月21日(水) 遺構確認作業。遺構数が確定したため、掘り下げを開始する。
- 8月10日(火) 第6号住居跡断面図作成。
- 8月11日(水) 第6号住居跡完掘、全景写真撮影。第7号住居跡断面図作成。
- 8月12日(木) 第6号住居跡平面図作成。
- 8月19日(木) 第7号住居跡完掘、全景写真撮影。
- 8月23日(月) 第12・13号掘立柱建物跡断面図作成。
- 8月24日(火) 第7号住居跡・第14号掘立柱建物跡平面図作成。第12号掘立柱建物跡完掘。  
第15号掘立柱建物跡断面図作成。
- 8月25日(水) 第13・15号掘立柱建物跡完掘、全景写真撮影。  
第16・17・18号掘立柱建物跡断面図作成。
- 8月28日(土) 第13号掘立柱建物跡全景写真撮影。第16・17・18・19・20号掘立柱建物跡完掘。
- 8月30日(月) 第14号掘立柱建物跡断面図作成。  
第16・17・18・19・20号掘立柱建物跡全景写真撮影。  
第13号掘立柱建物跡平面図作成。
- 9月2日(木) 第7号住居跡カマド断面図作成、完掘、全景写真撮影。  
第14号掘立柱建物跡完掘。第16・17・18・19・20号掘立柱建物跡平面図作成。
- 9月16日(木) 第15号掘立柱建物跡平面図作成。
- 9月17日(金) 第6号住居跡カマド断面図作成。
- 9月20日(月) 第6号住居跡カマド完掘、全景写真撮影、平面図作成。  
第7号住居跡カマド平面図作成。
- 9月28日(火) 第11号掘立柱建物跡断面図作成。
- 9月30日(木) 第11号掘立柱建物跡完掘、全景写真撮影。
- 10月4日(月) 第11号掘立柱建物跡平面図作成。第1・2号溝完掘、全景写真撮影。
- 10月12日(火) 集積土壌掘り下げ。
- 10月18日(月) 第1・2号溝平面図作成。第2号堀平面図作成。
- 11月10日(水) 第2・3・4・5号集積土壌完掘、全景写真撮影。
- 3月4日(金) 第2号堀断面図作成、全景写真撮影。
- 3月8日(火) 埋め戻し。作業終了。機材撤収。

なお、土壌については数が多いため経過から省略する。

調査の結果、検出された遺構は縄文時代の集石土壌 3 基、奈良・平安時代の竪穴住居跡 2 軒、掘立柱建物跡 10 棟、土壌 59 基と溝 5 条、中世の堀 1 条、不明遺構 1 基である。なお、遺構番号は昭和 60 年に狭山市教育委員会が実施した第 2 次調査からの通し番号で、縄文時代の集石土壌が第 1～3 号集石土壌、奈良・平安時代の竪穴住居跡が第 6・7 号竪穴住居跡、掘立柱建物跡が 11～20 号掘立柱建物跡、土壌が第 3～61 号土壌、溝が第 1～5 号溝、堀が第 2 号堀、不明遺構が第 1 号不明遺構となる。

## 2 検出遺構

### 住居跡

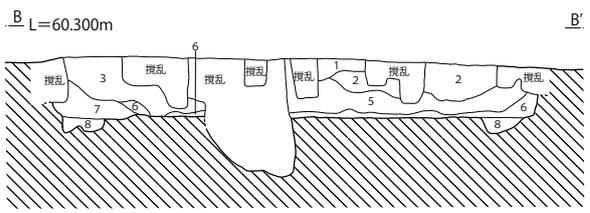
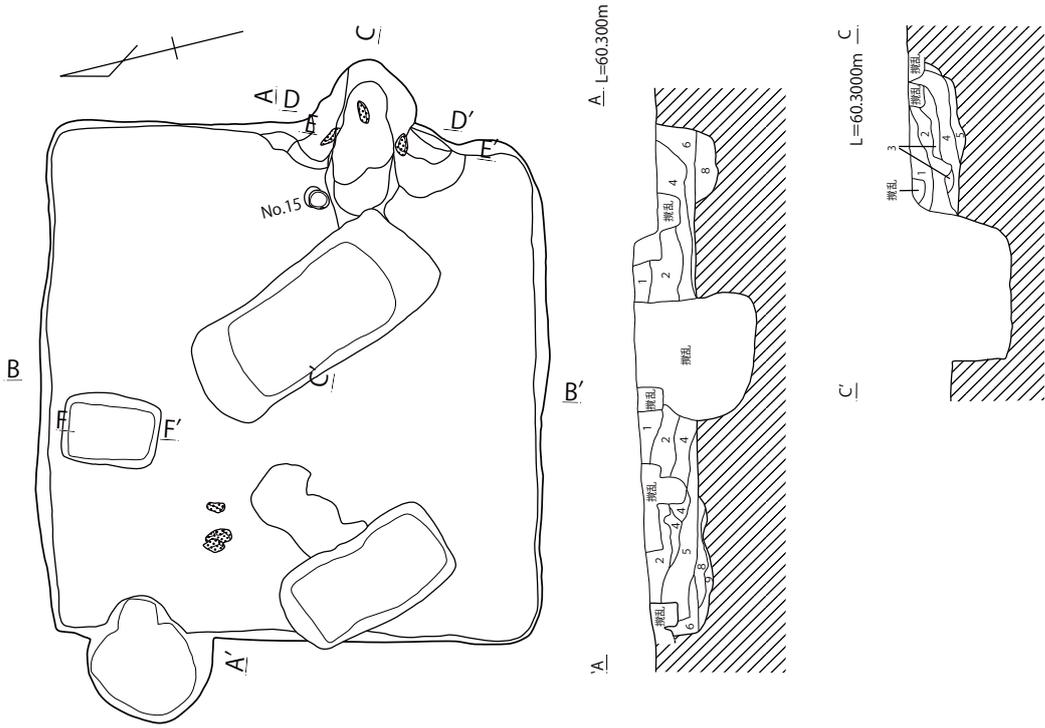
#### 第 6 号住居跡 (第 5 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の O-4 グリッドで検出された。遺存状態は上層が攪乱で壊されているが床面付近は良好。平面形はほぼ正方形を呈し、全体の規模は長軸長 4.23m、短軸長 4.05m、深さ 0.42～0.61m を測る。主軸方位は N-103°-E を指す。

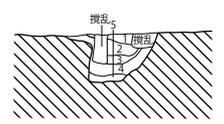
床面は平坦で、一部に硬質なところが検出された。壁溝は全周し、溝幅 0.02m～0.13m、深さ 0.10m～0.12m を測る。壁体は攪乱が及んでいるため正確には不明だが遺存している部分から推測するに垂直に立ち上がっていると考えられる。

カマドは東壁から検出され、遺存状態は良好である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸長 1.27m、両袖間 0.83m を測る。両袖の補強材および支脚に河原石を使用している。

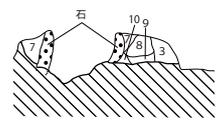
出土遺物は須恵坏・須恵器蓋・須恵器鉢・須恵器長頸壺・土師器坏・土師台付甕・土師甕が出土している (第 6・7 図)。1～7 は須恵器坏である。1 は底部かに厚みを持つが、体部から口縁部にかけて薄くなる。口縁部は体部から直線的になっている。体部は直線的で、底部は上げ底になっている。外底部に墨書「小山？」が書かれている。東金子産。2 は底部から口唇部にかけて器厚が均等で、口縁部は体部から直線的になっている。体部は直線的で、底部はやや上げ底になっている。東金子産。3 は底部と体部の接続部分がやや薄く残りは均一である。口縁部は体部から直線的になっている。体部は直線的で、体部下位に明確な丸みを持つ。東金子産。4 は底部と体部の接続部分がやや厚く残りは均一である。口唇部がやや先鋭化しており、口縁部は体部から直線的になっている。体部は直線的で、体部下位に明確な丸みを持つ。全体的に風化が著しい。東金子産。5 は全体的に器厚が厚く底部中央がへこむ。口縁部は体部から直線的になっている。体部は直線的で、体部下位に明確な丸みを持つ。東金子産。6 は底部の器厚がやや厚く。口唇部は若干先鋭化しており、体部は丸みを持っている。時期的に他の遺物よりも古く、混入品だと考えられる。東金子産。7 は底部と体部下位の一部で、底部が厚く、体部は薄い。体部下位に丸みを持っている。東金子産。8 は須恵器蓋である。全体的に厚みを持っている。裾部分はほぼ面中で、内部は降灰がかかっている。鈕は底部が矩型の環状つまみで、国分寺創建期のものと考えられる。東金子産。9 は須恵器鉢の底部から体部である。器厚は全体的に厚く、口縁部に向かってやや薄くなる。底部は全面手持ちヘラ削りで、体部下位は回転ヘラ削りで調整されている。体部中位には押し型紋がみられる。南比企産。10 は土師器坏である。器厚は均一で、口縁部は垂直に立ち上がる。底部は丸型で、内外面に煤が濃く付着している。灯明皿もしくは火掻き具の可能性はある。11～13 は土師器甕である。11 は口縁部から体部中位で、器厚は均一である。口唇部はやや先鋭化し、口縁部は緩やかな「く」の字状を呈している。器型から甕の可能性



L=60.300m D D' (SJ-6A・B)

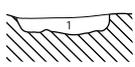


L=60.300m E E'



- |             |        |                                          |
|-------------|--------|------------------------------------------|
| 1           | 黒褐色土層  | ローム粒・焼土粒・ロームブロック (小) を多く含み、黄色が強い。しまりやや不良 |
| 2           | 黒褐色土層  | ロームブロックを多量に含む。しまり良                       |
| 3           | 暗茶褐色土層 | 多量の焼土・炭化物を含む。しまりやや不良                     |
| 4           | 黒褐色土層  | 黒色土ブロックを多量に含む (中央に顕著)。しまり良 (4' 粘土多量に混入)  |
| 5           | 黒褐色土層  | 暗い色調を呈する。第3層に類似。焼土を多く含有                  |
| 6           | 暗黄褐色土層 | 崩落ロームを多く含む (6' 焼土多量に混入)                  |
| 7           | 黒褐色土層  | 黒色が強い層。焼土等の含有は少ない                        |
| 8           | 暗黄褐色土層 | ローム粒・ロームブロックと黒色土の混合層。貼床。固くしまっている         |
| 9           | 暗黄褐色土層 | ロームブロック主体の層。貼床                           |
| (SJ-6C・D・E) |        |                                          |
| 1           | 黒黄褐色土層 | 多量のローム粒・ロームブロックを含む。しまりやや不良               |
| 2           | 黒褐色土層  | ローム粒・ロームブロック・焼土粒・炭化物を含む。しまり良             |
| 3           | 灰褐色土層  | ローム粒・焼土粒・粘土粒を含む                          |
| 4           | 明赤褐色土層 | 多量の焼土粒・焼土ブロックを含む。しまり不良                   |
| 5           | 黒褐色土層  | ロームブロック・焼土粒・炭化物を多く含む。しまり不良               |
| 6           | 暗黄褐色土層 | ロームと粘土の混合層。しまり良                          |
| 7           | 暗褐色土層  | ロームブロック・焼土・粘土粒を多く含む。しまり不良                |
| 8           | 暗灰色土層  | 粘土層                                      |
| 9           | 暗黄褐色土層 | ロームブロックを主体とする。台状に固めた感じ                   |
| 10          | 暗褐色土層  | 第7層に類似。粘土は含まない                           |

L=60.300m F F'



(SJ-6 貯蔵穴)

- |   |       |                                  |
|---|-------|----------------------------------|
| 1 | 黒褐色土層 | ローム粒・ロームブロックを多く含む。焼土・炭化物も混入。しまり良 |
|---|-------|----------------------------------|

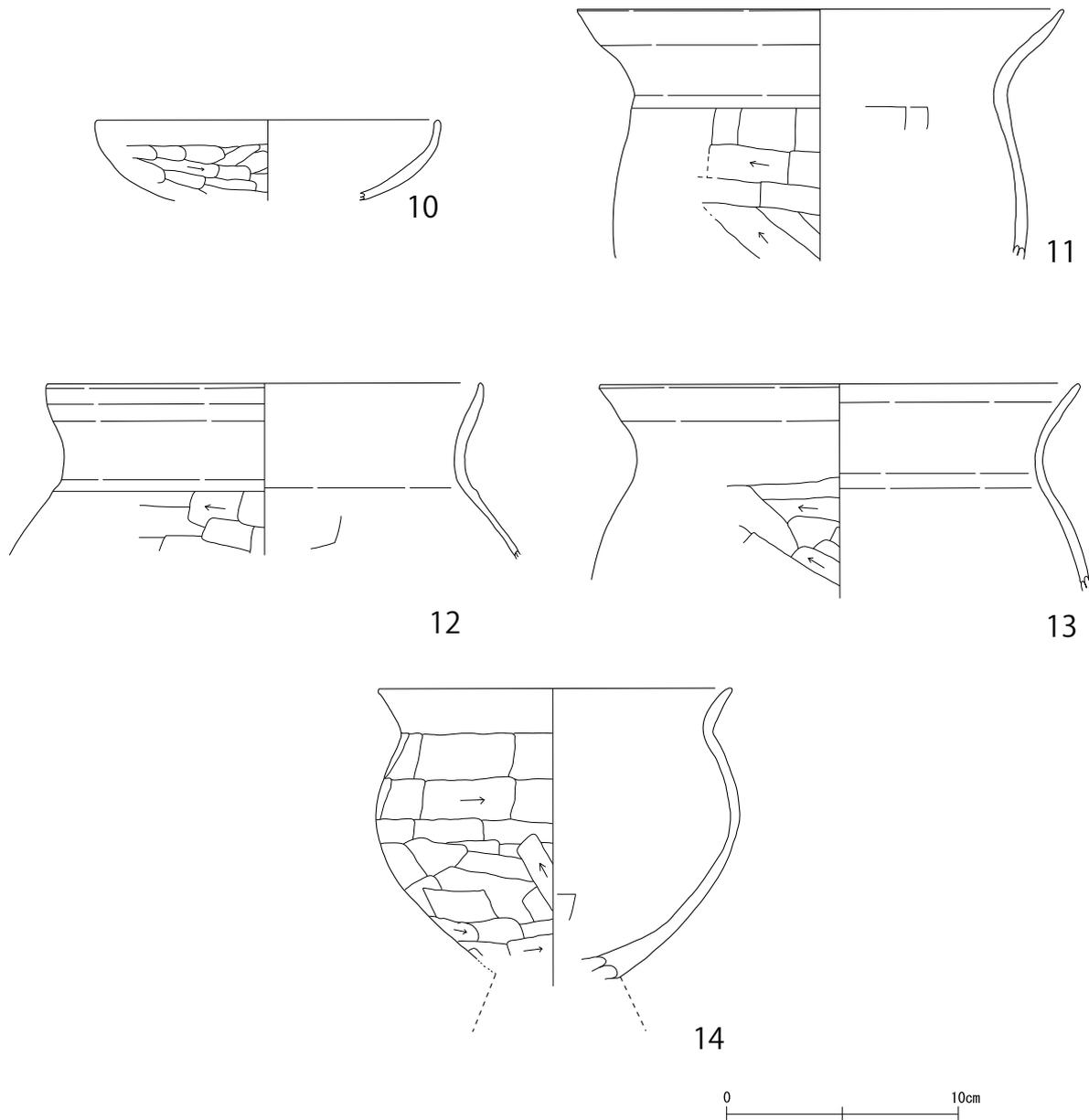


### 第5図 第6号住居跡



0 10cm

第6図 第6号住居跡出土遺物1



第7図 第6号住居跡出土遺物2

第6号住居跡出土遺物観察表

NO	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	須恵器坏	13.2	7.2	3.2	35%	白色粒・砂粒	良好	青灰色	回転糸切り後周辺回転ヘラ削り。 外底部に墨書「小山?」。東金子産
2	須恵器坏	13.4	7.0	3.4	45%	白色粒・小礫	良好	青灰色	回転糸切り後周辺回転ヘラ削り。東金子産
3	須恵器坏	(12.6)	(7.0)	3.4	40%	白色粒・小礫	良好	青灰色	回転糸切り後周辺回転ヘラ削り。東金子産
4	須恵器坏	(13.0)	(7.7)	3.8	30%	白色粒・黒色粒・赤色粒・石英	不良	にぶい橙色	回転糸切り後周辺回転ヘラ削り。東金子産
5	須恵器坏	(12.4)	(7.9)	4.0	25%	白色粒・砂粒・小礫	良好	暗青灰色	全面回転ヘラ削り。東金子産
6	須恵器坏	(14.8)	(9.4)	3.0	破片	白色粒・黒色粒	良好	灰白色	全面回転ヘラ削り。東金子産
7	須恵器坏	—	6.8	(2.3)	破片	白色粒・砂粒	良好	青灰色	回転糸切り後周辺回転ヘラ削り。東金子産
8	須恵器鉢	—	(17.8)	(10.2)	破片	白色粒・白色斜状・石英・小礫	良好	赤灰色	体部中位に押し紋、下部にヘラ痕。南比企産
9	須恵器蓋	(19.0)	4.6	5.4	破片	白色粒・砂粒	良好	青灰色	鈕あり。裾部が矩型の環状つまみ。東金子産
10	土師器坏	(14.8)	—	(3.5)	30%	白色粒・石英	不良	赤褐色	底部丸型。内外面に煤付着
11	土師器甕	(21.0)	—	(10.8)	破片	白色粒・黒色粒・石英・長石	不良	赤褐色	口縁部ゆるやかな「く」の字状。胎土に鉱物が多く混入
12	土師器甕	18.8	—	(7.7)	破片	白色粒・黒色粒・石英・長石	不良	明褐色	口縁部「く」から「コ」の字状への移行期
13	土師器甕	(20.6)	—	(8.5)	破片	白色粒・黒色粒・石英・長石	普通	赤褐色	口縁部「く」の字状。最大径は体部中位
14	土師器台付甕	15.2	—	(12.7)	85%	白色粒・砂粒・石英・長石	不良	暗赤褐色	脚部欠損。内面上部半分は煤付着

もある。12は口縁部から体部の一部で、器厚は口縁部が厚く、体部が薄い。口唇部は垂直に立ち上がりやや先鋭化している。口縁部は「く」から「コ」の字状の移行期あたる。13は口縁部から体部の一部で、器厚は均一である。口縁部は「く」の字状を呈し、最大径は体部中位になると考えられる。14は土師器台付甕である。脚部は欠損している。器厚は全体的に均一だが、脚部との接付近はかなり厚い。口縁部は「く」の字状を呈している。外面が二次焼成で脆くなっており、内面の上部半分は煤が濃く付着していることから、当初は煮炊き用に使用し、脚部欠損後、埋甕炉として再利用した可能性が高い。

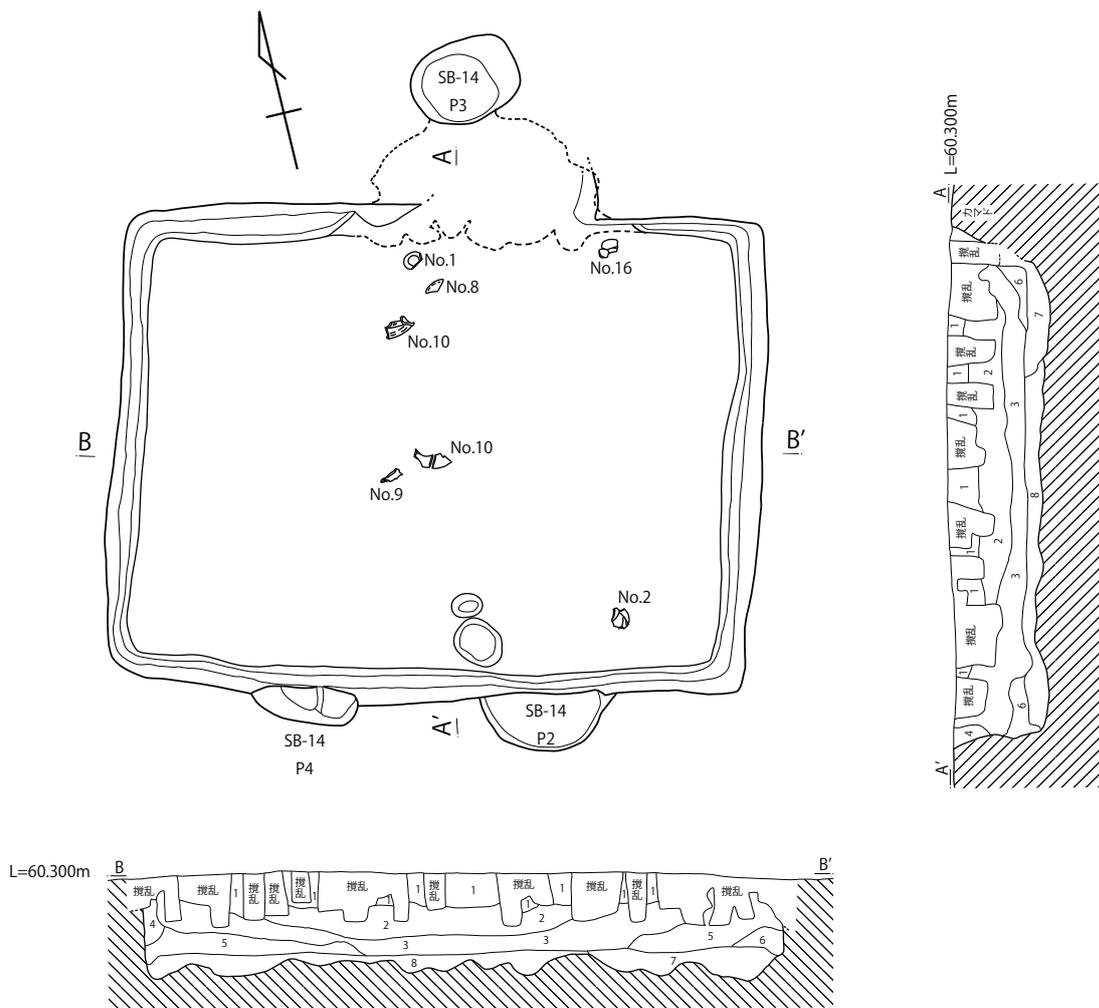
#### 第7号住居跡(第8・9図)

本遺構は、調査区A区南側のS-5グリッドで検出された。遺存状態は上層が攪乱で壊されているが床面付近は良好。平面形はほぼ正方形を呈し、全体の規模は長軸長5.02m、短軸長4.95m、深さ0.65～0.80mを測る。主軸方位はN-16°-Eを指す。

床面は凹凸がある。壁溝は全周し、溝幅0.11m～0.31m、深さ0.08m～0.11mを測る。壁体は攪乱が及んでいるため正確には不明だが遺存している部分から推測するに垂直に立ち上がっていると考えられる。

カマドは北壁から検出され、煙道部分が第14号掘立柱建物跡の柱穴によって壊されているが、全体的には遺存状態は良好である。平面形は三角形を呈し、規模は長軸長1.80m、両袖間0.80mを測る。

出土遺物は須恵坏・須恵器蓋・土師器坏・土師台付甕・土師甕が出土している(第10・11図)。1～6は須恵器坏である。1は全体的に器厚が均一で、口縁部は若干内湾している。体部は直線的で、底部から体部への立ち上がりは彎曲している。南比企産。2は全体的に器厚が均一で口唇部がやや先鋭化している。体部は若干内湾しているが、底部からの立ち上がりは直線的である。東金子産。3は底部中央が厚く、口縁部に向かってやや薄くなる。体部は丸みを持ち、口唇部はS字状を呈し外反している。東金子産。4は器厚がほぼ均一で、内底部端に爪先技法が施されている。底部から体部への立ち上がりは丸みを持ち、体部は直線的、口縁部は直線的になっている。5は底部が厚くなっており、口縁部内側に明確な段を有する。体部は丸みを持ち、口縁部は外反している。底部にヘラ記号が施されているが大部分は欠損している。東金子産。6は底部から体部下位の一部で、底部が厚く体部は薄い。内底部端に爪先技法が施されている。東金子産。7、8は須恵器蓋である。7は鈕無しである。器厚は天井部が厚く、裾に行くほど薄くなっている。裾は外反している。東金子産。8は鈕が欠損している。器厚は天井部が厚く、裾部が薄くなっている。裾の返りは垂直に返っている。天井部付近が磨耗しており、返り付近の外面から内面にかけて降灰が見られる。東金子産。9は須恵器長頸壺の頸部である。器厚は頸部が厚く、体部がやや薄い。頸部内面と体部外面に降灰が見てとれる。南比企産。10は須恵器甕の口縁部である。器厚は口唇部が薄く、頸部に向かって厚くなっている。内面全体と外面の一部に降灰が見られる。南比企産。11、12は土師器坏である。11は器厚が均一である。底部は丸底で、口縁部は垂直に立ち上がっている。内外面全体に煤が付着している。12は器厚が底部中央が厚く、口縁部に向かって薄くなっている。底部は丸底で、口縁部には明確な有形段を持つ。13、14は土師器台付甕である。13は口縁部から肩部にかけての破片で、器厚は口縁部で厚く、体部で薄い。口縁部は「く」の字状を呈している。口縁部のロクロ目が顕著である。14は口縁部から肩部にかけての破片で、器厚はほぼ均一である。口縁部は「く」の字状を呈し、頸部内部に爪先痕がある。15～18は土師器甕である。15は口縁部から体部中位で、器厚は口縁部が厚く、体部は薄い。口縁部は「く」から「コ」の字状への移行期のものである。16は体部中位から底部の一部で、器厚は残存部に関し



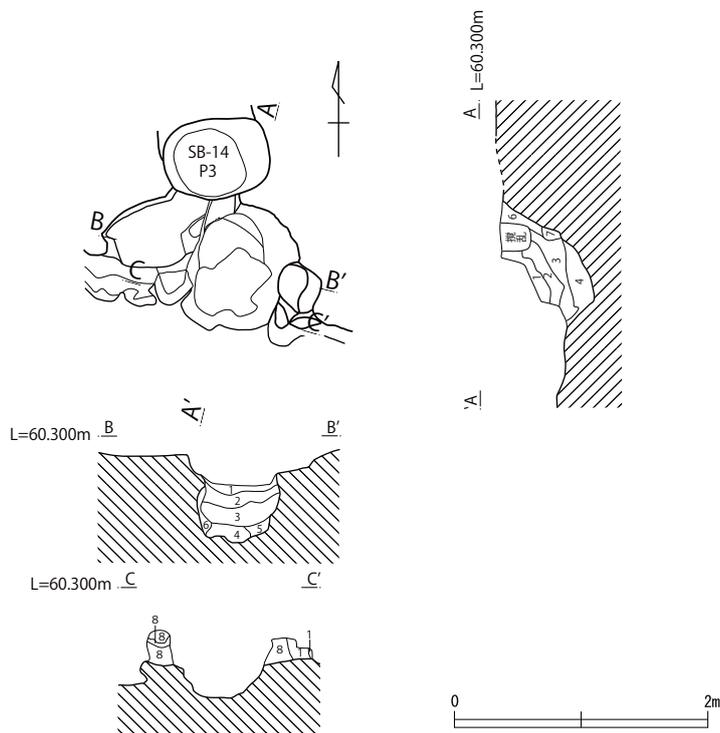
(SJ-7)

- |   |        |                             |
|---|--------|-----------------------------|
| 1 | 黒褐色土層  | 部分的に多くの焼土を含む。他にローム粒・炭化物混入   |
| 2 | 黒褐色土層  | 小粒のロームブロックを含む。しまり不良         |
| 3 | 黒褐色土層  | 黒色が強い。含有物は比較的少ない            |
| 4 | 黒褐色土層  | ローム粒・ロームブロックを多く含有           |
| 5 | 黒褐色土層  | ローム粒・ロームブロックを多く含み、黄色が強い     |
| 6 | 黒褐色土層  | ローム粒・ロームブロックを多く含み、しまり不良     |
| 7 | 黒褐色土層  | ロームブロック (大) を多く含み、かたくしまっている |
| 8 | 暗黄褐色土層 | 一部焼土が見られる。ロームブロックをかためた層     |



第8図 第7号住居跡

ては均一である。内面の底部付近で補強したと考えられる箇所には明確な削り目がある。カマドからの出土で出土状況からカマド袖の補強材として使用されていた可能性がある。17は体部下位から底部で、器厚は均一である。全体的に丁寧な調整がなされている。カマドからの出土で出土状況からカマド袖の補強材として使用されていた可能性がある。18は体部中位から底部で、器厚は体部中位で厚く、底部に向かって薄くなっている。体部中位内面に明確な段がある。残存部の輪積み跡は顕著である。カマドからの出土で出土状況からカマド袖の補強材として使用されていた可能性がある。



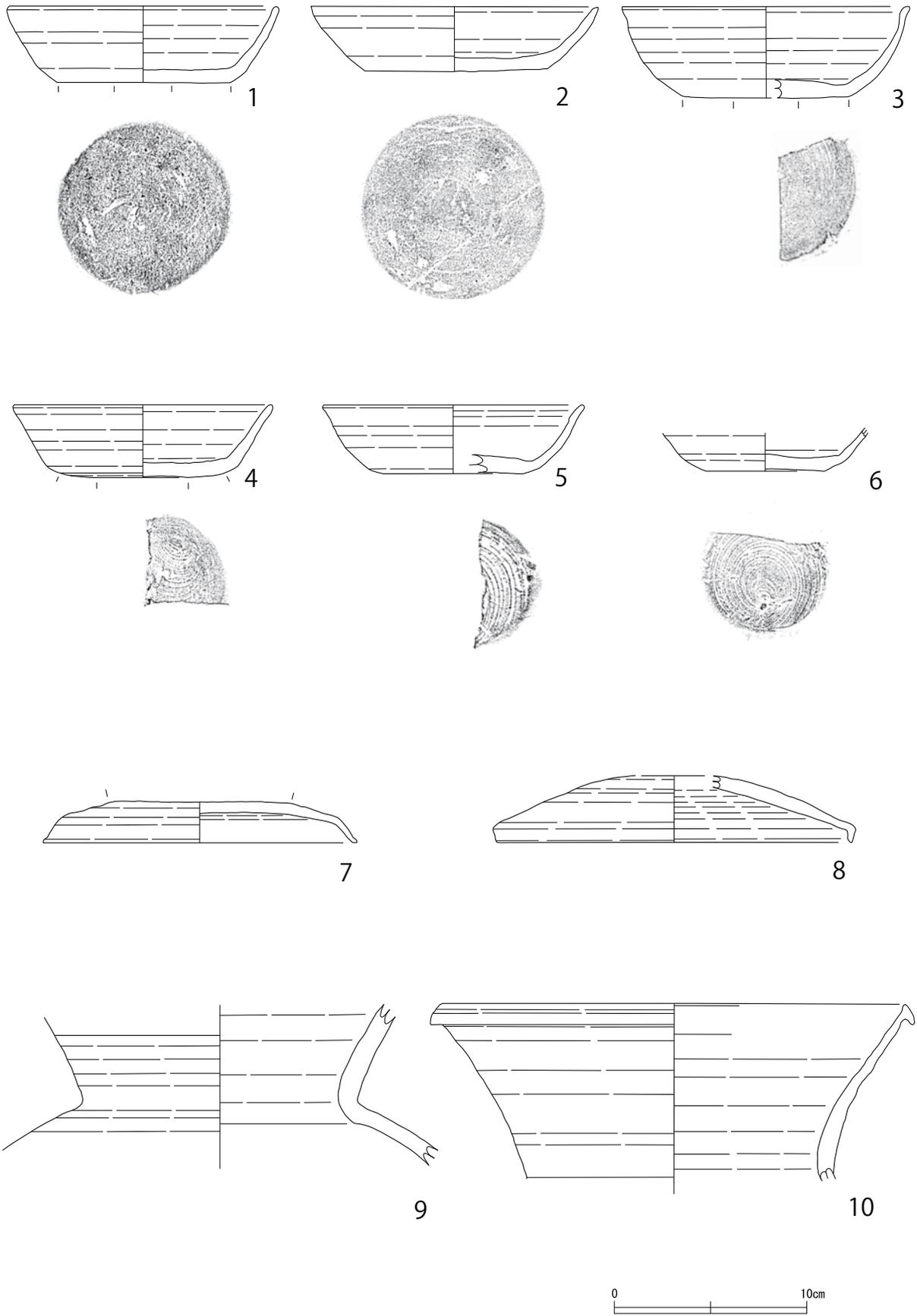
(SJ-7 カマド)

- |   |        |                             |
|---|--------|-----------------------------|
| 1 | 黒褐色土層  | 粘土を砂粒状に含む。他にローム粒・焼土・炭化物を含有  |
| 2 | 暗灰色土層  | 粘土を多く含む。焼土含有も第1層より多い        |
| 3 | 暗赤褐色土層 | 焼土層                         |
| 4 | 黒褐色土層  | 黒色土を主体とし、ロームブロックを多く含む。しまり不良 |
| 5 | 黒褐色土層  | 第4層より焼土を多く含む                |
| 6 | 暗黄褐色土層 | 粘土とロームの混合層。しまり不良            |
| 7 | 暗黄褐色土層 | 焼けたロームブロック層                 |

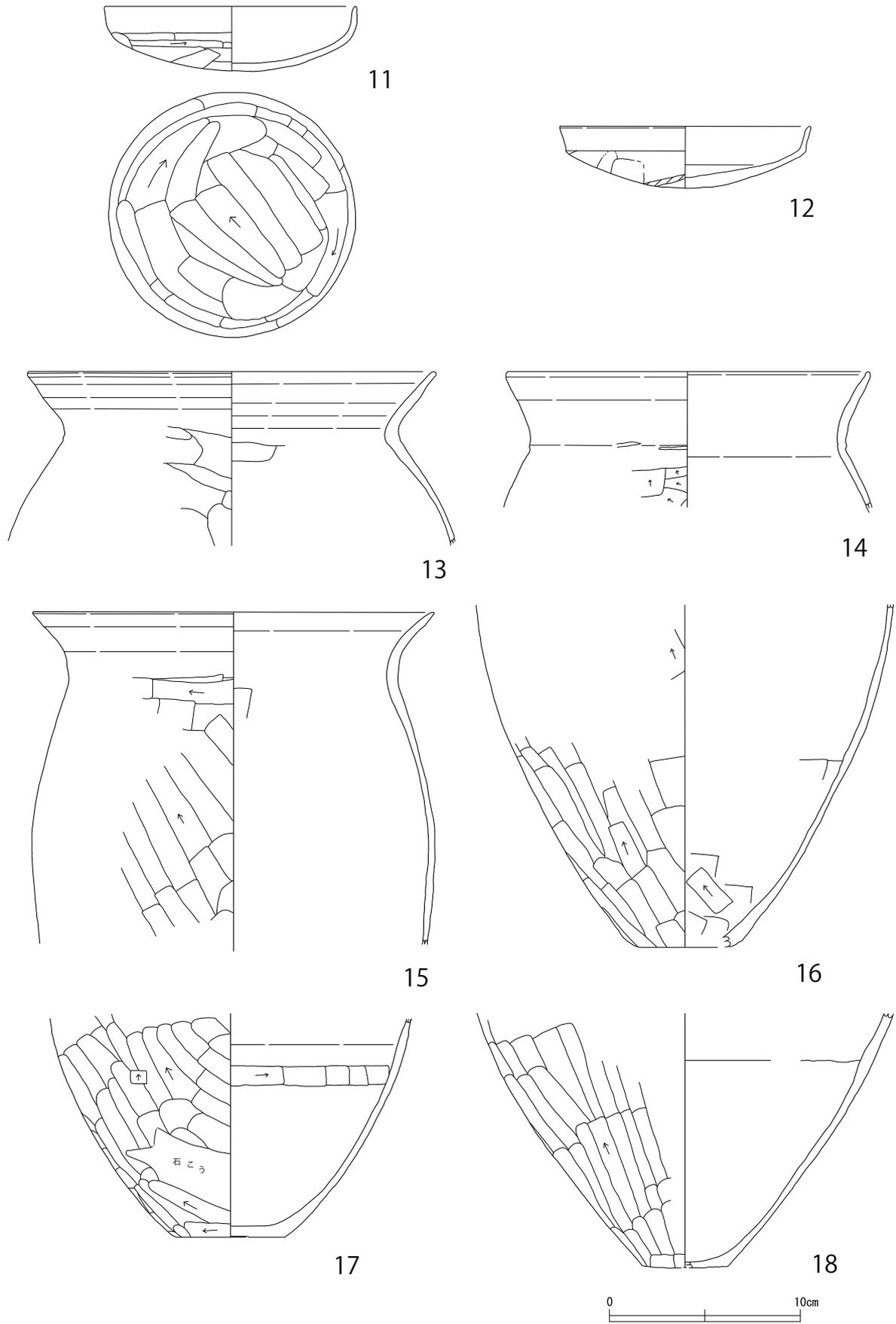
### 第9図 第7号住居跡カマド

#### 第7号住居跡出土遺物観察表

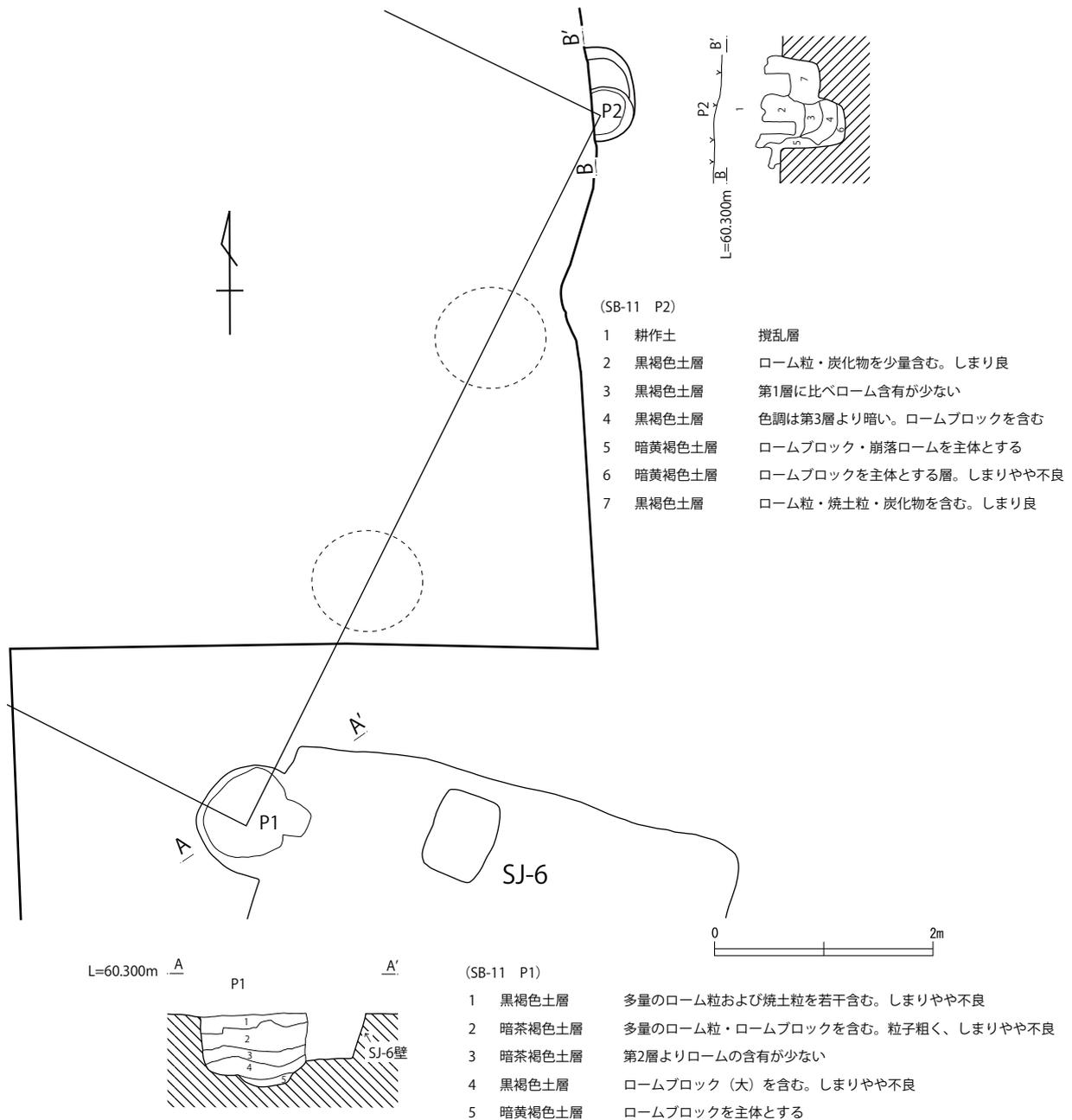
NO	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	須恵器坏	14.0	9.0	4.0	95%	白色粒・白色針状・石英	良好	青灰色	回転糸切り後周辺手持へら削り。南比企産
2	須恵器坏	15.0	9.5	3.4	75%	白色粒・砂粒・石英	普通	にぶい黄褐色	全面回転へら削り。東金子産
3	須恵器坏	(15.0)	(8.9)	4.8	40%	白色粒・黒色粒・小礫	良好	青灰色	回転糸切り後周辺回転へら削り。東金子産
4	須恵器坏	(13.4)	(8.6)	3.8	25%	白色粒・黒色粒・石英	良好	灰白色	回転糸切り後周辺回転へら削り。 爪先技法あり。東金子産
5	須恵器坏	(13.5)	6.8	3.6	50%	白色粒・砂粒	良好	青灰色	全面回転へら削り。東金子産
6	須恵器坏	—	6.2	(2.0)	25%	白色粒・黒色粒	良好	灰色	全面回転へら削り。爪先技法あり。東金子産
7	須恵器蓋	(16.4)	(9.5)	2.3	40%	黒色粒	不良	灰白色	鈕なし。天井部回転へら削り。東金子産
8	須恵器蓋	(18.4)	—	(3.5)	25%	白色粒・黒色粒・小礫	良好	灰色	鈕欠損。天井部付近磨耗。東金子産
9	須恵器長頸壺	—	—	(8.5)	破片	白色粒・白色針状・黒色粒	不良	暗青灰色	頸部のみ残存。南比企産
10	須恵器長頸壺	24.0	—	(9.2)	20%	白色粒・白色針状・黒色粒・小礫	良好	暗灰色	内面全体に降灰。南比企産
11	土師器坏	13.2	12.8	3.4	95%	黒色粒・石英・長石	普通	赤褐色	底部丸型。内外面に煤付着
12	土師器坏	(13.2)	12.6	3.3	破片	黒色粒・石英・長石	不良	赤褐色	底部丸型。底部と口縁部の間に明確な段あり
13	土師器台付甕	21.2	—	(9.2)	破片	白色粒・石英	良好	赤褐色	口縁部「く」の字状。口縁部に歪みあり
14	土師器甕	(20.0)	—	(7.1)	破片	白色粒・石英・長石	良好	赤褐色	口縁部のみ残存。口縁部「く」の字状
15	土師器甕	(21.0)	—	(17.6)	15%	白色粒・黒色粒・石英・長石	不良	赤褐色	口縁部「く」から「コ」の字状への移行期
16	土師器甕	—	(6.0)	(18.1)	15%	白色粒・黒色粒・石英・長石	不良	明褐色	体部下位から底部のみ残存
17	土師器甕	—	(5.8)	(11.6)	45%	白色粒・砂粒・石英	不良	赤褐色	体部下位から底部のみ残存
18	土師器甕	—	(4.4)	(13.5)	破片	白色粒・赤色粒・砂粒・石英	不良	暗褐色	体部下位から底部のみ残存



第 10 図 第 7 号住居跡出土遺物 1



第11図 第7号住居跡出土遺物2



第12図 第11号掘立柱建物跡

第11号掘立柱建物柱穴一覧表

No	形状	規模(直径)	深さ	No	形状	規模(直径)	深さ
P1	円形	102 × 105	62	P2	楕円形	86 × (40)	65

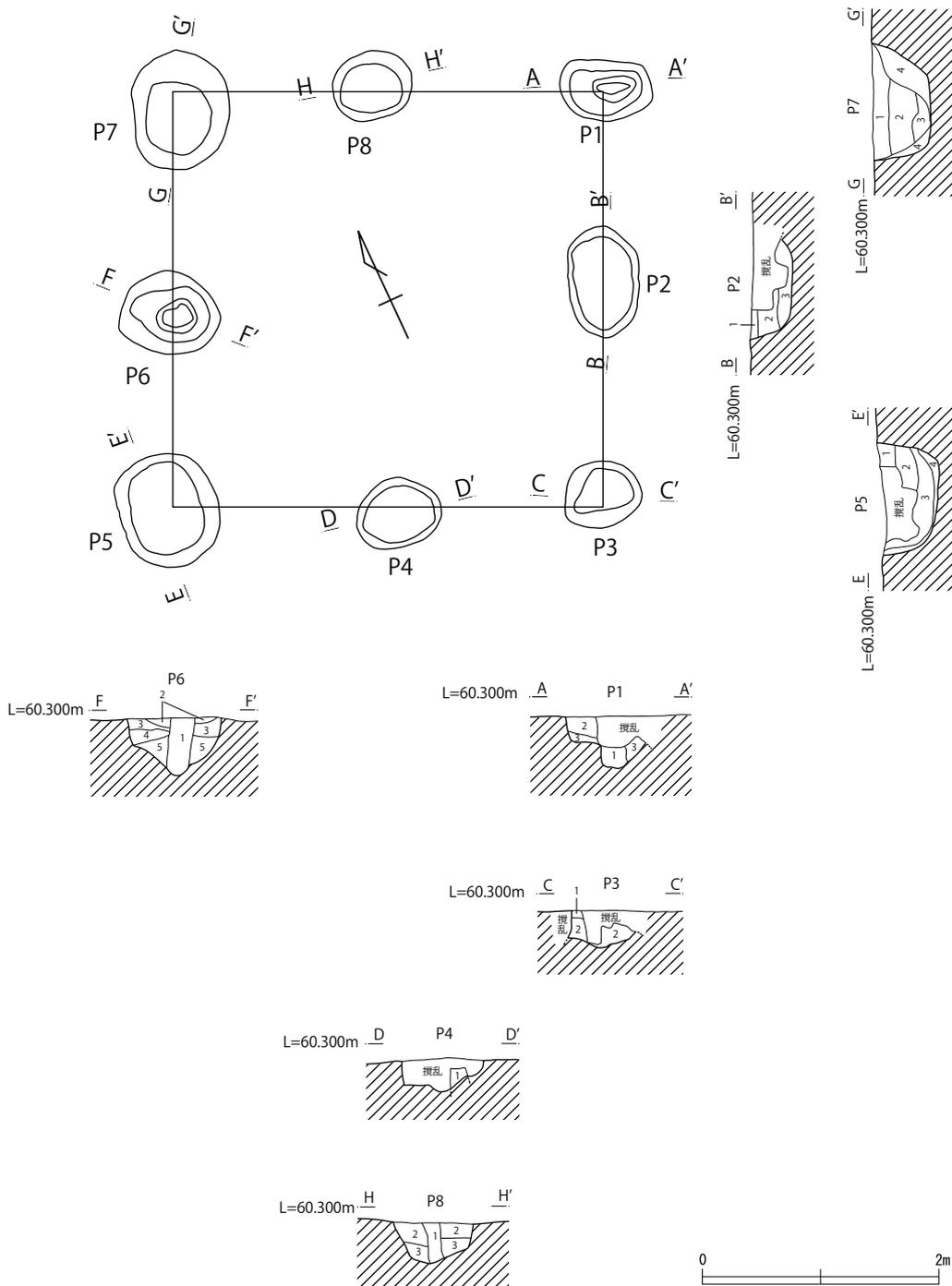
※規模は南北×東西、単位は cm、( ) 内は残存部分

### 掘立柱建物跡

#### 第11号掘立柱建物跡(第12図)

本遺構は、調査区A区中央のO-4グリッドで検出された。第6号住居跡と重複し、それを破壊する。大部分は調査区外のため詳細は不明である。

同遺跡から検出されている他の掘立柱建物跡の柱穴間から推測するに南北は4ないし5間だと考えら



第 13 図 第 12 号掘立柱建物跡

第 12 号掘立柱建物柱穴一覧表

No	形状	規模 (直径)	深さ	No	形状	規模 (直径)	深さ
P1	楕円形	56 × 72	43	P5	楕円形	98 × 83	48
P2	楕円形	88 × 64	38	P6	円形	80 × 74	52
P3	円形	55 × 67	34	P7	楕円形	96 × 85	51
P4	円形	58 × 73	24	P8	円形	57 × 68	37

※規模は南北×東西、単位は cm、( ) 内は残存部分

(SB-12 P1)		
1	黒褐色土層	ローム粒・炭化物を少量含有。しまりやや不良
2	黒褐色土層	ローム粒・炭化物・焼土を少量含む
3	茶褐色土層	ローム粒を多く含む。しまり良

(SB-12 P2)		
1	黒褐色土層	ローム粒・ロームブロックを多く含む。しまり良
2	暗黄褐色土層	ロームを主体とする層。しまり良
3	黒褐色土層	第1層に類似。ローム含有は第1層より多い。しまり良

(SB-12 P3)		
1	黒褐色土層	ローム粒・炭化物を少量含む。しまり良
2	黒褐色土層	ローム粒・ロームブロックが偏在している。しまり良

(SB-12 P4)		
1	黒褐色土層	ローム粒・ロームブロックを多量に含有。しまり良

(SB-12 P5)		
1	黒褐色土層	ローム粒・ロームブロックを少量含む。しまり良
2	黒褐色土層	ローム粒・ロームブロックをほとんど含まない
3	黒褐色土層	第1層に類似。しまり良
4	暗黄褐色土層	ロームを主体とし、固い

(SB-12 P6)		
1	黒褐色土層	ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む。しまりやや不良。柱痕
2	暗黄褐色土層	ローム粒・ロームブロックを多く含む。しまり良
3	黒褐色土層	ローム粒・ロームブロックを少量含む
4	暗黄褐色土層	ロームを主体とする。しまり良
5	黒褐色土層	第3層に類似。ローム含有はやや多い。しまり良

(SB-12 P7)		
1	黒褐色土層	ローム含有が少なく、黒色土が中心。しまりやや不良
2	黒褐色土層	ロームブロックを少量含む。しまり良
3	黒色土層	含有物はほとんどない。固い
4	暗黄褐色土層	ロームを主体とする層。しまり良

(SB-12 P8)		
1	黒褐色土層	ローム粒を少量含む。しまりやや不良。柱痕
2	暗黄褐色土層	ローム粒の含有多し。しまりやや不良
3	黒褐色土層	ローム粒・ロームブロックを含有。しまり良

れる。南北長は 7.50m を測る。主軸方向はおそらく N - 27° - E を指す。柱穴は円形と楕円形の 2 基のみ検出され、柱痕はどちらからも検出されなかった

遺物は出土していない。

#### 第 12 号掘立柱建物跡 (第 13 図)

本遺構は、調査区 A 区中央やや南側の Q・R - 5 グリッドで検出された。2 × 2 間の側柱建物である。

全体の規模は梁行・梁行長ともに 3.50m を測る。主軸方向は N - 25° - E を指す。柱穴は楕円形および円形で構成され、柱穴間は東西、南北ともに 1.70m を基本とする。柱痕は、P 6、8 で検出されており、直径 1.00 ~ 2.00 m 程度の木材を使用していたものと考えられる。

遺物は出土していない。

#### 第 13 号掘立柱建物跡 (第 14 図)

本遺構は、調査区 A 区中央やや南側の R - 5 グリッドで検出された。調査区外にも柱穴がおよんでいするため全体の規模は確定できないが、おそらく 2 × 3 間以上の側柱建物と思われる。

規模は南北長が 5.30m を測る。東西長は不明である。主軸方向は N - 21° - E を指す。柱穴は楕円形を主体とし、柱穴間は東西が 2.20m、南北が 1.80 m を基本とする。柱痕は、どの柱穴からも検出されなかった。

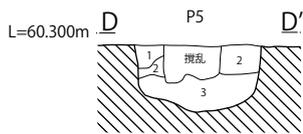
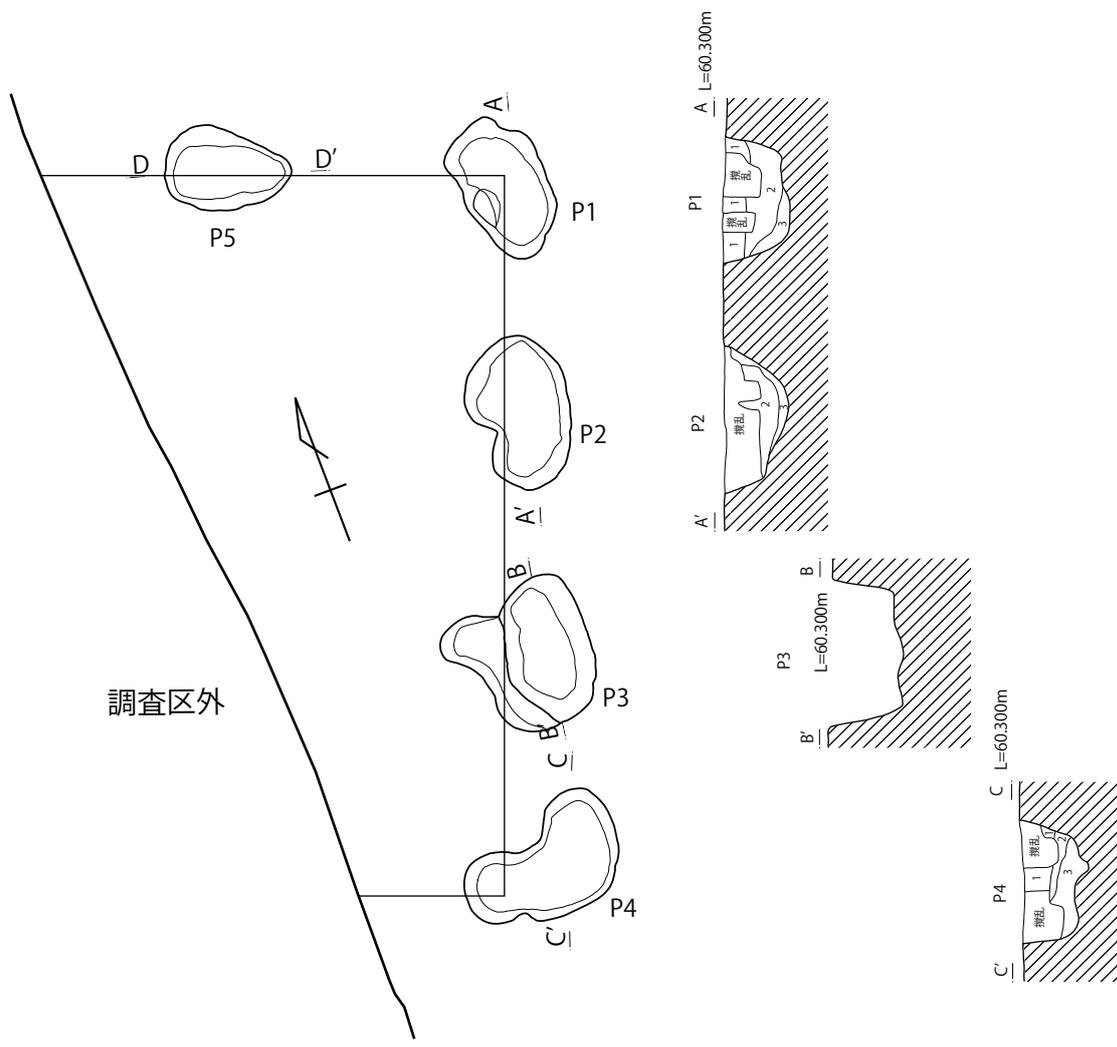
遺物は出土していない。

#### 第 14 号掘立柱建物跡 (第 15 図)

本遺構は、調査区 A 区南側の S - 5 グリッドで検出された。第 7 号住居跡と重複し、それを破壊する。調査区外にも柱穴がおよんでいるため全体の規模は確定できないが、おそらく 2 × 3 間以上の側柱建物と思われる。

規模は南北長が 5.00m を測る。東西長は不明である。主軸方向は N - 23° - E を指す。柱穴は円形を主体とし、柱穴間は東西、南北ともに 1.60 m を基本とする。柱痕は、どの柱穴からも検出されなかった。P3、4 は第 7 号住居と重複しているため検出できなかった。

遺物は出土していない。



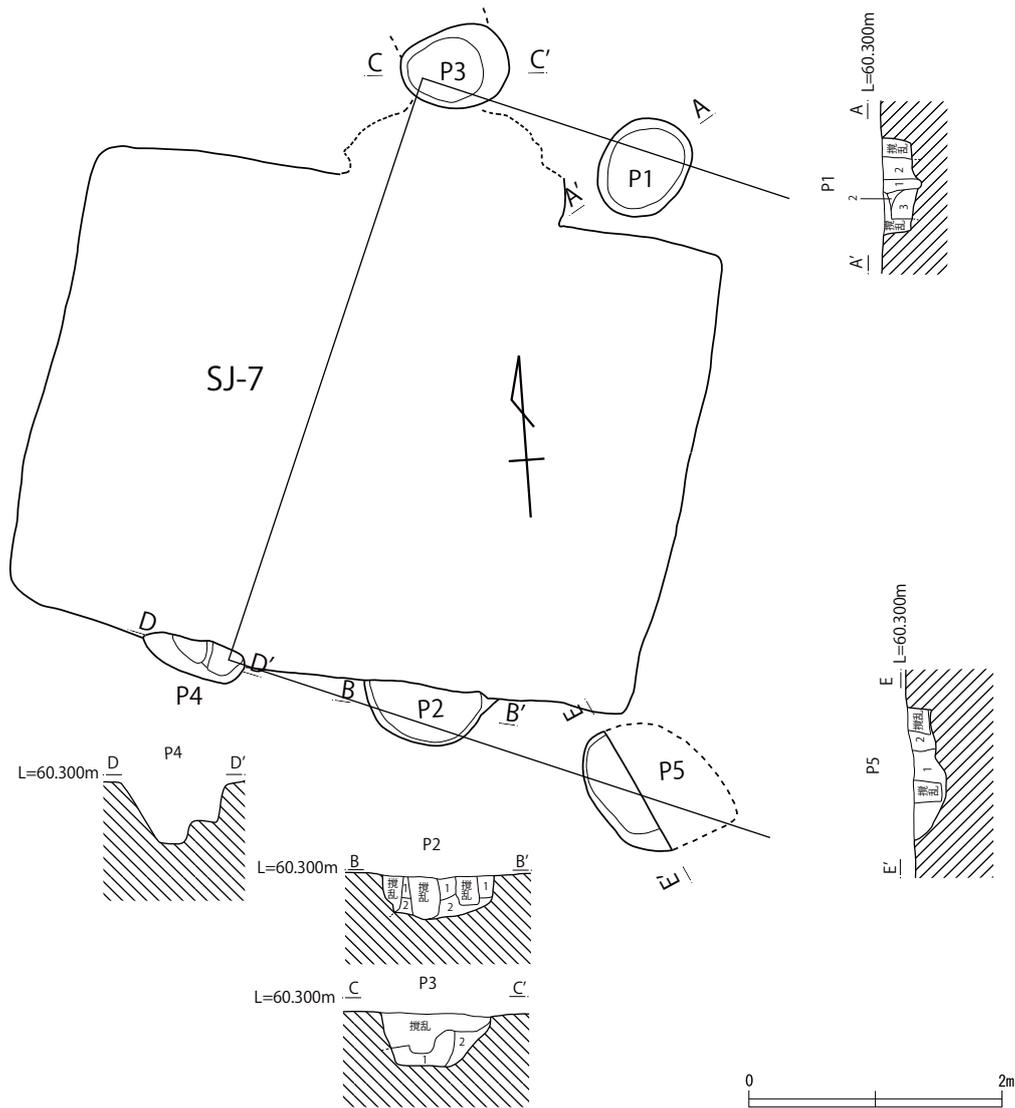
- (SB-13 P1・P2)
- 1 黒褐色土層      ローム粒・ロームブロック (小) を少量含む。しまりやや不良
  - 2 黒褐色土層      第1層より黒色が強い。ロームブロックは第1層より多い
  - 3 黒褐色土層      多量のロームブロックを含む。しまり良
- (SB-13 P4)
- 1 黒褐色土層      ローム粒をわずかに含む。しまり不良
  - 2 黒褐色土層      ローム粒・ロームブロックを少量含有
  - 3 黒褐色土層      ロームブロックを多く含む。しまり良
- (SB-13 P5)
- 1 暗黄褐色土層      ロームブロックを多量に含む。しまりやや不良
  - 2 黒褐色土層      黒色の強い層。ローム粒を少量含有
  - 3 黒褐色土層      ロームブロックを少量含む。しまり不良



第 12 号掘立柱建物柱穴一覧表

No	形状	規模 (直径)	深さ	No	形状	規模 (直径)	深さ
P1	楕円形	116 × 68	61	P4	楕円形	85 × 128	55
P2	楕円形	116 × 83	53	P5	楕円形	68 × 88	45
P3	楕円形	110 × 91	58				

※規模は南北×東西、単位は cm



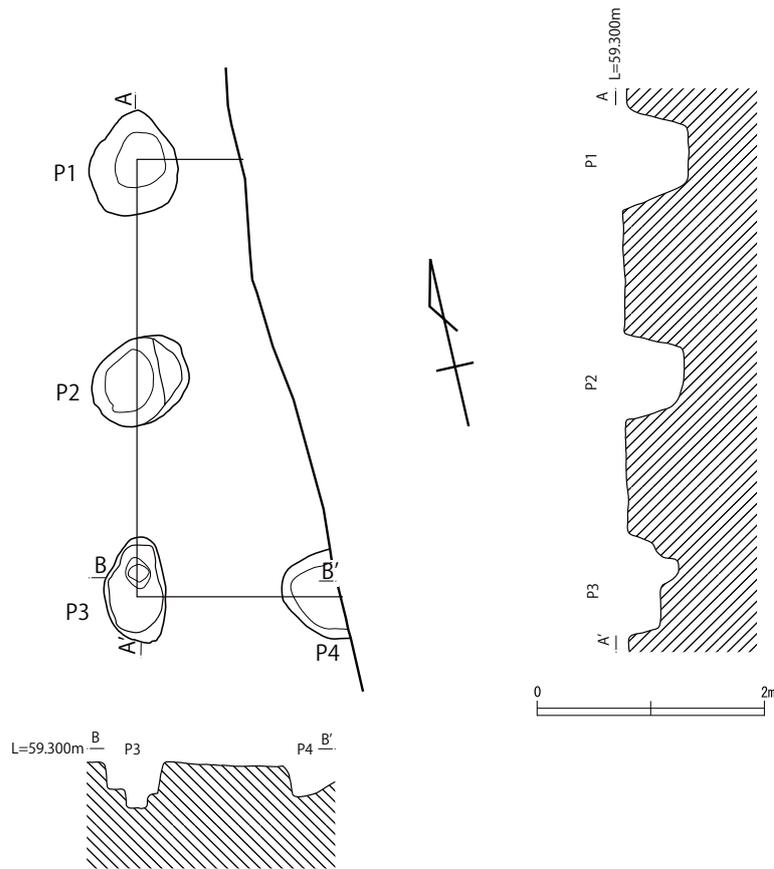
- (SB-14 P1)
- 1 黒褐色土層      ローム粒・焼土粒・炭化物を含む。しまり不良。柱痕
  - 2 黒褐色土層      ロームブロック混入
  - 3 黒褐色土層      1・2層に比して、焼土を多く含む
- (SB-14 P2)
- 1 黒褐色土層      ローム粒・焼土粒・炭化物を多く含む。しまりやや不良
  - 2 黒褐色土層      ロームブロックおよび粘土塊を含む。しまりやや不良
- (SB-14 P3)
- 1 黒褐色土層      ローム粒・ロームブロックを多く含む。しまり不良
  - 2 黒褐色土層      第1層よりローム含有少なく、しまり良
- (SB-14 P5)
- 1 黒褐色土層      ローム粒・ロームブロックを含む。やや黄色が強い。しまり良
  - 2 黄褐色土層      多量のロームブロックを含有。しまりやや不良

### 第 15 図 第 14 号掘立柱建物跡

第 14 号掘立柱建物柱穴一覧表

No	形状	規模 (直径)	深さ	No	形状	規模 (直径)	深さ
P1	円形	76 × 71	29	P4	楕円形	(47) × 93	33
P2	楕円形	65 × 86	42	P5	楕円形	100 × 106	23
P3	楕円形	(31) × 63	51				

※規模は南北×東西、単位は cm、( ) 内は残存部分



第 16 図 第 15 号掘立柱建物跡

第 15 号掘立柱建物柱穴一覧表

No	形状	規模 (直径)	深さ	No	形状	規模 (直径)	深さ
P1	楕円形	89 × 79	58	P4	楕円形	92 × 55	32
P2	円形	88 × 76	25	P5	楕円形	81 × (50)	50

※規模は南北×東西、単位は cm、( ) 内は残存部分

### 第 15 号掘立柱建物跡 (第 16 図)

本遺構は、調査区 A 区南側の U-5 グリッドで検出された。調査区外にも柱穴がおよんでいるため全体の規模は確定できないが、2 × 1 間以上の側柱建物と思われる。

規模は南北長が 3.80 m を測る。東西長は不明である。主軸方向は N-13°-E を指す。柱穴は円形を主体とし、柱穴間は東西、南北ともに 1.90m を基本とする。柱痕は、P1、P2 で検出している。

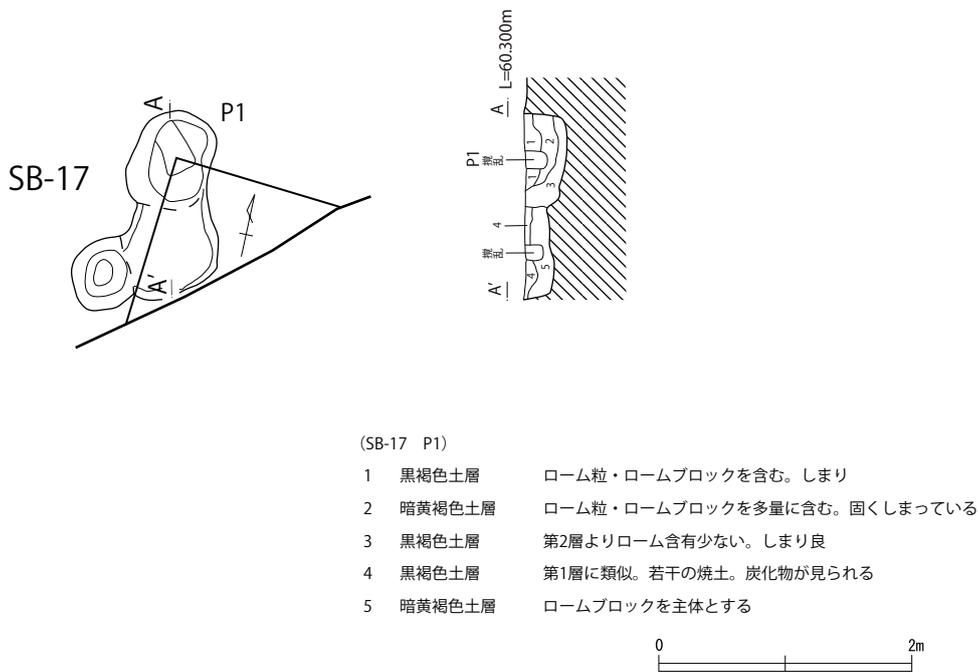
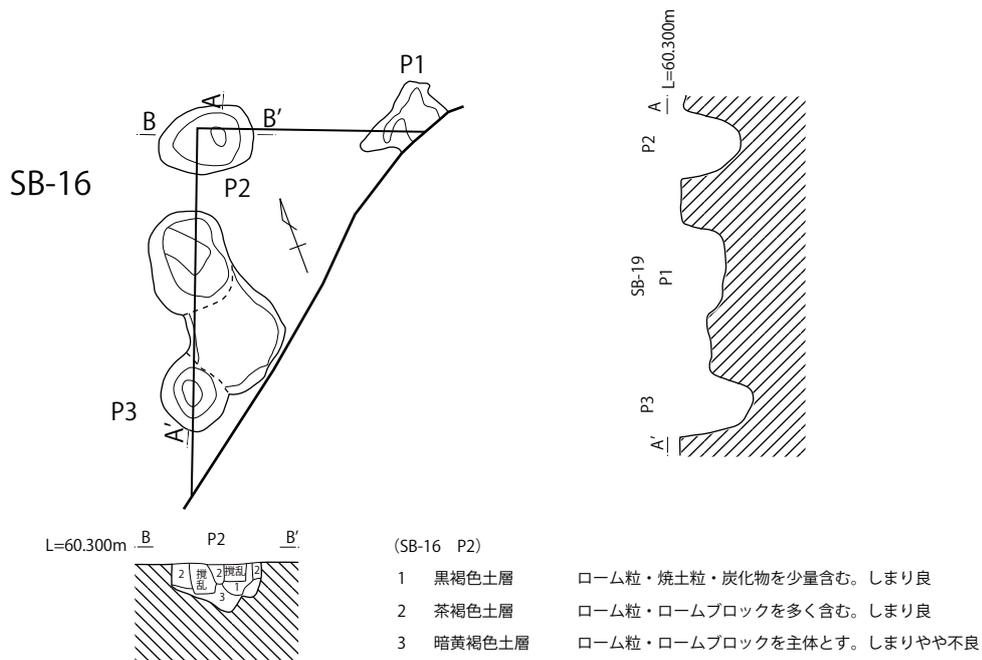
遺物は出土していない。

### 第 16 号掘立柱建物跡 (第 17 図)

本遺構は、調査区 A 区南側の V-5 グリッドで検出された。第 17・18・19 号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明。調査区外にも柱穴がおよんでいるため全体の規模は確定できない。

規模は南北長、東西長ともに不明である。主軸方向は N-20°-E を指す。柱穴は円形、楕円形、方形で形成されており、柱穴間は東西が 1.60m、南北が 2.00m を測る。柱痕は、どの柱穴からも検出されなかった。

遺物は出土していない。



第 17 図 第 16・17号掘立柱建物跡

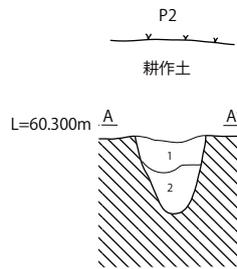
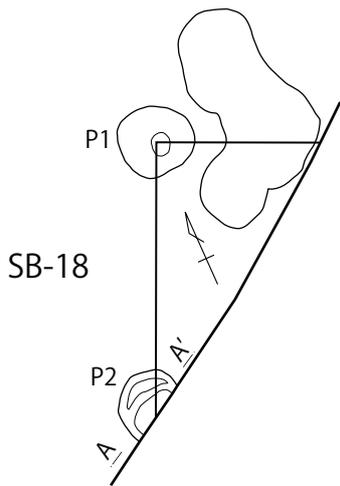
第 16 号掘立柱建物柱穴一覧表

No	形状	規模 (直径)	深さ	No	形状	規模 (直径)	深さ
P1	不定形	(41) × 75	18	P3	円形	59 × (50)	56
P2	楕円形	52 × 76	39				

第 17 号掘立柱建物柱穴一覧表

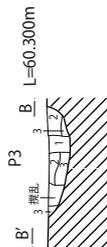
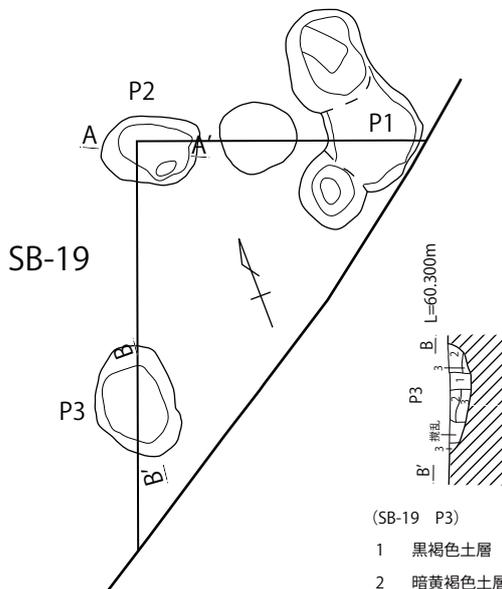
No	形状	規模 (直径)	深さ
P1	長方形	(79) × 63	54

※規模は南北×東西、単位は cm、( ) 内は残存部分



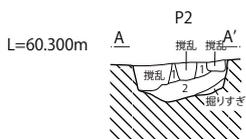
(SB-18 P2)

- 1 黒褐色土層      ローム粒・ロームブロックを少量含有。しまりやや不良
- 2 黒褐色土層      第1層よりロームを多く含む



(SB-19 P3)

- 1 黒褐色土層      ローム粒・炭化物・少量のロームブロックを含む。しまりやや不良。柱痕
- 2 暗黄褐色土層      ロームブロックを多量に含む
- 3 暗黄褐色土層      第2層より色調がくすんでいる。粒子が粗い



(SB-19 P2)

- 1 暗黄褐色土層      多量のロームブロックを含む。しまり良
- 2 暗黄褐色土層      第1層よりくすんだ感じ。しまり良



第 18 図 第 18・19 号掘立柱建物跡

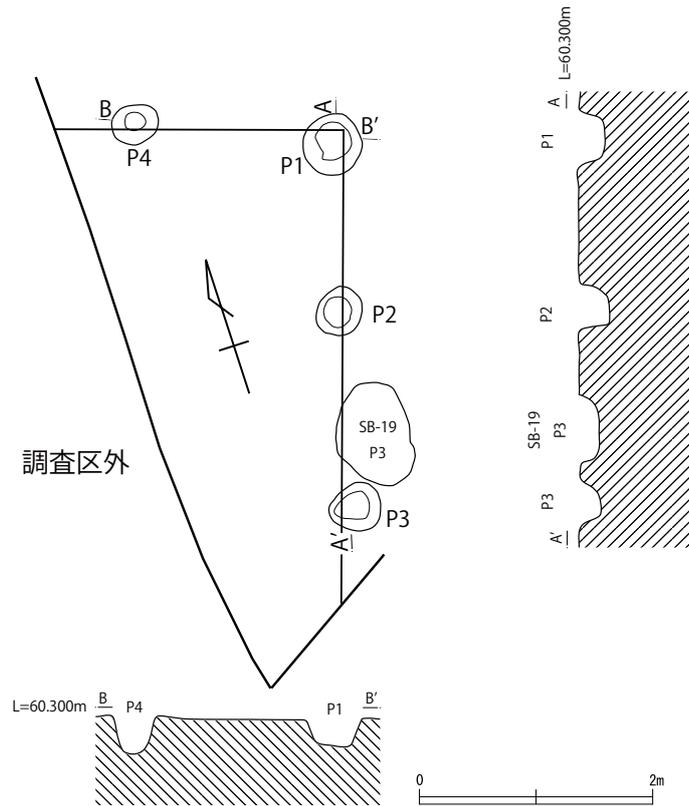
第 18 号掘立柱建物柱穴一覧表

No	形状	規模 (直径)	深さ	No	形状	規模 (直径)	深さ
P1	円形	53 × 59	51	P2	円形	(40) × 51	53

第 19 号掘立柱建物柱穴一覧表

No	形状	規模 (直径)	深さ	No	形状	規模 (直径)	深さ
P1	楕円形	(72) × 72	25	P3	楕円形	92 × 65	20
P2	楕円形	59 × 80	34				

※規模は南北×東西、単位は cm、( ) 内は残存部分



第 19 図 第 20 号掘立柱建物跡

第 20 号掘立柱建物柱穴一覧表

No	形状	規模 (直径)	深さ	No	形状	規模 (直径)	深さ
P1	円形	51 × 50	23	P3	円形	40 × 44	19
P2	円形	40 × 41	26	P4	円形	34 × 40	33

※規模は南北×東西、単位は cm、( ) 内は残存部分

#### 第 17 号掘立柱建物跡 (第 17 図)

本遺構は、調査区 A 区南側の V-5 グリッドで検出された。第 17・18・19 号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明。調査区外にも柱穴がおよんでいるため全体の規模は確定できない。

規模は南北長、東西長ともに不明である。主軸方向は N-6°-E を指す。柱穴は円形が主体で、柱穴間は東西が不明、南北が 2.20m を測る。柱痕は、どの柱穴からも検出されなかった。

遺物は出土していない。

#### 第 18 号掘立柱建物跡 (第 18 図)

本遺構は、調査区 A 区南側の V-5 グリッドで検出された。第 17・18・19 号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明。柱穴 1 つのみの検出でほとんどの柱穴が調査区外のため規模、柱穴間距離等は不明である。推定であるが、主軸方向は N-25°-E を指すと思われる。柱痕は、検出されていない。

遺物は出土していない。

### 第 19 号掘立柱建物跡 (第 18 図)

本遺構は、調査区 A 区南側の V-5 グリッドで検出された。第 17・18・19 号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明。調査区外にも柱穴がおよんでいるため全体の規模は確定できない。

規模は南北長、東西長ともに不明である。主軸方向は  $N-20^{\circ}-E$  を指す。柱穴は楕円形が主体で、柱穴間は東西が 1.80m、南北が 2.10m を測る。柱痕は、どの柱穴からも検出されなかった。

遺物は出土していない。

### 第 20 号掘立柱建物跡 (第 19 図)

本遺構は、調査区 A 区南側の V-5 グリッドで検出された。第 19 号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明。調査区外にも柱穴がおよんでいるため全体の規模は確定できない。

規模は南北長、東西長ともに不明である。主軸方向は  $N-19^{\circ}-E$  を指す。柱穴は円形が主体で、柱穴間は東西が 1.70m、南北が 1.60m を測る。柱痕は、どの柱穴からも検出されなかった。

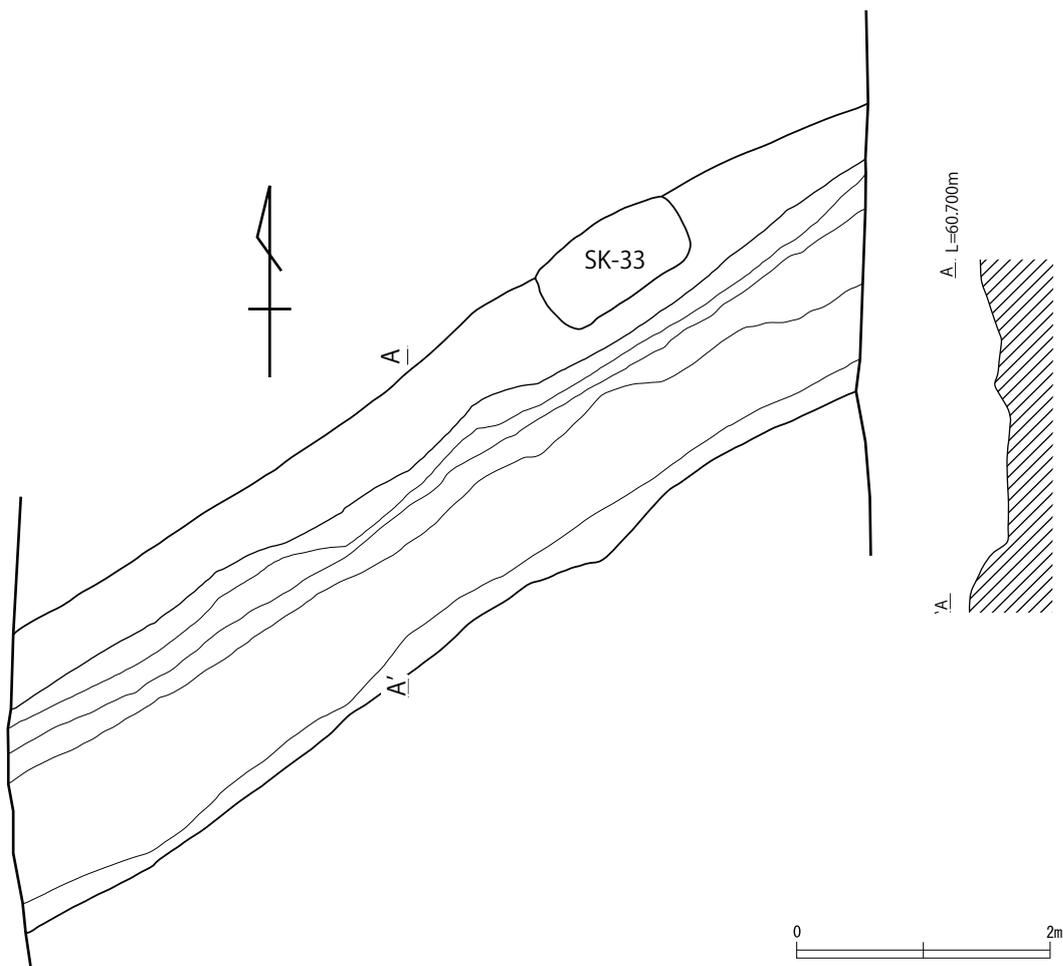
遺物は出土していない。

### 溝

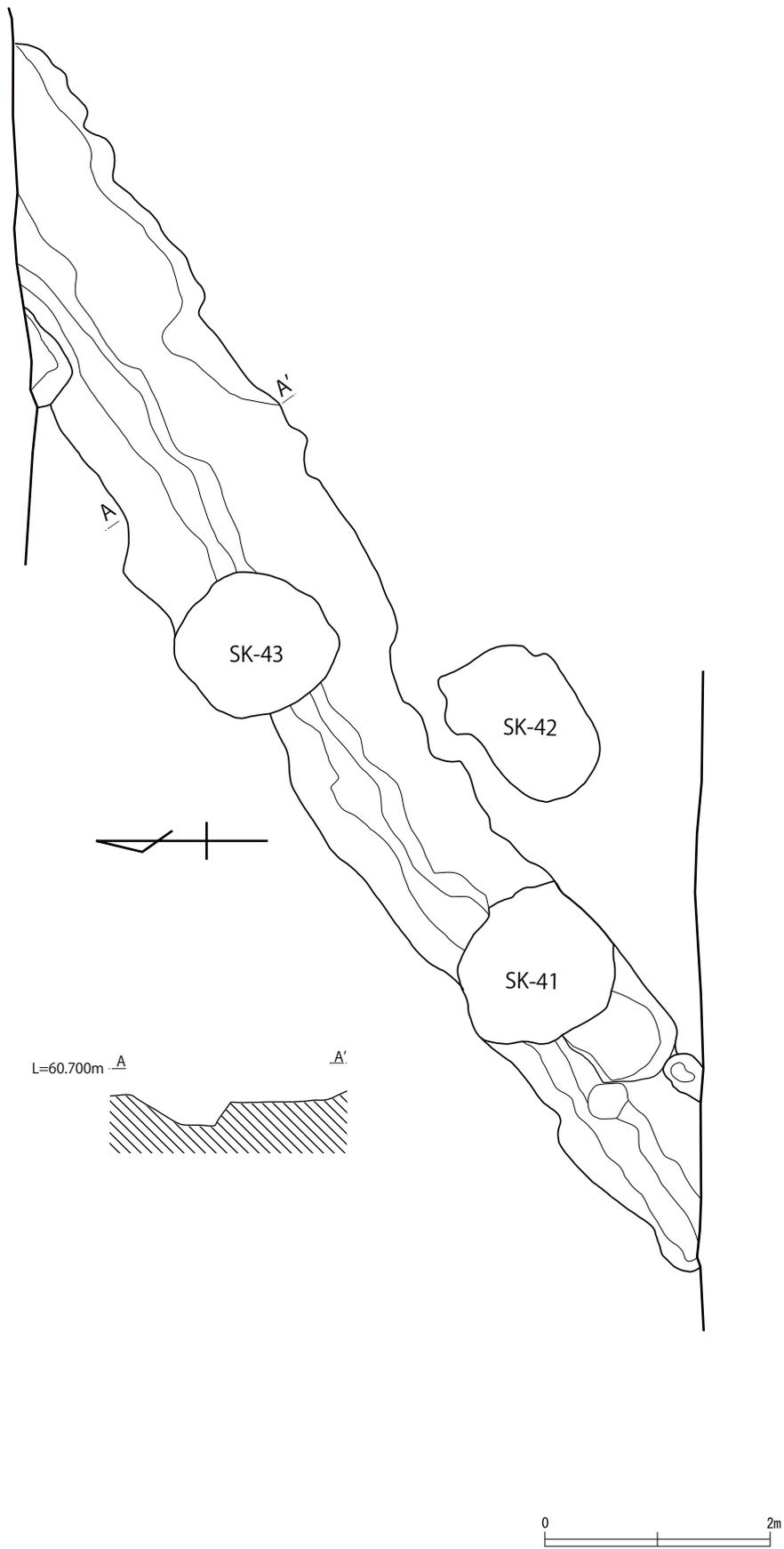
#### 第 1 号溝 (第 20 図)

本遺構は、調査区 A 区北側の H-5 グリッドで検出され、西南から北東に伸びるものが検出されている。

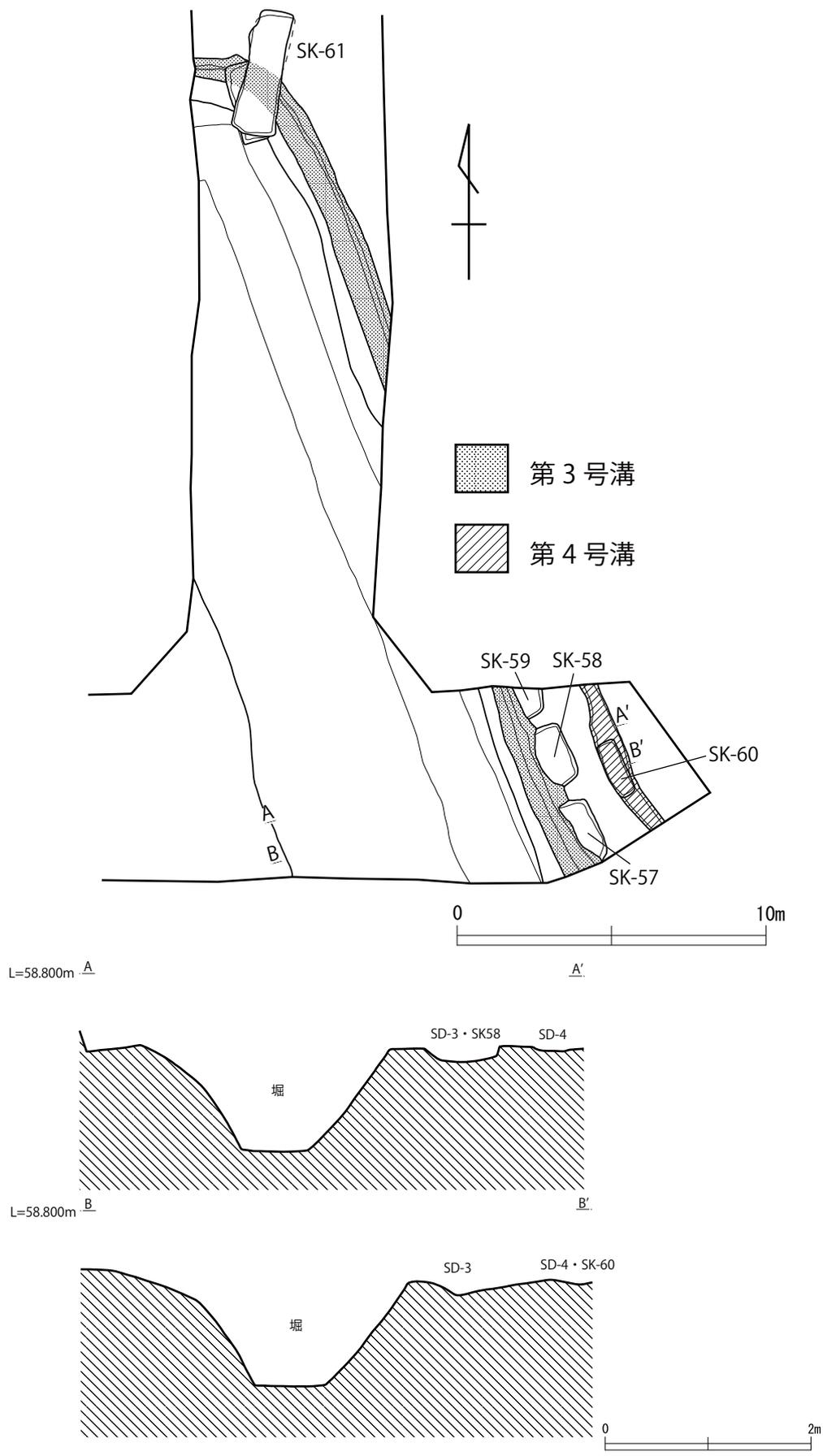
規模は、検出されているところで全長 7.92 m、幅 2.00 ~ 2.20 m、深さ 0.27 ~ 0.32 m を測る。延長



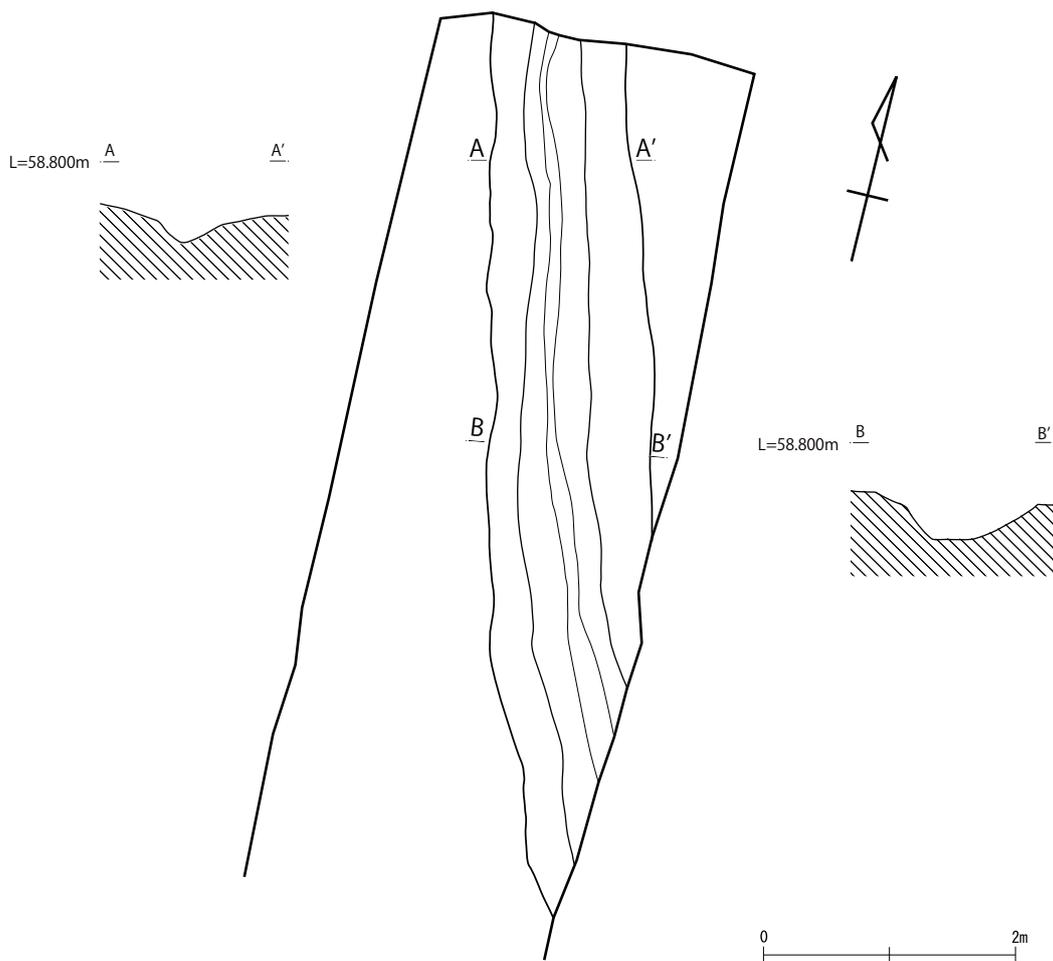
第 20 図 第 1 号溝



第 21 図 第 2 号溝



第22図 第3・4号溝・第57～60号土壌



第 23 図 第 5 号溝

線上に第 2 号溝が検出しており、おそらく繋がると思われる。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 2 号溝 (第 21 図)

本遺構は、調査区 A 区北側の F - 7・8 グリッドで検出され、西南から北東に延びるものが検出されている。

規模は、検出されているところで全長 11.00 m、幅 1.20 ~ 1.90 m、深さ 0.25 ~ 0.30 m を測る。延長線上に第 1 号溝が検出しており、おそらく繋がると思われる。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 3 号溝 (第 22 図)

本遺構は、調査区 B 区東側の E - 27 グリッドで検出され、南東から北東方向に延びるものが検出されている。

規模は、検出されているところで全長 2.70 m、幅 0.77 m、深さ 0.36 m ~ 0.41 m を測る。検出された堀に沿って伸びているため、堀に付随する遺構と思われる。

出土遺物はなく、遺構の詳細は不明である。

#### 第4号溝 (第22図)

本遺構は、調査区B区東側のE-26グリッドで検出され、南東から北東方向に延びるものが検出されている。

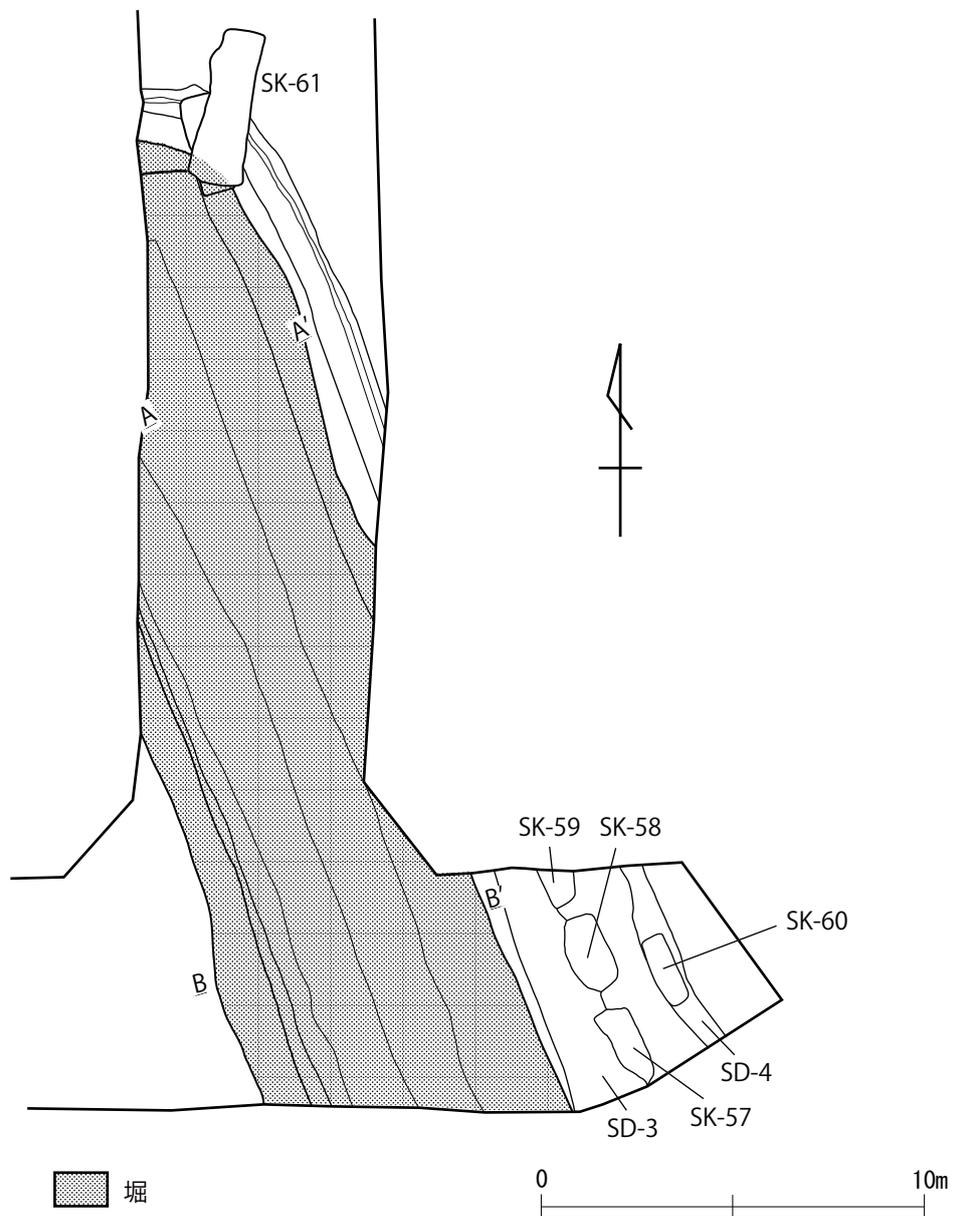
規模は、検出されているところで全長1.60m、幅0.20～0.35m、深さ0.05m～0.11mを測る。延長線上に第5号溝が検出されており、おそらく繋がると思われる。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第5号溝 (第23図)

本遺構は、調査区B区東側のB-26グリッドで検出され、南東から北東方向に延びるものが検出されている。

規模は、検出されているところで全長7.12m、幅1.20～1.30m、深さ0.71m～0.85mを測る。延



第24図 第2号堀

長線上に第3号溝が検出されており、おそらく繋がると思われる。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

## 堀

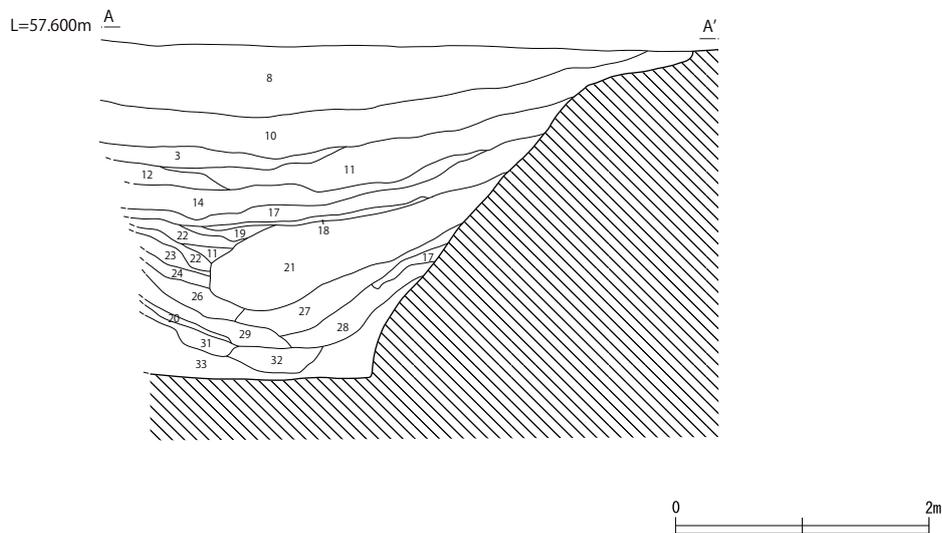
### 第2号堀 (第24・25・26図)

本遺構は、調査区B区東側のD・E-26グリッドで検出され、南東から北東方向に延びるものが検出されている。

規模は検出されているところで、全長27.00m、幅7.60m、深さ2.51m～2.93mを測る。堀の形状は、葉研掘りである。北東部が直角にカーブしているが、調査担当者の見地として西に伸びるというよりも、途切れる感じが強い。

土層の特徴として、堀B-B'をみるに、埋没の時間差は、第1層から第6層、第7層から第15層、第16層から第19層、第20層から第30層、第31層から第34層の5段階が見られる。明確にわかることは第1層から第6層は現代の地境溝のフク土であることだけで、他の層については出土遺物等が少いため時代については不明である。ただ、第32層において、硬化面が検出されていることから、堀が造成され、多少埋没した後に、堀の底を地均ししていると考えられるため、堀としての機能はある程度長い間使われていたと推測できる。

出土遺物は、須恵器、土師器の破片の他、緑泥片岩で作られた板碑の一部などが出土しているが、どれも図示することが困難な破片のため、掲載はしなかった。

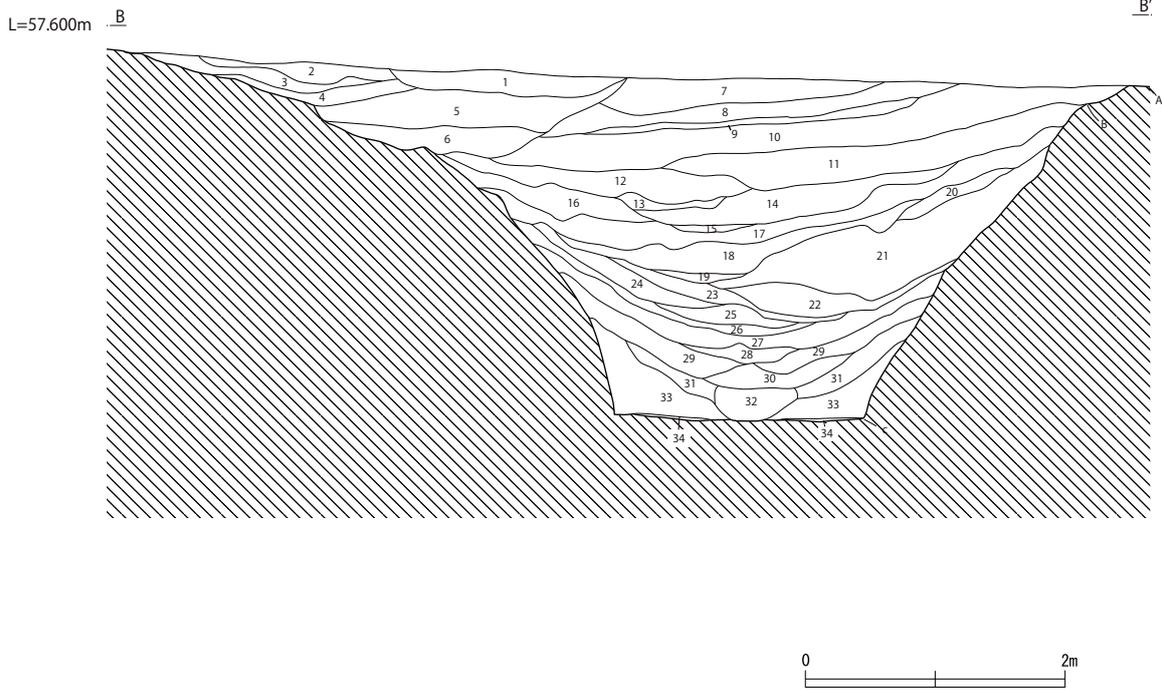


(堀A)

- 3 黒褐色土層 第2層よりローム含有が多いが、大きな違いはない
- 11 黒褐色土層 第10・12層間の黒色土を多く含む

※ 基本的には堀Bの土層注に準ずるが、3・11層のみ違いがある

第25図 第2号堀A断面図



(堀B)

1	暗茶褐色土層	粒子粗く、ザラザラしている。ローム粒を多く含む。しまり不良	17	黒褐色土層	ローム粒、ロームブロック、黒色土塊を含む。しまりやや不良
2	黒褐色土層	ローム粒、ロームブロック、焼土粒、炭化物を少量含む。しまりやや不良	18	暗黄褐色土層	ローム粒を主体とする層。しまり不良
3	暗黄褐色土層	多量のロームブロックが混ざる。しまり不良	19	黒褐色土層	やや砂質。しまり良
4	黒褐色土層	第3層より、ロームブロックの含有が少ない。しまり不良	20	暗黄褐色土層	ロームブロックを多量に含有。しまり不良
5	黒褐色土層	上層の第1層よりしまりが良く、ロームブロックの含有が少ない	21	黒褐色土層	かなり黒色が強い。ロームブロックをまだらに混入する。しまり良、かたい
6	暗茶褐色土層	第5層より色調が明るい。粒子粗く、ザラザラしている。しまり不良	22	暗黄褐色土層	第17層に類似。しまり良
7	暗茶褐色土層	粒子が粗い。ローム粒、焼土粒等が混入。しまりやや不良	23	黒褐色土層	ロームブロック、黒色土塊を含有。しまり良
8	暗茶褐色土層	第7層より色調が暗い。黒色土を混在させる。しまり良	24	暗黄褐色土層	ローム粒、ロームブロックを主体とする。しまり不良
9	暗黄褐色土層	ローム粒、ロームブロックを多量に含む。しまり良	25	黒褐色土層	ローム粒、ロームブロックを多く含む。しまりやや不良
10	黒褐色土層	ローム粒、ロームブロックを少量に含む。しまり良	26	黒褐色土層	黒色が強く、ローム含有が少ない。砂質。しまり良
11	暗黄褐色土層	多量のローム粒を含有。しまりやや不良	27	暗黄褐色土層	ローム粒、ロームブロックを主体とする。しまり不良
12	黒褐色土層	黒い炉の強い層。ローム粒、ロームブロックが混在する。しまりやや不良	28	黒褐色土層	ローム粒を多く含む。しまり良
13	暗黄褐色土層	ローム粒を多量に含有。しまり不良	29	黒褐色土層	黒色土とロームの混合層。下部にロームブロックが多い
14	黒褐色土層	ローム粒、ロームブロック、黒色土粒、黒色土塊を含む。しまり不良	30	暗黄褐色土層	ロームブロックを主体とする。しまり不良
15	黒褐色土層	汚泥状の層。砂質	31	暗黄褐色土層	ローム粒、小粒のロームブロックを主体とする。しまり不良
16	暗黄褐色土層	ローム粒、ロームブロックを多量に含有。しまり不良	32	暗黄褐色土層	かたくしまっており、道状を呈する。ロームブロックを主体とする
			33	暗黄褐色土層	第32層より暗い。ローム粒、小粒のロームブロックを主体とする。しまり不良
			34	黒褐色土層	砂質。しまり不良。粘性あり

第 26 図 第 2 号堀 B 断面図

## 集石土壙

### 第1号集石土壙 (第27図)

本遺構は、調査区B区西側のF-12グリッドに位置する。

比熱痕跡のある礫が東西に長い不整楕円形に、疎らに分布している。規模は南北1.15m、東西径1.45mを測る。掘り込みは検出されなかった。土器の出土は無く、時期は不明である。

### 第2号集石土壙 (第28図)

本遺構は、調査区B区西側のF-13グリッドで検出された。北側に第3・4号集石土壙が位置する。

覆土上層の北と南に、比熱痕跡のある礫がブロックをなしている。掘り込みは楕円形でプランを呈し、長径0.8m、短径0.67m、深さ18cm前後を測る。断面形は鍋底状を呈している。出土土器は無く、時期は不明。

### 第3号集石土壙 (第28図)

本遺構は、調査区B区西側のF-13グリッドで検出された。南側に第2号集石土壙、北側に第4号集石土壙が位置する。

掘り込み中央から西側に大形礫が分布する。比熱痕跡は弱い。掘り込みはやや不整な円形を呈し、規模は長径1.12m、短径1.0m、深さ10cm前後を測る。出土土器は無く、時期は不明である。

### 第4号集石土壙 (第29図)

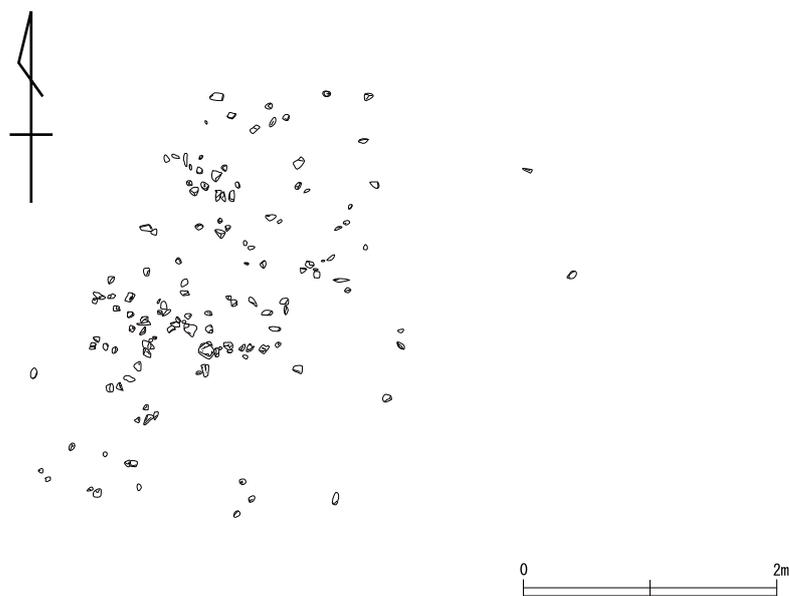
本遺構は、調査区B区西側のF-13グリッドで検出された。南側に第3号集石土壙が位置する。

覆土上層に、比較的大きな焼礫が分布する。掘り込みは不整楕円形を呈し、規模は長径0.65m、短径0.53m、深さ10cm前後を測る。出土土器は無く、時期は不明である。

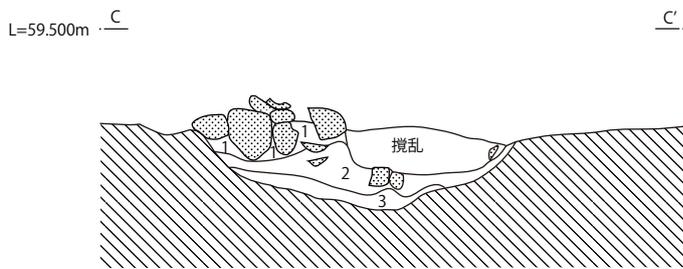
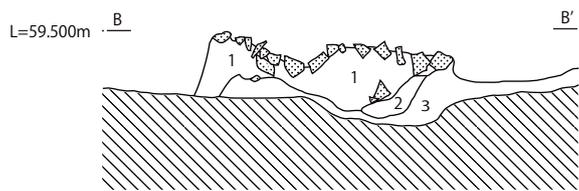
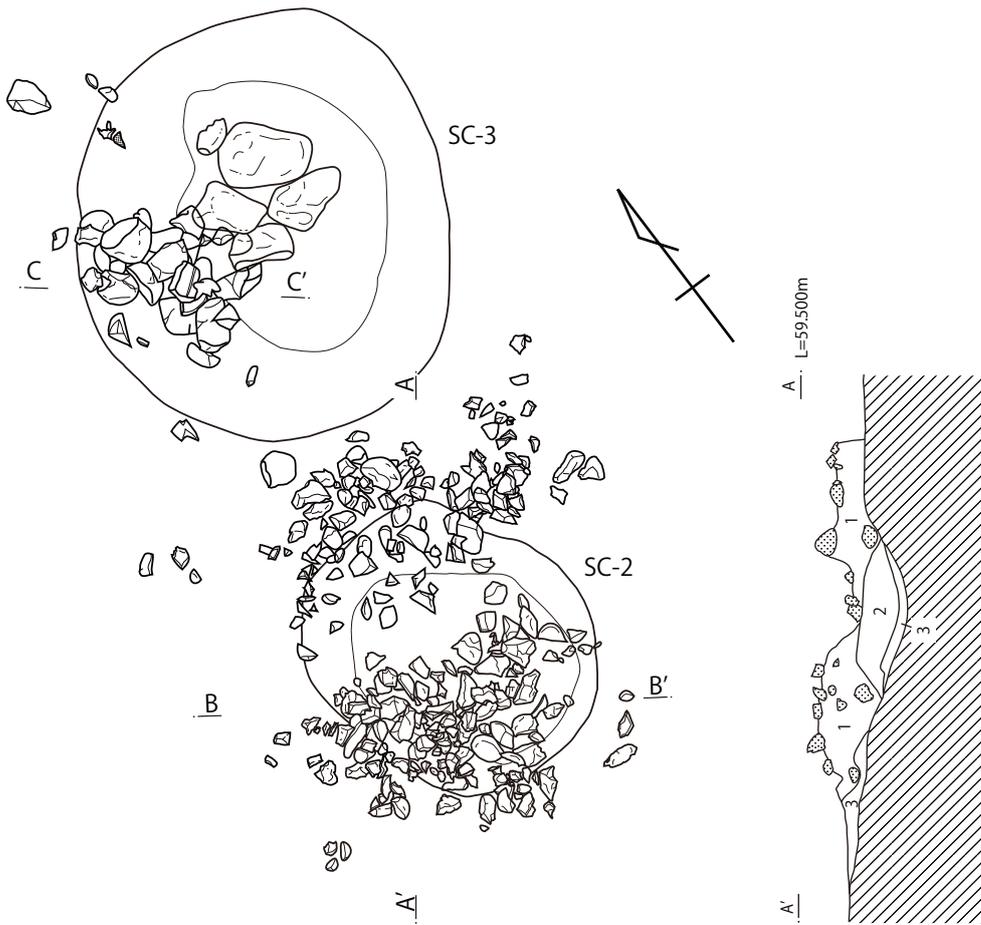
### 第5号集石土壙 (第29図)

本遺構は、調査区B区西側のF-13グリッドで検出された。西側に第2～4号集石土壙が位置する。

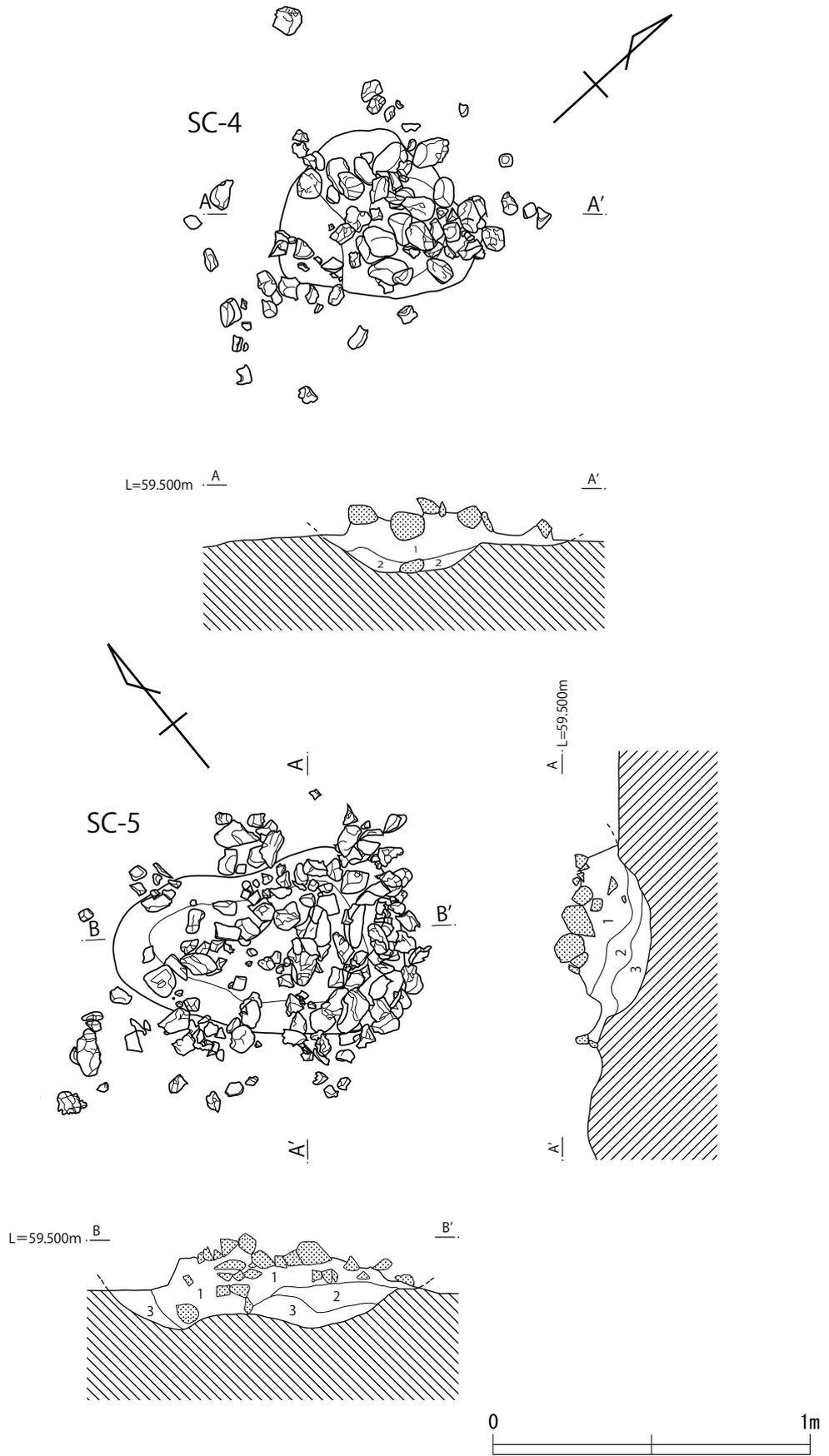
覆土上層から下層にかけて、焼礫が密に分布する。掘り込みは不整楕円形を呈し、規模は長径0.91m、短径0.6m、深さ15cm前後を測る。出土土器は無く、時期は不明である。



第27図 第1号集石土壙



第 28 图 第 2・3 号集石土壤



第 29 图 第 4·5 号集石土壤

## 土壌

### 第3号土壌（第30図）

本遺構は、調査区A区南側のV-5グリッドで検出されたが西側半分が調査区外になる。南側には第20号掘立柱建物跡が検出されている。

平面形はおそらく円形を呈し、規模は径1.43m、深さ0.35mを測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

### 第4号土壌（第30図）

本遺構は、調査区A区南側のS-5グリッドで検出されたが、東側一部が調査区外となる。東側には第13号掘立柱建物跡が検出されている。

平面形は長方形を呈し、規模は長軸長1.65m、短軸長、1.25m、深さ0.44mを測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

### 第5号土壌（第30図）

本遺構は、調査区A区南側のR-5グリッドで検出された。東側には第13号掘立柱建物跡が検出されている。

平面形は楕円形を呈し、全体の規模は長軸長2.37m、短軸長1.45m、深さ0.23を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

### 第6号土壌（第30図）

本遺構は、調査区A区南側のR-5グリッドにあるで検出され、第12号掘立柱建物跡の中央付近に存在している。

平面形は円形を呈し、全体の規模は径1.70m、深さ0.62を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

### 第7号土壌（第30図）

本遺構は、調査区A区南側のQ-5グリッドで検出された。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長2.26m、短軸長0.95m、深さ0.72mを測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性が高い。

### 第8号土壌（第30図）

本遺構は、調査区A区南側のP-5グリッドで検出された。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長1.63m、短軸長0.90m、深さ0.59mを測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。第9号土壌と重複しているが新旧関係は不明である。

### 第9号土壌（第30図）

本遺構は、調査区A区南側のP-5グリッドで検出された。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長1.48m、短軸長0.87m、深さ0.43mを測る。

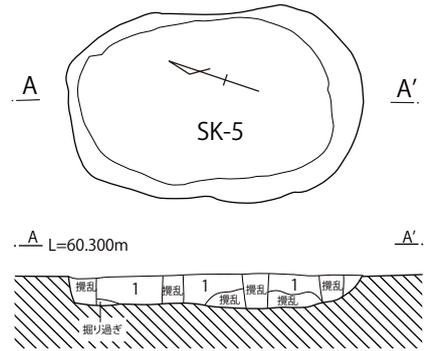
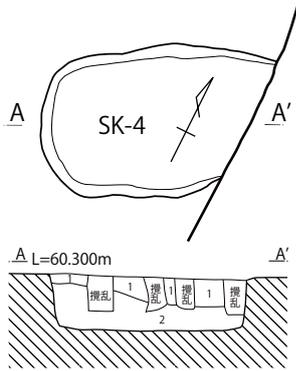
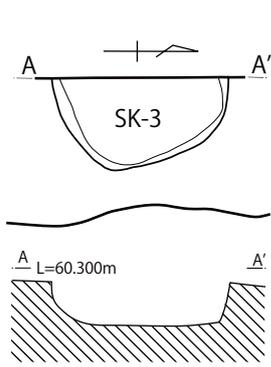
出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。第8号土壌と重複しているが新旧関係は不明である。

### 第10号土壌（第31図）

本遺構は、調査区A区南側のP-5グリッドで検出された。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長1.73m、短軸長0.73m、深さ0.20mを測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性が高い。

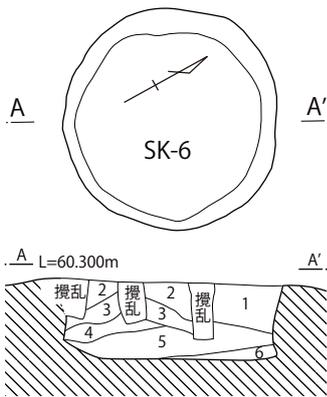


(SK-4)

(SK-5)

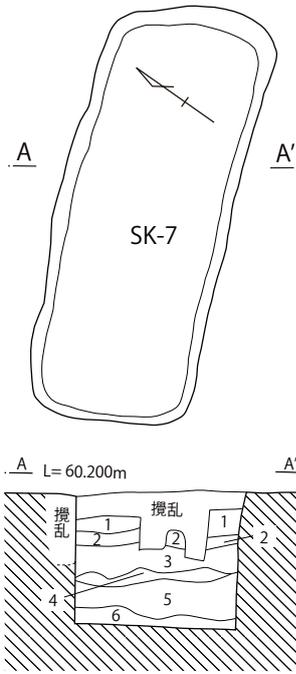
1 暗黄褐色土層 ローム粒、ロームブロックと黒色土の混合層。しまり良

1 黒褐色土層 ローム粒、ロームブロックを多量含む。しまり良



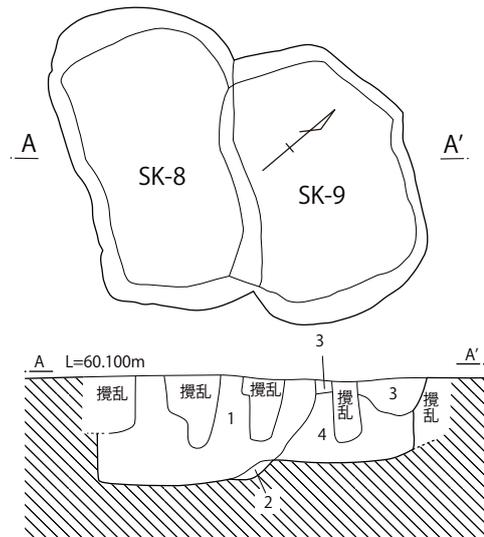
(SK-6)

- 1 黒褐色土層 ローム粒、ロームブロックを少量含む
- 2 暗黄褐色土層 ローム粒、ロームブロックを多量含む。しまり不良
- 3 暗黄褐色土層 ロームを主体とする。粘性あり
- 4 黒色土層 ローム粒をわずかに含む。しまり不良
- 5 暗黄褐色土層 第3層と同じ
- 6 黒色土層 第4層と同じ



(SK-7)

- 1 黒色土層 ローム粒、ロームブロック、炭化物を多く含む。しまり不良
- 2 暗灰色土層 ローム粒、ロームブロック (小) を多く含む。しまり不良
- 3 黒色土層 ローム粒、ロームブロックの他、褐色土をブロック状に含む
- 4 暗灰色土層 第2層と同じ
- 5 黒色土層 第3層と同じ
- 6 黒色土層 含有物なし。しまり不良



(SK-8・9)

- 1 暗灰色土層 ローム粒、ロームブロック、炭化物、黒色土ブロックを多く含む。
- 2 暗黄褐色土層 ローム粒を主体とする
- 3 暗褐色土層 ローム粒、ロームブロックを含む。しまり不良
- 4 暗褐色土層 ローム粒、ロームブロックを多く含む。しまり不良



第30図 第3～9号土壌

### 第 11 号土壙 (第 31 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の O-5 グリッドで検出された。西側には第 6 号住居跡が検出されている。平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 2.86m、短軸長 1.35m、深さ 0.77m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性が高い。

### 第 12 号土壙 (第 31 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の O-4 グリッドで検出された。東側には第 6 号住居跡が検出されている。平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.75 m、短軸長 0.66 m、深さ 0.19 m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

### 第 13 号土壙 (第 31 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の O-5 グリッドで検出された。西側には第 6 号住居跡が検出されている。平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 2.11m、短軸長 0.77m、深さ 0.37 m を測る。第 14 号土壙と重複し、切られている。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性はある。

### 第 14 号土壙 (第 31 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の O-5 グリッドで検出された。西側には第 6 号住居跡が検出されている。平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.97m、短軸長 1.03m、深さ 0.37m を測る。第 13 号土壙と重複し、切っている。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性はある。

### 第 15 号土壙 (第 31 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の O-5 グリッドで検出された。西側には第 6 号住居跡が検出されている。平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 2.15m、短軸長 0.60m、深さ 0.14m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性はある。

### 第 16 号土壙 (第 31 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の O-5 グリッドで検出された。南側には第 6 号住居跡が検出されている。平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.46m、短軸長 0.50m、深さ 0.20m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

### 第 17 号土壙 (第 31 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の O-5 グリッドで検出された。南西側には第 6 号住居跡が検出されている。平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.46m、短軸長 0.60m、深さ 0.09 m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性はある。

### 第 18 号土壙 (第 32 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の N-5 グリッドで検出された。

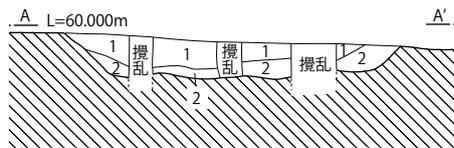
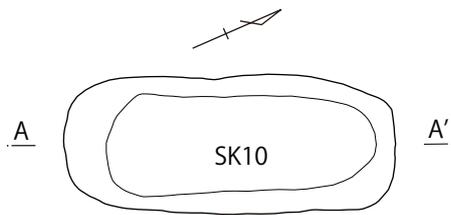
平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.60m、短軸長 0.50m、深さ 0.34 m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性はある。

### 第 19 号土壙 (第 32 図)

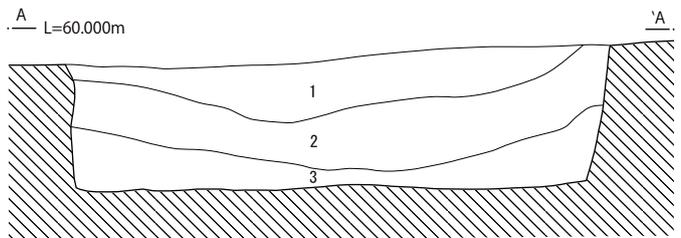
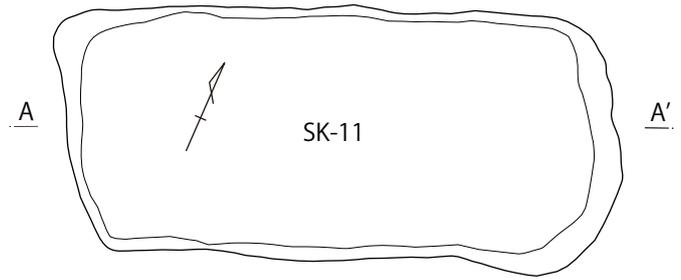
本遺構は、調査区 A 区中央の N-5 グリッドで検出された。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 2.95m、短軸長 0.72m、深さ 0.67 m を測る。



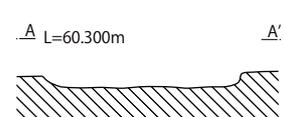
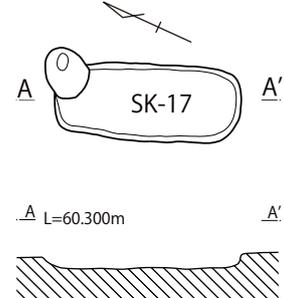
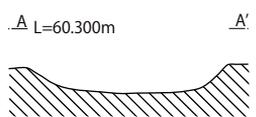
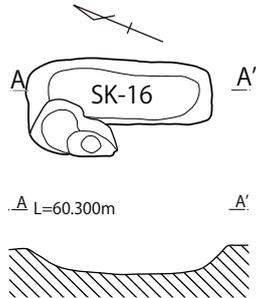
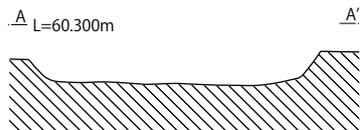
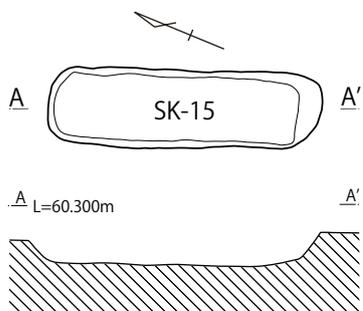
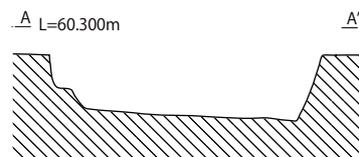
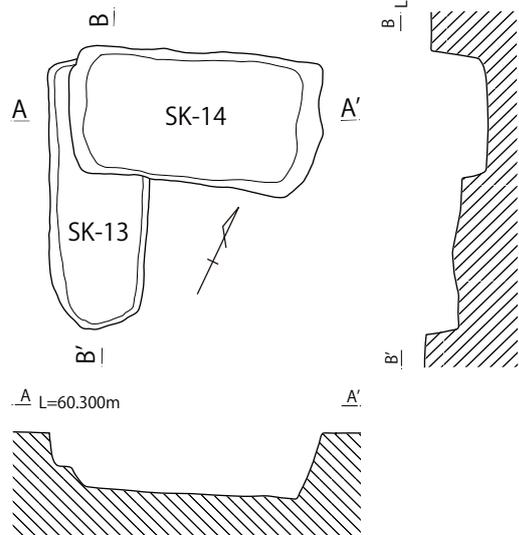
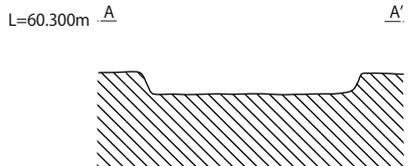
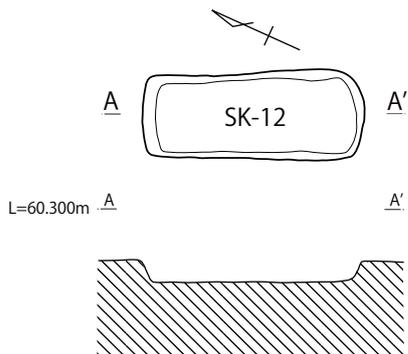
(SK-10)

- 1 暗灰褐色土層 ロームブロック、炭化物を多く含む。しまり不良
- 2 暗灰褐色土層 黒色土ブロックを含む。しまり良



(SK-11)

- 1 暗灰褐色土層 ローム粒、ロームブロック、炭化物を多く含む。しまりやや不良
- 2 暗灰褐色土層 黒色土ブロックを多く含む。しまり良
- 3 暗黄褐色土層 ロームブロックと灰褐色土層との混合層。しまり良



第31図 第10～17号土壌

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性はある。

#### 第 20 号土壙 (第 32 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の N - 5 グリッドで検出されたが、東側大半が調査区外となる。

平面形は不明、全体の規模は検出されているところで長軸長 1.06m、短軸長 0.63m、深さ 0.27m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 21 号土壙 (第 32 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の N - 5 グリッドで検出されたが、西側の一部が調査区外になる。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.60 m、短軸長 1.08m、深さ 0.44m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性が高い。

#### 第 22 号土壙 (第 32 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の N - 5 グリッドで検出された。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.31 m、短軸長 0.50m、深さ 0.13m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性はある。

#### 第 23 号土壙 (第 32 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の M - 5 グリッドで検出された。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.95 m、短軸長 0.95m、深さ 0.59m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性が高い。

#### 第 24 号土壙 (第 32 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の M - 5 グリッドで検出された。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 2.50 m、短軸長 0.76m、深さ 0.31m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性が高い。

#### 第 25 号土壙 (第 32 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の M - 5 グリッドで検出されたが、東側一部が調査区外になる。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は検出されているところで長軸長 2.50 m、短軸長 0.76m、深さ 0.53m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性が高い。

#### 第 26 号土壙 (第 32 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の M - 5 グリッドで検出された。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.66m、短軸長 1.10m、深さ 0.49m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性が高い。

#### 第 27 号土壙 (第 33 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の L - 5 グリッドで検出された。

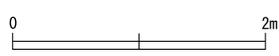
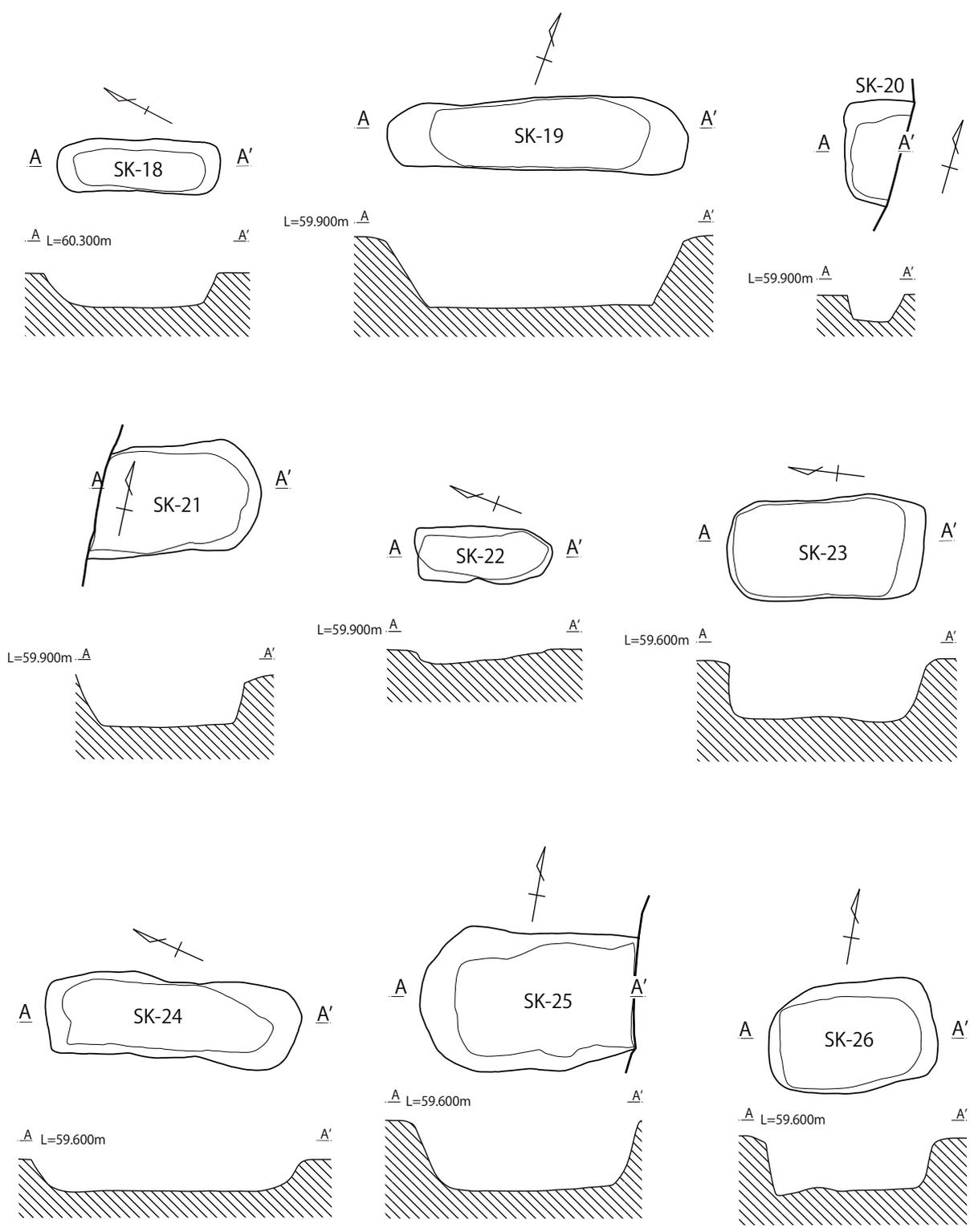
平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.83m、短軸長 0.68m、深さ 0.24m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性はある。

#### 第 28 号土壙 (第 33 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の L - 5 グリッドで検出された。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 2.00m、短軸長 0.78m、深さ 0.32m を測る。



第 32 图 第 18 ~ 26 号土坑

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性はある。

#### 第 29 号土壙 (第 33 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の L - 5 グリッドで検出された。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.43m、短軸長 0.53m、深さ 0.05m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性はある。

#### 第 30 号土壙 (第 33 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の L - 5 グリッドで検出された。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.75m、短軸長 0.57m、深さ 0.07m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性はある。

#### 第 31 号土壙 (第 33 図)

本遺構は、調査区 A 区中央の K・L - 5 グリッドで検出された。

平面形は円形を呈し、全体の規模は直径 0.50m、深さ 0.15m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 32 号土壙 (第 33 図)

本遺構は、調査区 A 区北側の H - 5 グリッドで検出された。北側には第 1 号溝が検出されている。

平面形は楕円形を呈し、全体の規模は長軸長 1.67 m、短軸長 0.88 m、深さ 0.15 m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 33 号土壙 (第 33 図)

本遺構は、調査区 A 区北側の H - 5 グリッドで検出された。第 1 号溝と重複し、それを破壊する。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.23 m、短軸長 0.63 m、深さ 0.35 m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 34 号土壙 (第 33 図)

本遺構は、調査区 A 区北側コーナーの F - 5 グリッドで検出された。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.82 m、短軸長 0.88m、深さ 0.13m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性が高い。

#### 第 35 号土壙 (第 33 図)

本遺構は、調査区 A 区北側の F - 5 グリッドで検出された。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.82m、短軸長 0.88m、深さ 0.31m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性が高い。

#### 第 36 号土壙 (第 33 図)

本遺構は、調査区 A 区北側の F - 5 グリッドで検出された。

平面形は楕円形を呈し、全体の規模は長軸長 1.55m、短軸長 0.83m 深さ 0.10 m を測る。

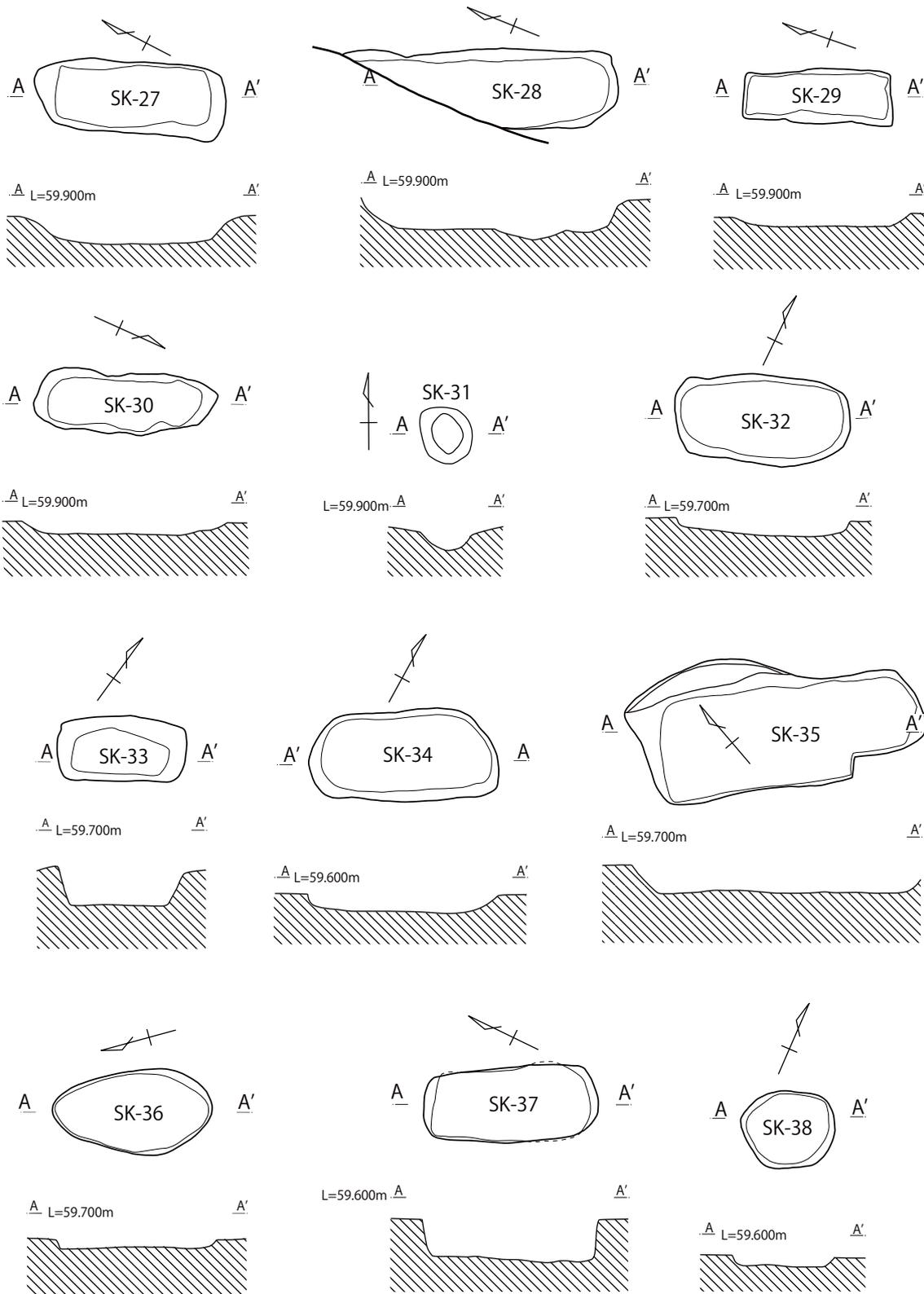
出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 37 号土壙 (第 33 図)

本遺構は、調査区 A 区北側の F - 6 グリッドで検出された。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.69m、短軸長 0.74m、深さ 0.41m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性が高い。



第 33 图 第 27 ~ 38 号土壤

#### 第 38 号土壙 (第 33 図)

本遺構は、調査区 A 区北側の F - 6 グリッドで検出された。

平面形は円形を呈し、全体の規模は直径 0.85 m、深さ 0.12m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 39 号土壙 (第 34 図)

本遺構は、調査区 A 区北側の F - 6 グリッドで検出された。

平面形は円形を呈し、全体の規模は直径 0.70 m、深さ 0.04m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 40 号土壙 (第 34 図)

本遺構は、調査区 A 区北側の F - 7 グリッドで検出された。東側には第 2 号溝が検出されている。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.35m、短軸長 0.72m、深さ 0.09m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性が高い。

#### 第 41 号土壙 (第 34 図)

本遺構は調査区 A 区北側の F - 7 グリッドで検出された。第 2 号溝と重複し、それを破壊する。

平面形は円形を呈し、全体の規模は直径 1.40m、深さ 0.64m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 42 号土壙 (第 34 図)

本遺構は調査区 A 区北側の F - 7 グリッドで検出された。西側には第 2 号溝が検出されている。

平面形は楕円形を呈し、全体の規模は長軸長 1.50m、短軸長 0.95m、深さ 0.38m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 43 号土壙 (第 34 図)

本遺構は調査区 A 区北側の F - 7 グリッドで検出された。第 2 号溝と重複しそれを破壊する。

平面形は円形を呈し、全体の規模は直径 1.30m、深さ 0.50m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 44 号土壙 (第 34 図)

本遺構は調査区 A 区北側の F - 8 グリッドで検出された。西側には第 2 号溝が検出されている。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 2.17m、短軸長 0.86m、深さ 0.30m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性が高い。

#### 第 45 号土壙 (第 34 図)

本遺構は調査区 A 区北側の F - 8 グリッドで検出された。西側には第 2 号溝が検出されている。

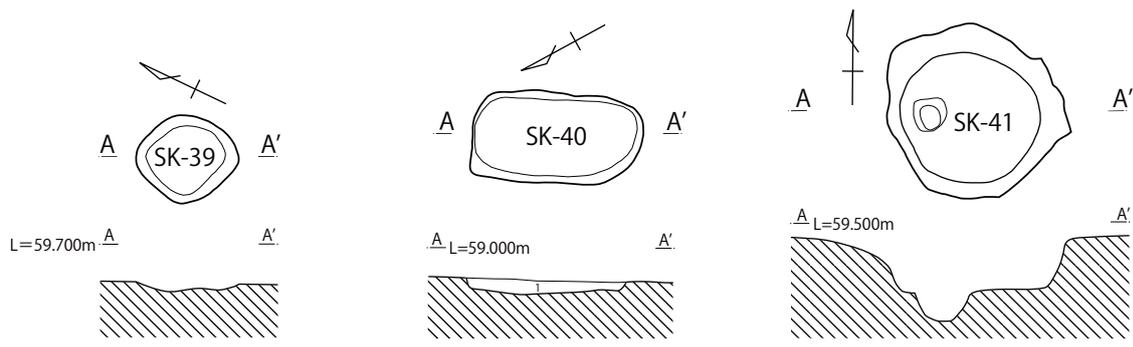
平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 2.21m、短軸長 1.10m、深さ 0.50m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性が高い。

#### 第 46 号土壙 (第 34 図)

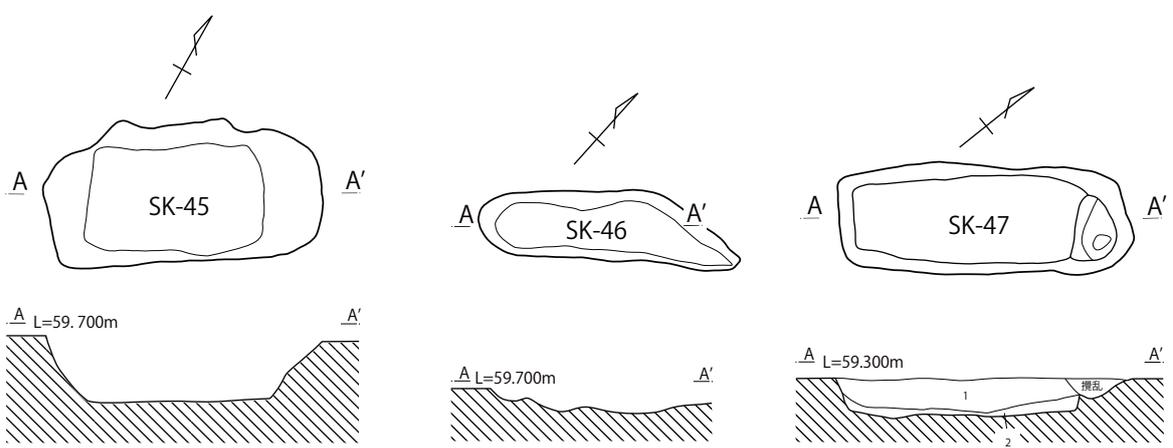
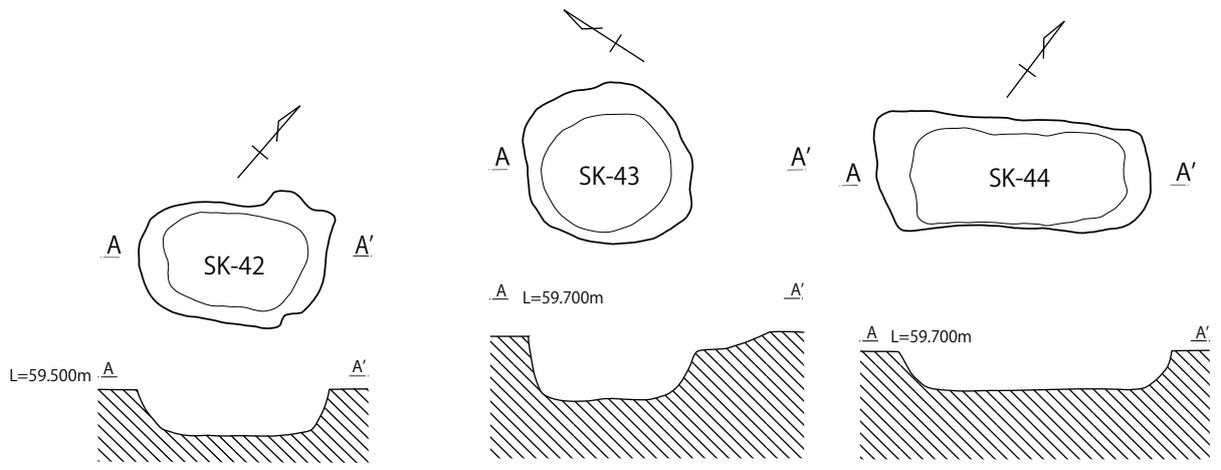
本遺構は調査区 A 区北側の F - 8 グリッドで検出されたが、北東部の一部が調査区外にある。西側には第 2 号溝が検出されている。

平面形は楕円形を呈し、全体の規模は検出されているところで、長軸長 1.80m、短軸長 0.55m、深さ 0.15m を測る。



(SK-40)

1 黒褐色土層 ローム粒・ロームブロック、炭化物、焼土を含む。しまり不良



(SK-47)

- 1 黒色土層 含有物ほとんどなし。ローム粒が見られる
- 2 黒色土層 ロームブロック混入



第34図 第39～47号土壌

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 47 号土壙 (第 34 図)

本遺構は、調査区 B 区西側の F - 11 グリッドで検出された。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 2.30m、短軸長 0.86m、深さ 0.30 m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性が高い。

#### 第 48 号土壙 (第 35 図)

本遺構は、調査区 B 区西側の F - 11 グリッドで検出された。

平面形は方形を呈し、全体の規模は一辺 1.40 m、深さ 0.30m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 49 号土壙 (第 35 図)

本遺構は、調査区 B 区西側の F - 12 グリッドで検出された。北側には第 1 号集石土壙が検出されている。

平面形は楕円形を呈し、全体の規模は長軸長 1.26 m、短軸長 1.01m、深さ 0.94m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 50 号土壙 (第 35 図)

本遺構は、調査区 B 区西側の F - 12 グリッドで検出された。北側には第 1 号集石土壙が検出されている。

平面形は円形を呈し、全体の規模は直径 1.25 m、深さ 0.35m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 51 号土壙 (第 35 図)

本遺構は、調査区 B 区中央の F - 15・16 グリッドで検出された。

平面形は不整形である。全体の規模は長軸長 2.50m、短軸長 0.40 ~ 1.10m、深さ 0.49 ~ 0.65 m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 52 号土壙 (第 35 図)

本遺構は、調査区 B 区中央の F - 18 グリッドで検出された。

平面形は円形を呈し、全体の規模は直径 1.35 m、深さ 0.40m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 53 号土壙 (第 35 図)

本遺構は、調査区 B 区中央の F - 18 グリッドで検出された。

平面形は長形を呈し、全体の規模は検出されているところで長軸長 1.90m、短軸長 1.08 m、深さ 0.47m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性が高い。

#### 第 54 号土壙 (第 35 図)

本遺構は、調査区 B 区中央の F - 19 グリッドで検出された。

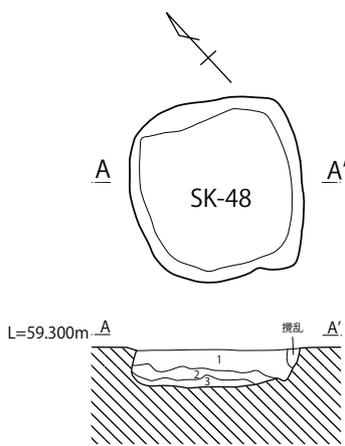
平面形は円形を呈し、全体の規模は直径 1.00 m、深さ 0.08m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 55 号土壙 (第 35 図)

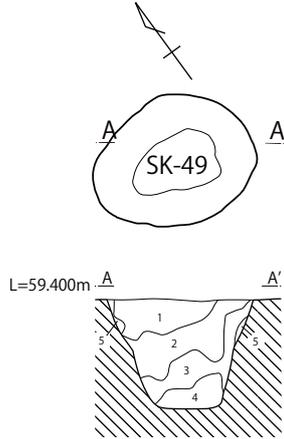
本遺構は、調査区 B 区中央の F - 19 グリッドで検出されたが、南側の大半が調査区外になる。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は検出されているところで長軸長 1.63m、短軸長 0.64 m、深さ



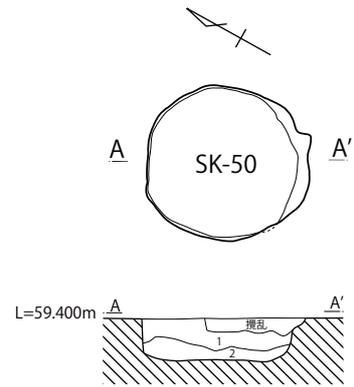
(SK-48)

- 1 黒褐色土層 ローム粒・ロームブロック、炭化物を多く含む。しまり不良
- 2 黒褐色土層 多量のロームブロックを含む
- 3 黒色土層 含有物がほとんどなく、固くしまっている



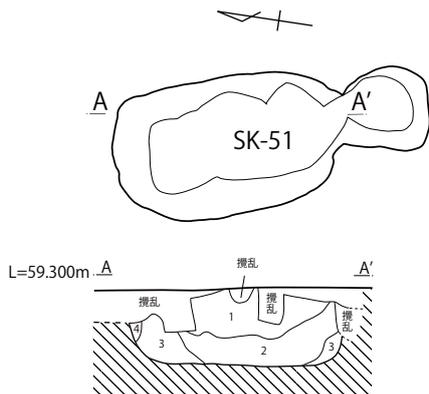
(SK-49)

- 1 暗茶褐色土層 ローム粒、少量の焼土炭化物を含む。しまり強
- 2 黒褐色土層 第1層に比してローム粒減少。しまり強
- 3 暗茶褐色土層 第4層際にロームブロック混入。しまり強
- 4 黒褐色土層 ロームブロックを多く含む。しまり強
- 5 暗黄褐色土層 ロームブロックを主体とする。しまりやや不良



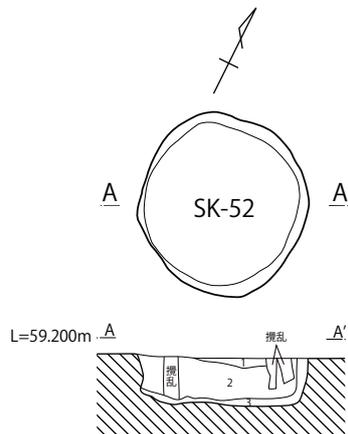
(SK-50)

- 1 暗黄褐色土層 ローム粒・ロームブロックを多量に含む。しまりやや不良
- 2 黒色土層 ローム粒、焼土粒、炭化物を少量含む。しまり良



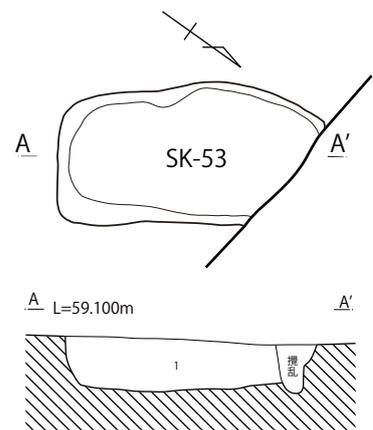
(SK-51)

- 1 黒色土層 粒子の粗い層。ローム粒、極少数の焼土粒を含む。しまり強
- 2 暗茶褐色土層 多量のローム粒の他、焼土、炭化物を含む。しまり強
- 3 暗黄褐色土層 ローム粒を主体とする。しまり強
- 4 暗黄褐色土層 ロームブロックを主体とする



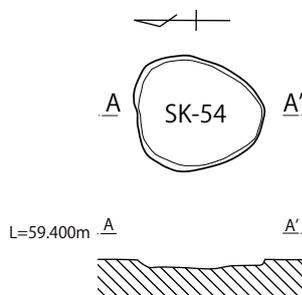
(SK-52)

- 1 黒色土層 ローム粒・ロームブロック、炭化物を含む。しまり不良
- 2 黒色土層 含有物少量。ローム粒が見られる
- 3 黒色土層 ロームブロック混入



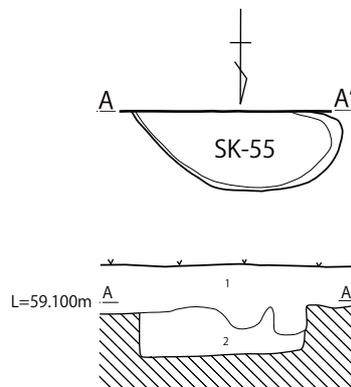
(SK-53)

- 1 黒色土層 含有物はローム粒少量のみ。しまり不良



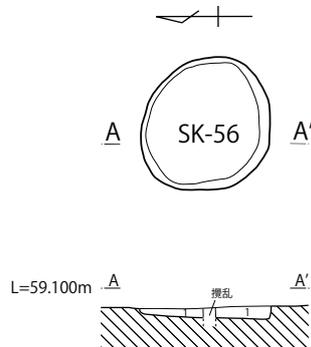
(SK-54)

- 1 黒色土層



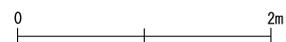
(SK-55)

- 1 耕作土
- 2 黒色土層 ローム粒、炭化物を含む



(SK-56)

- 1 黒色土層 ローム粒、ロームブロック、炭化物を少量含む。しまり不良



第35図 第48～56号土壌

0.38mを測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### **第 56 号土壙 (第 35 図)**

本遺構は調査区 B 区中央の F - 19 グリッドで検出された。

平面形は円形を呈し、全体の規模は直径 1.05 m、深さ 0.10m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

#### **第 57 号土壙 (第 22 図)**

本遺構は調査区 B 区東側の E - 27 グリッドで検出された。第 3 号溝と重複し、それを破壊する。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 2.10m、短軸長 0.90m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性がある。

#### **第 58 号土壙 (第 22 図)**

本遺構は調査区 B 区東側の E - 27 グリッドで検出された。第 3 号溝と重複し、それを破壊する。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 2.00m、短軸長 1.10m、深さ 0.15m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性がある。

#### **第 59 号土壙 (第 22 図)**

本遺構は調査区 B 区東側の E - 27 グリッドで検出された。北側大部分は調査区外となる。第 3 号溝と重複し、それを破壊する。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は検出されているところで、長軸長 2.00m、短軸長 0.90m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性がある。

#### **第 60 号土壙 (第 22 図)**

本遺構は調査区 B 区東側の E - 27 グリッドで検出された。第 4 号溝と重複し、それを破壊する。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.70m、短軸長 0.94m、深さ 0.05m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性がある。

#### **第 61 号土壙 (第 22 図)**

本遺構は調査区 B 区東側の C - 26 グリッドで検出された。第 5 号の一部を破壊する。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 4.10m、短軸長 1.10m を測る。

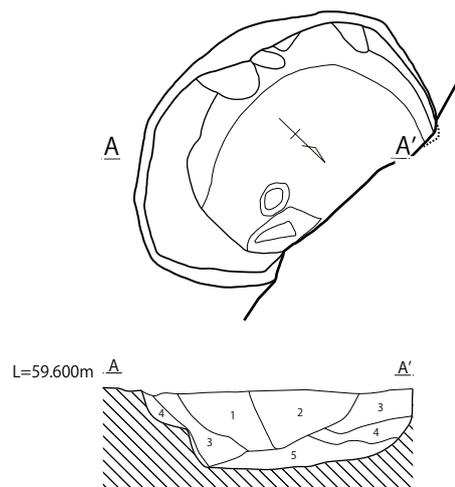
出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性がある。

#### **不明遺構**

#### **第 1 号不明遺構 (第 36 図)**

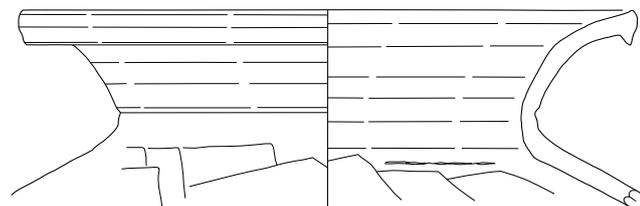
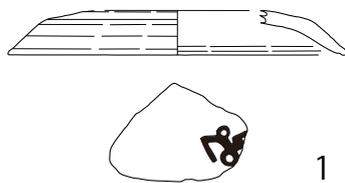
本遺構は、調査区 B 区西側の F - 11 グリッドで検出されたが、北側の一部分が調査区外となる。

平面形は円形を呈し、全体の規模は検出されているところで、長軸長 2.60m、短軸長 1.60m、深さ 0.60m を測る。



(SX-1)

- |   |        |                            |        |
|---|--------|----------------------------|--------|
| 1 | 暗黄褐色土層 | ロームブロックを主体とする              |        |
| 2 | 暗黄褐色土層 | ローム粒、ロームブロック（小）を主体とする。しまり良 |        |
| 3 | 黒褐色土層  | ローム粒、ロームブロックを少量含む。しまり良     |        |
| 4 | 暗黄褐色土層 | ローム粒を主体とする。しまり良            | } 掘り過ぎ |
| 5 | 暗黄褐色土層 | ロームブロックを主体とする              |        |



第 36 図 第 1 号不明遺構・表面採集遺物

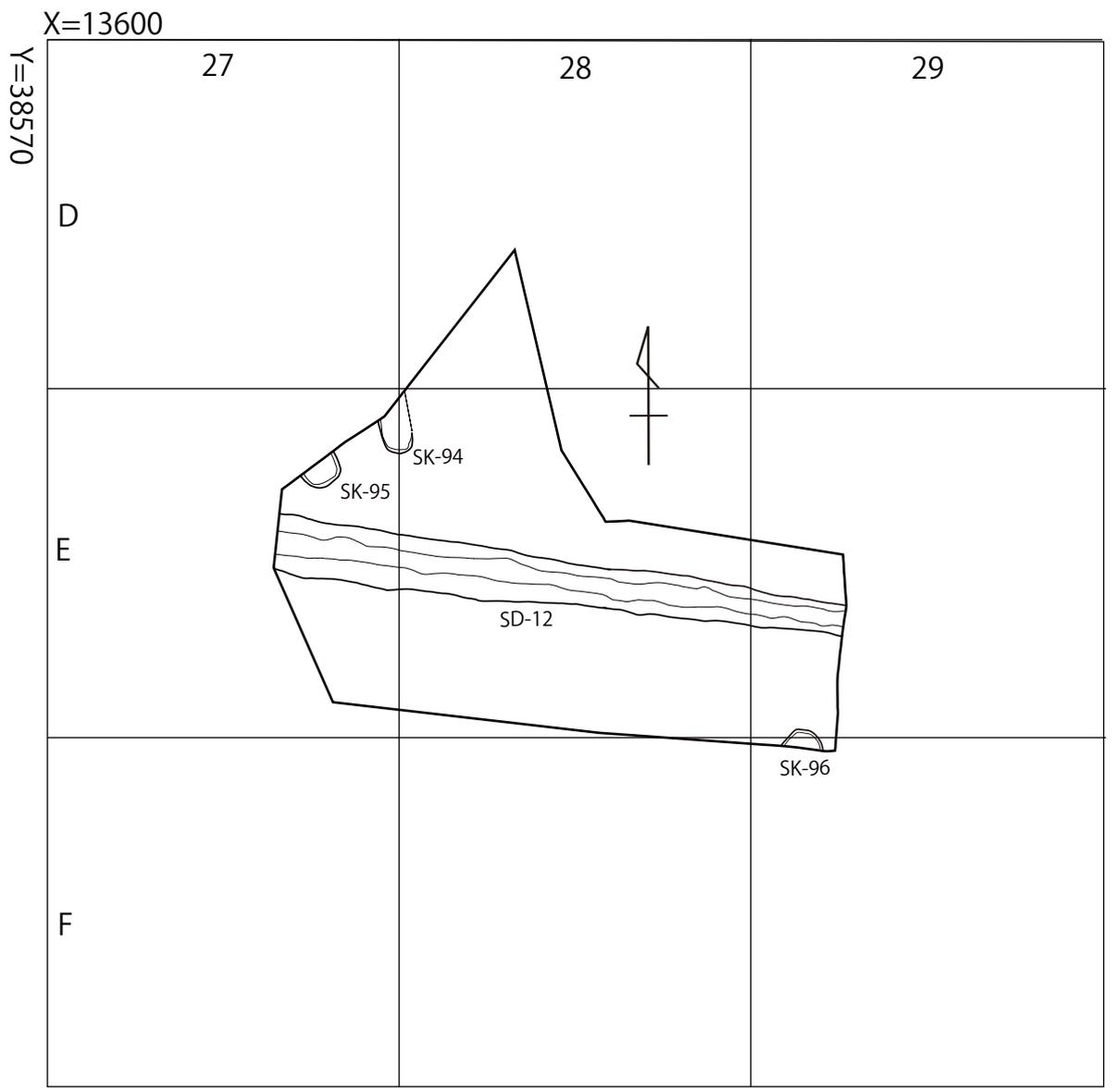
表面採集遺物観察表

NO	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	須恵器蓋	(13.4)	—	(1.8)	破片	白色粒・白色針状・砂粒	良好	赤褐色	裾の内側に爪先痕。外面に墨書。南比企産
2	須恵器甕	(24.0)	—	(8.0)	破片	白色粒・黒色粒・小礫	良好	灰色	口縁部のみ残存。当て具痕が明瞭

出土遺物はないが、土層注から見て、風倒木の可能性が高い。

表面採集遺物（第 36 図）

表面採集遺物で特徴のあるものを 2 点掲載した。1 は須恵器蓋である。裾部の内面に爪先痕がロクロ目に沿って見られ、外面には墨書が見られる。墨書の文字については不明である。2 は須恵器甕の口縁部の破片である。頸部と体部の接合時の粘土痕が明確に見え、外面内面ともに当て具痕が明確に見える。



第 37 図 小山ノ上遺跡第 9 次調査全測図

# Ⅳ 小山ノ上遺跡第 9 次調査

## 1 調査の経過と概要

調査原因が圃場整備のため、確認調査は行わず、本調査を平成 9 年 1 月 7 日から平成 9 年 1 月 24 日にかけて実施した。調査の経過は以下のとおりである。

平成 9 年度

1 月 7 日(火) 人力による表土除去。調査区壁の切り揃え。遺構確認調査開始。

土壇 3 基、溝 1 条を検出。

1 月 8 日(水) 遺構掘り下げを開始。

1 月 13 日(月) 第 12 号溝、第 94・95・96 号土壇完掘、平面図作成。

1 月 24 日(金) 調査区全景写真撮影。作業終了

調査の結果、検出された遺構は土壇 3 基と溝 1 条である。なお、昭和 60 年に狭山市教育委員会が実施した第 2 次調査からの通し番号で、溝が第 12 号溝、土壇が第 94～96 号土壇となる。

## 2 検出遺構

溝

### 第 12 号溝 (第 38 図)

本遺構は、調査区中央の E - 27・28・29 グリッドで、東西方向に延びるものが検出されている。

規模は検出されているところで全長 16.4 m、溝幅は 0.90m～1.60 m、深さは 0.28m～0.37m を測る。東西ともに調査区外まで延びるが、西側は隣接する第 7 次調査で検出されていないため、調査区外ですぐに切れるものと思われる。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

土壇

### 第 94 号土壇 (第 38 図)

本遺構は調査区中央やや東側の E - 27・28 グリッドで、第 95 号土壇と並んで検出している。

平面形は円形を呈し、全体の規模は径 1.20 m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

### 第 95 号土壇 (第 38 図)

本遺構は調査区中央やや東側の E - 27 グリッドで、第 94 号土壇と並んで検出している。

平面形は円形を呈し、全体の規模は径 1.10m を測る。

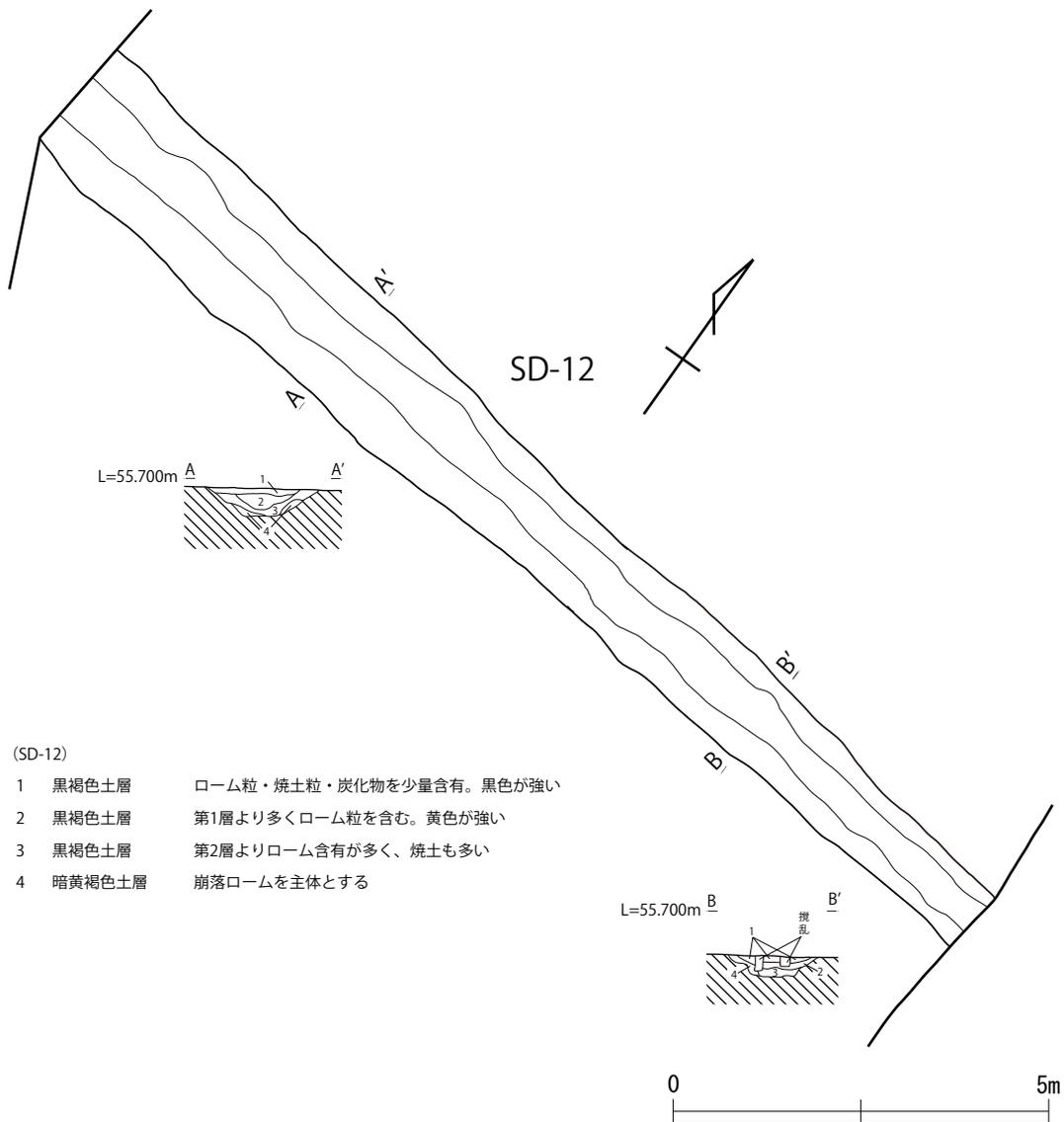
出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

### 第 96 号土壇 (第 38 図)

本遺構は調査区中央やや東側の E・F - 29 グリッドで検出し、南側が調査区外になる。

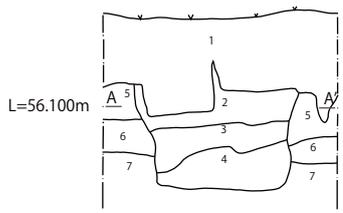
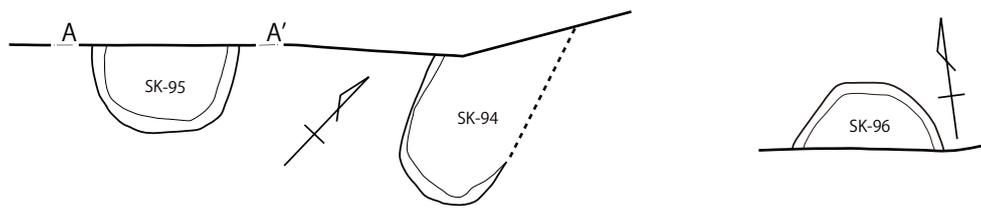
平面形はおそらく円形を呈し、全体の規模は径 1.20m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。



(SD-12)

- |   |        |                         |
|---|--------|-------------------------|
| 1 | 黒褐色土層  | ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含有。黒色が強い |
| 2 | 黒褐色土層  | 第1層より多くローム粒を含む。黄色が強い    |
| 3 | 黒褐色土層  | 第2層よりローム含有が多く、焼土も多い     |
| 4 | 暗黄褐色土層 | 崩落ロームを主体とする             |



(SK-95)

- |   |        |                                  |
|---|--------|----------------------------------|
| 1 | 耕作土    |                                  |
| 2 | 黒褐色土層  | ローム粒・焼土・炭化物を含む。しまり不良             |
| 3 | 黒褐色土層  | ローム粒・ロームブロックを多く含む。しまり不良          |
| 4 | 黒褐色土層  | ローム粒・焼土・炭化物を少量含有。黒色が上層より強い。しまり不良 |
| 5 | 黒色土層   | 埋没谷フク土。焼土粒・炭化物をわずかに含む            |
| 6 | 暗茶褐色土層 | ソフトローム層。粒子粗く、しまり良                |
| 7 | 黄褐色土層  | ローム層                             |



第38図 第12号溝・第94・95・96号土塙

# V 小山ノ上遺跡第 10 次調査

## 1 調査の経過と結果

調査原因が圃場整備のため、確認調査は行わず、本調査を平成 9 年 5 月 6 日から平成 9 年 5 月 30 日にかけて実施した。調査の経過は以下のとおりである。

平成 9 年度

5 月 6 日(火) 人力による表土除去。調査区壁の切りそろえ。遺構確認調査開始。

5 月 7 日(水) 遺構掘り下げ開始。

5 月 9 日(金) 第 97・98・99・100 号土壇完掘。

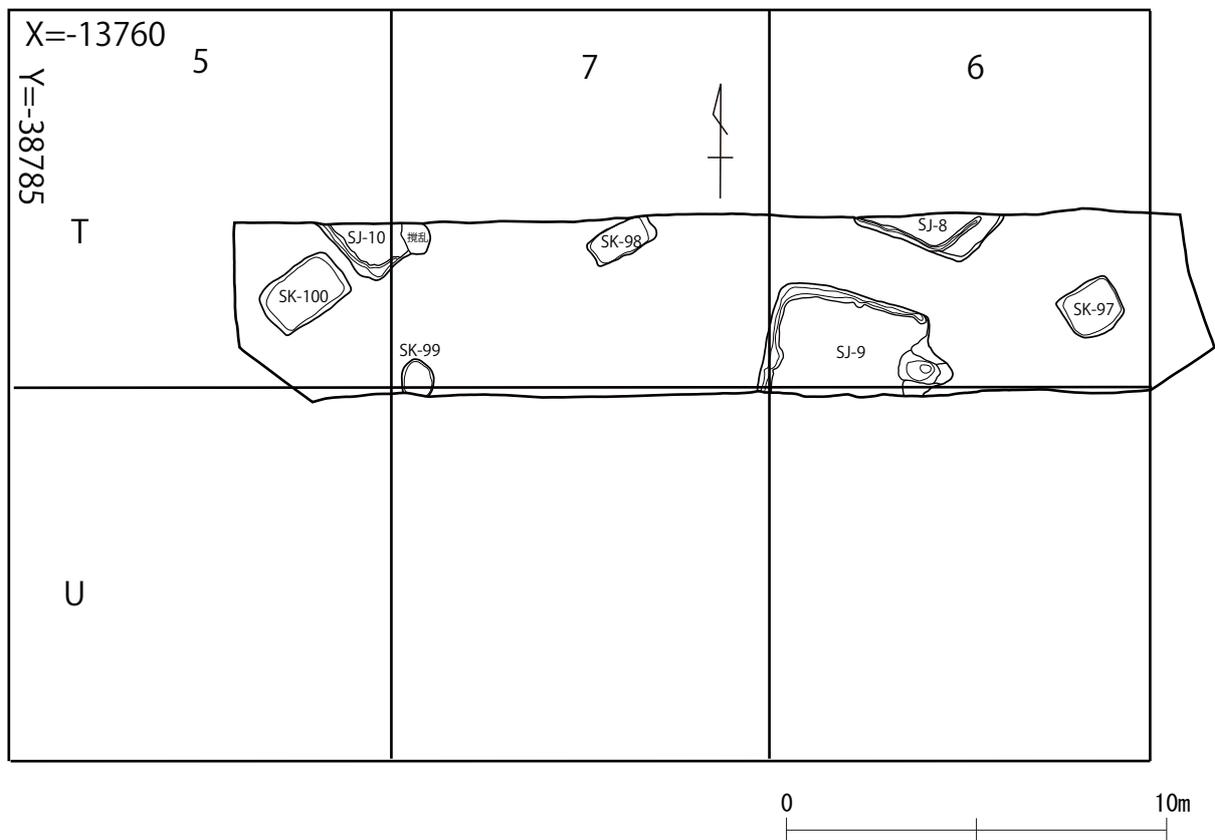
5 月 12 日(月) 第 8・9 号住居跡完掘、全景写真撮影。

5 月 16 日(金) 第 10 号住居跡完掘、全景写真撮影。

5 月 29 日(木) 第 8 号住居跡カマド平面図作成。

5 月 30 日(金) 作業終了。

調査の結果、検出された遺構は奈良・平安時代の住居跡 3 軒、土壇 4 基である。なお、昭和 60 年に狭山市教育委員会が実施した第 2 次調査からの通し番号で、竪穴住居跡が第 8～10 号住居跡、土壇が第 97～100 号溝となる。



第 39 図 小山ノ上遺跡第 10 次調査全測図

## 2 検出遺構

### 住居跡

#### 第8号住居跡(第40図)

本遺構は調査区中央やや東側のT-6グリッドで検出し、南側の一部が調査区外になる。遺存状態は上層が攪乱で壊されているが床面付近は良好。

平面形はおそらく正方形を呈すと考えられる。規模は検出されているところで、東西長4.00m、南北長3.00m、深さ0.36～0.42mを測る。主軸方位はN-102°-Eを指す。

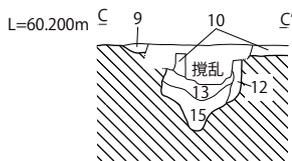
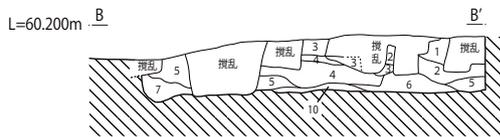
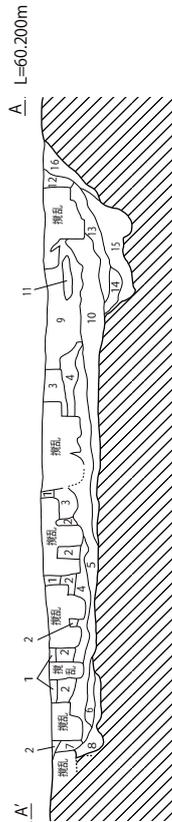
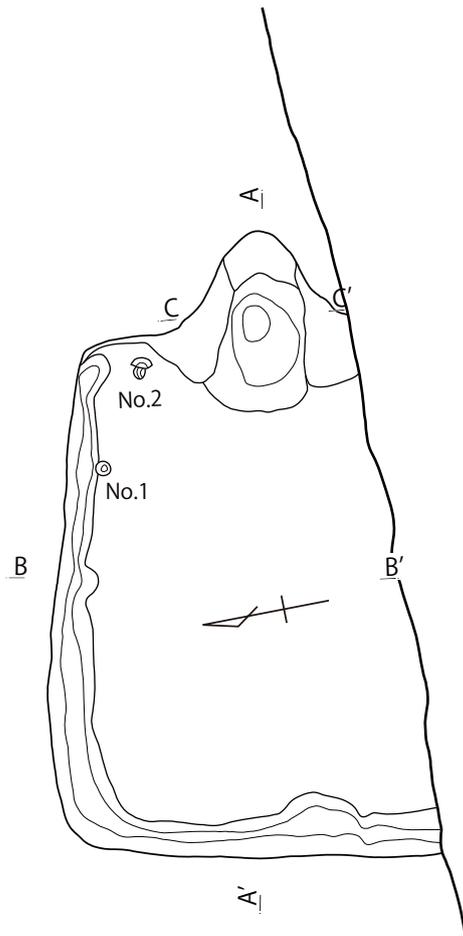
床面は平坦である。壁溝はカマドのある東側を除いて全周していると考えられる。規模は溝幅0.15m～0.50m、深さ0.03m～0.05mを測る。壁体は攪乱が及んでいるため正確には不明だが遺存している部分から推測するに若干外側に開いていると考えられる。

カマドは東壁から検出され、遺存状態は上層がかく乱で破壊されているが全体的には良好である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸長1.42mを測る。両袖間は右側の袖の一部が調査区外のため不明である。

出土遺物は須恵器杯・須恵器碗・須恵器皿・土師台付甕・土師甕が出土している(第41・42図)。1～9は須恵器杯である。1は全体的に器厚が均一だが、底部中央がへこむ。体部は若干湾曲し、底部は上げ底になっている。東金子産。2は底部中央が厚く、内底部外周付近が極端にへこんでいる。底部から体部への立ち上がりは直線的で口縁部はわずかに外反する。東金子産。3は底部が若干厚く、残りは均一である。底部から体部への立ち上がりは直線的で口縁部はわずかに外反する。東金子産。4は器厚が全体的に薄い。底部から体部への立ち上がりはかなり湾曲し、口縁部は緩やかなS字を描いて外反している。東金子産。5は器厚が全体的に薄い。底部から体部への立ち上がりはかなり湾曲し、口縁部は外反している。東金子産。6は底部の器厚が厚くなっている。底部は上げ底になっており、体部は若干の丸みを持っている。外面体部下位が全体的に焼けて赤くなっている。東金子産。7は全体的に器厚が薄く、口唇部が若干厚くなっている。底部は上げ底で、底部から体部への立ち上がりは直線的である。口縁部ははっきりと反り返っている。東金子産。8は底部が若干厚くなっている。底部は上げ底で、底部から体部への立ち上がりは湾曲している。体部は直線的で、口縁部は若干外反している。東金子産。9は底部の一部から口縁部まで破片である。器厚は底部が厚く、口唇部に向かって薄くなる。底部から体部への立ち上がりは湾曲し、体部は直線的である。口縁部は外反している。東金子産。10は須恵器碗の底部の一部から口縁部である。器厚は底部が厚く、体部は薄い。底部から体部への立ち上がりは直線的で、体部は若干湾曲している。口縁部は外反する。体部のロクロ目が顕著なのが特徴である。東金子産。11は須恵器皿である。器厚は底部が厚く、口縁部に向かって薄くなる。体部は湾曲し、口縁部は外反している。全体の丁度半分が内外面に煤が濃く付着しているので、火掻き具の可能性はある。12・13は土師器台付甕である。12は口縁部から肩部の破片で、器厚は均一である。口縁部は「コ」の字状を呈している。13は口縁部から肩部の破片で、器厚は口縁部が厚く、肩部が薄い。口縁部は「コ」の字状を呈している。破片だが持つと重量感を感じる。14は土師器甕である。口縁部から肩部の破片で、器厚は口縁部が厚く、肩部が薄い。口縁部は「く」から「コ」の字状への移行期のものである。

#### 第9号住居跡(第43図)

本遺構は調査区中央やや東側のT-6グリッドで検出し、北側の部分が調査区外になる。遺存状態は

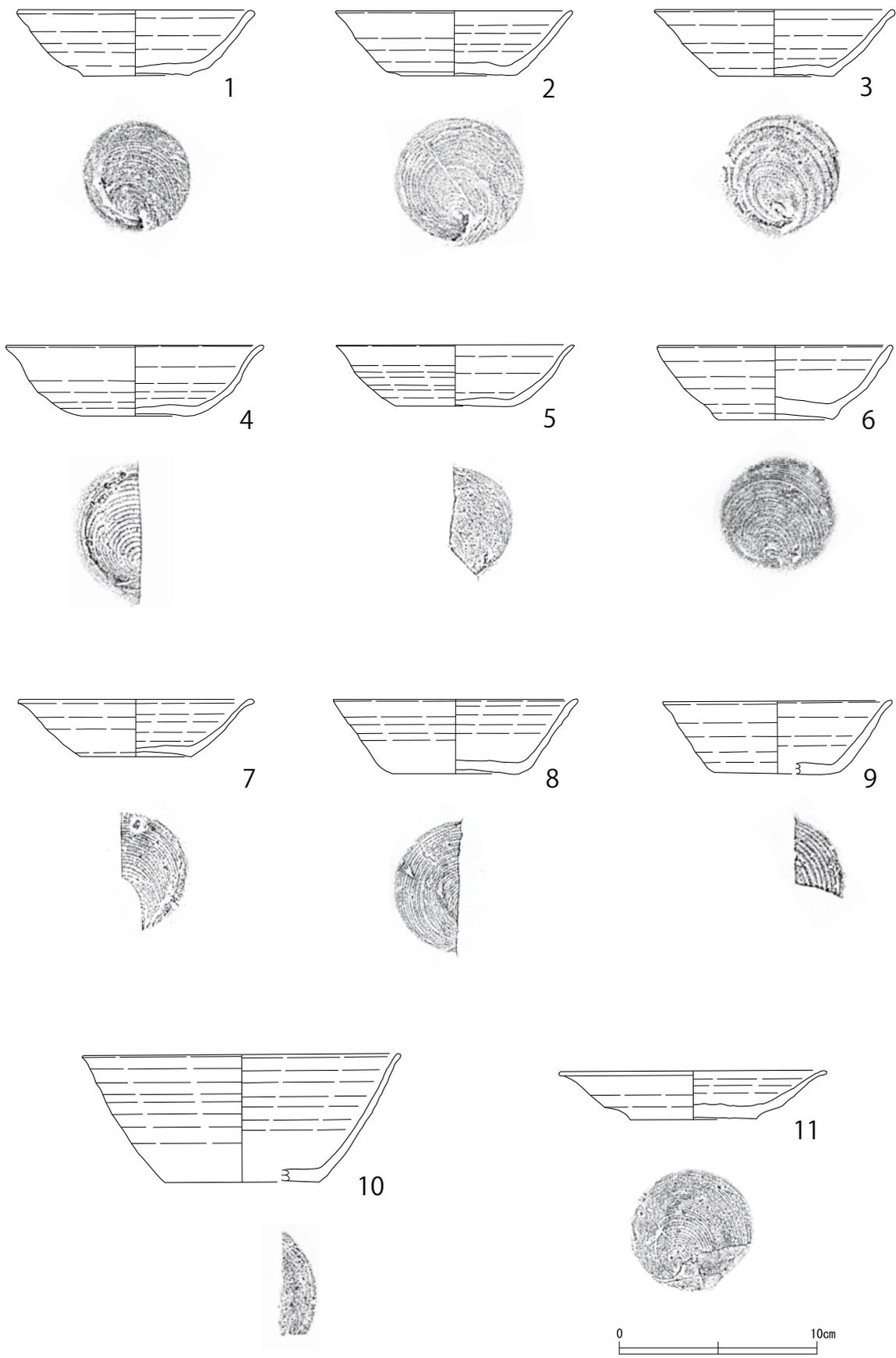


(S1-8)

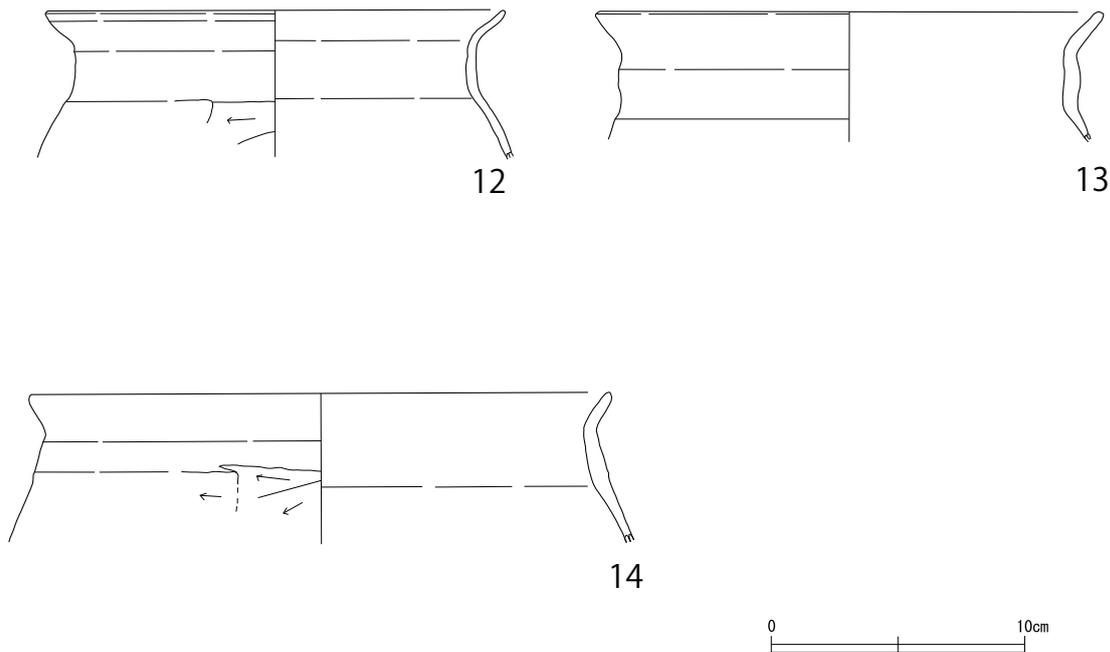
- |    |        |                                |
|----|--------|--------------------------------|
| 1  | 黒褐色土層  | 焼土粒・ローム粒を少量含む                  |
| 2  | 暗茶褐色土層 | 多量の焼土を含む                       |
| 3  | 暗黄褐色土層 | ローム粒・ロームブロックを多量に含有             |
| 4  | 暗茶褐色土層 | ローム粒・ロームブロック・焼土を含有             |
| 5  | 暗茶褐色土層 | ロームブロックを多く含む                   |
| 6  | 暗茶褐色土層 | 多量に焼土粒を含む                      |
| 7  | 暗黄褐色土層 | ローム粒・ロームブロックを多量に含む             |
| 8  | 暗茶褐色土層 | ローム粒を少量含有                      |
| 9  | 暗茶褐色土層 | ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む。他に多量の粘土が混入   |
| 10 | 暗灰色土層  | 粘土を多量に含む                       |
| 11 | 暗黄褐色土層 | 多量のロームを含有する                    |
| 12 | 暗灰色土層  | 多量の焼土ブロックを含む                   |
| 13 | 暗茶褐色土層 | 焼土ブロックと粘土を主体とする                |
| 14 | 暗灰色土層  | 粘土を主体とする。粘性あり                  |
| 15 | 暗茶褐色土層 | 多量の粘土を含む。焼土・焼けたロームブロックが混入。粘性あり |
| 16 | 暗茶褐色土層 | 粘土を多量に含む。他に焼土・炭化物が混入           |



第40図 第8号住居跡



第41図 第8号住居跡出土遺物1



第 42 図 第 8 号住居跡出土遺物 2

第 8 号住居跡出土遺物観察表

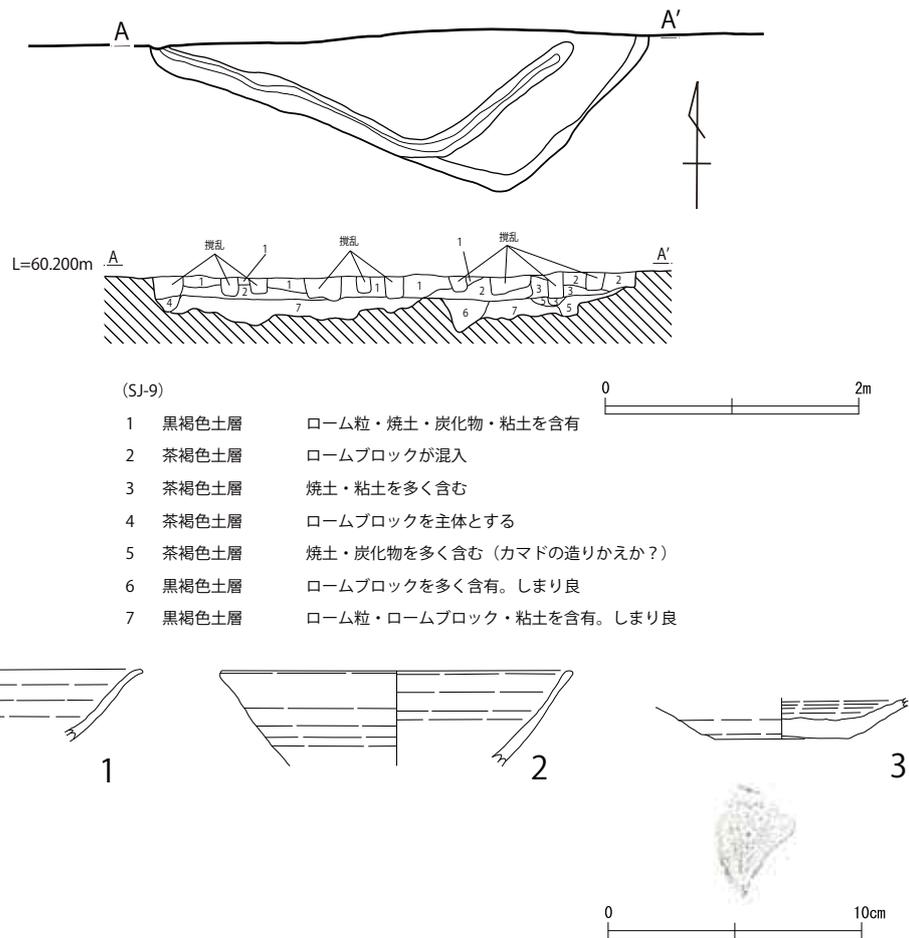
NO	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	須恵器坏	11.7	5.5	3.4	100%	白色粒・砂粒・小礫	良好	灰色	回転糸切り。東金子産
2	須恵器坏	11.9	6.6	3.3	95%	白色粒・砂粒・小礫	不良	明黄褐色	回転糸切り。東金子産
3	須恵器坏	12.0	5.8	3.4	70%	白色粒・小礫	良好	明赤褐色	回転糸切り。東金子産
4	須恵器坏	(13.0)	5.4	3.6	50%	白色粒・黒色粒・小礫	良好	青灰色	回転糸切り。体部下位が湾曲。東金子産
5	須恵器坏	(12.0)	(6.0)	3.1	50%	白色粒・黒色粒・砂粒・小礫	良好	灰オリーブ色	回転糸切り。体部下位が湾曲。東金子産
6	須恵器坏	(11.8)	5.8	3.8	45%	白色粒・黒色粒・赤色粒	普通	明黄褐色	回転糸切り。体部下位が二次焼成。東金子産
7	須恵器坏	(11.8)	(5.6)	2.9	40%	白色粒・砂粒・小礫	良好	青灰色	回転糸切り。口唇部の返しが強い。東金子産
8	須恵器坏	(12.4)	(6.4)	3.8	20%	白色粒・小礫	良好	橙色	回転糸切り。東金子産
9	須恵器坏	(11.6)	(6.4)	3.7	破片	白色粒・小礫	良好	橙色	回転糸切り。東金子産
10	須恵器碗	(16.0)	(7.8)	6.5	40%	白色粒・砂粒・小礫	不良	にぶい黄褐色	回転糸切り後周辺回転ヘラ削り。東金子産
11	須恵器皿	(13.4)	(6.4)	2.5	40%	白色粒・赤色粒・小礫	良好	にぶい黄褐色	回転糸切り。半分に煤が付着。東金子産
12	土師器台付甃	(18.0)	—	(5.9)	破片	白色粒・黒色粒・赤色粒・砂粒	普通	明赤褐色	口縁部「コ」の字状。口唇部が若干立つ
13	土師器台付甃	(19.6)	—	5.2	破片	白色粒・黒色粒・石英・長石	良好	明赤褐色	口縁部「コ」の字状。重量感がある
14	土師器甃	(22.8)	—	(6.0)	破片	白色粒・赤色粒・砂粒・石英	不良	明赤褐色	口縁部「く」から「コ」の字状への移行期

上層が攪乱で壊されているが床面付近は良好。大部分が調査区外のため平面形および規模等は不明である。

床面は貼床によって平坦にされている。壁溝も一部検出されているが、途中で壁に沿ってではなく並行するように掘られている。規模は溝幅 0.16m ~ 0.25m、深さ 0.02m ~ 0.10m を測る。壁体は若干外側に開いている。

カマドは検出されていないが、おそらく調査区外に当たる北カマドだと推測できる。

出土遺物は須恵器・土師器の破片が数点出土しているが図示できたものは 3 点しかなかった(第 43 図)。1・2 は須恵器坏である。1 は口縁部から体部下位の破片である。全体的に器厚は均一で、体部は湾曲し、口縁部は外反している。内面全体に降灰が付着している。東金子産。2 は口縁部から体部下位の破片である。器厚は体部下位が若干厚くなっている。体部は湾曲し、口縁部は外反している。第 10 号住居跡の N o.3 と同一個体の可能性がある。東金子産。3 は須恵器皿の底部から体部下位の破片である。底部が厚く、口縁部に向かって薄くなっていくと思われる。内部に赤い斑点がまばらに見える。東金子産。



第 43 図 第 9 号住居跡・出土遺物

第 27 号住居跡出土遺物観察表

NO	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	須恵器坏	(12.2)	—	(2.9)	20%	白色粒・黒色粒	良好	青灰色	内面全体に降灰。東金子産
2	須恵器坏	(13.8)	—	(3.8)	破片	白色粒・黒色粒	良好	灰色	東金子産。SJ-10No.3 と同一個体か?
3	須恵器皿	—	(5.2)	(1.6)	破片	白色粒・小礫	良好	明黄褐色	回転糸切り。東金子産

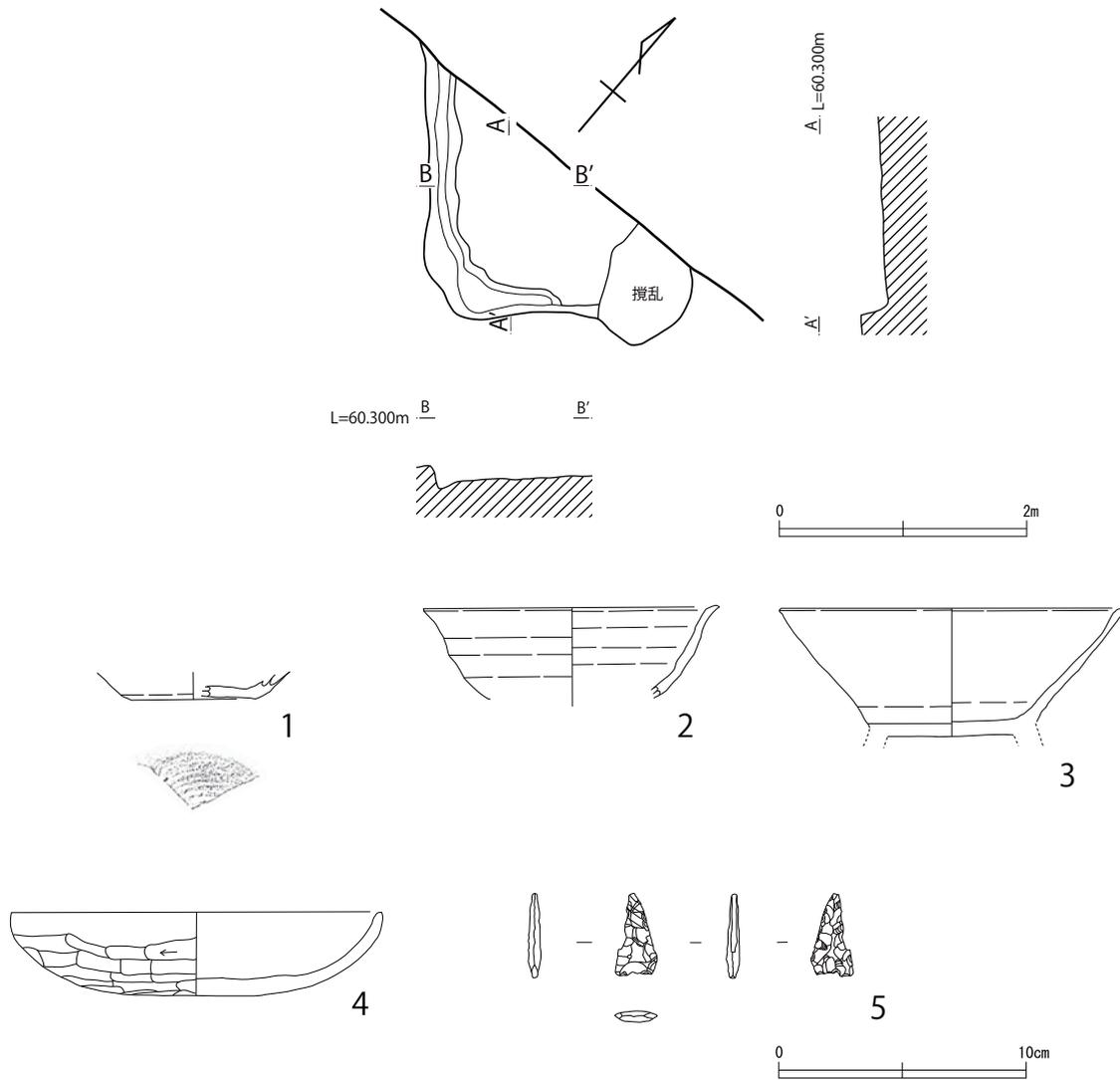
第 10 号住居跡 (第 44 図)

本遺構は調査区西側の Q-2 グリッドで検出し、北側の部分が調査区外になる。大部分が調査区外のため平面形および規模等は不明である。

床面は平坦で、壁溝も一部検出されている。規模は溝幅 0.18m ~ 0.42m、深さ 0.03m ~ 0.11m を測る。壁体は垂直に上がっている。

カマドは検出されていないが、南東部の壁溝が途切れていることから、丁度攪乱部にカマドがあった可能性がある。

出土遺物は須恵器・土師器の破片が数点出土しているが図示できたものは 4 点しかなかった (第 44 図)。1・2 は須恵器坏である。1 は口縁部から体部下位の破片である。全体的に器厚は均一で、体部は湾曲し、口縁部は外反、口唇部は先鋭化している。内面体部下位に明確な段を持っている。東金子産。2 は底部の破片である。若干上げ底になっており、底部から体部への立ち上がりは直線的である。東金子産。3 は台部が欠損している須恵器台付坏である。器厚は底部が厚く、口縁部に向かって薄くなっていく。窯で焼い



第 44 図 第 10 号住居跡・出土遺物

第 10 号住居跡出土遺物観察表

NO	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	須恵器坏	(10.0)	—	4.0	破片	白色粒・小礫	良好	灰色	内面体部下位に明確な段あり。東金子産
2	須恵器坏	—	(5.0)	3.7	破片	白色粒・砂粒・小礫	良好	暗灰黄色	回転糸切り。東金子産
3	須恵器台付坏	(13.8)	(6.8)	3.8	35%	白色粒・黒色粒	良好	灰色	台部欠損。SJ-9No.2 と同一個体か？東金子産
4	土師器坏	(15.0)	—	(2.8)	50%	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	赤褐色	平底。外底部に煤付着。重量感がある
5	石鏃	長さ 3.2cm、幅 1.7cm、厚さ 0.5cm、重さ 2g、材質、チャート							

たときにできた気泡の痕が外面全体に見てとれ、つくりは雑である。第 9 号住居跡の No.2 と同一個体の可能性がある。東金子産。4 は土師器坏である。器厚は底部が若干厚くなっている。底部は平底で、口縁部はやや外反する。外底部に煤が付着しており、火にかけた痕と考えられる。5 は凹基無茎の石鏃である。両側縁は鋸歯状を呈す。チャート製。

土壌

第 97 号土壌 (第 45 図)

本遺構は調査区東側の T-6 グリッドで検出している。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.50m、短軸長 1.38m、深さ 0.15m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

### 第 98 号土壇 (第 45 図)

本遺構は調査区中央の T-7 グリッドで検出している。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 1.25m、短軸長 0.85m、深さ 0.40m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

### 第 99 号土壇 (第 45 図)

本遺構は調査区中央の T-7 グリッドで検出し、南側の一部が調査区外となる。

平面形はおそらく楕円形を呈し、規模は検出されているところで長軸長 0.95m、短軸長 0.85m、深さ 0.08m を測る。

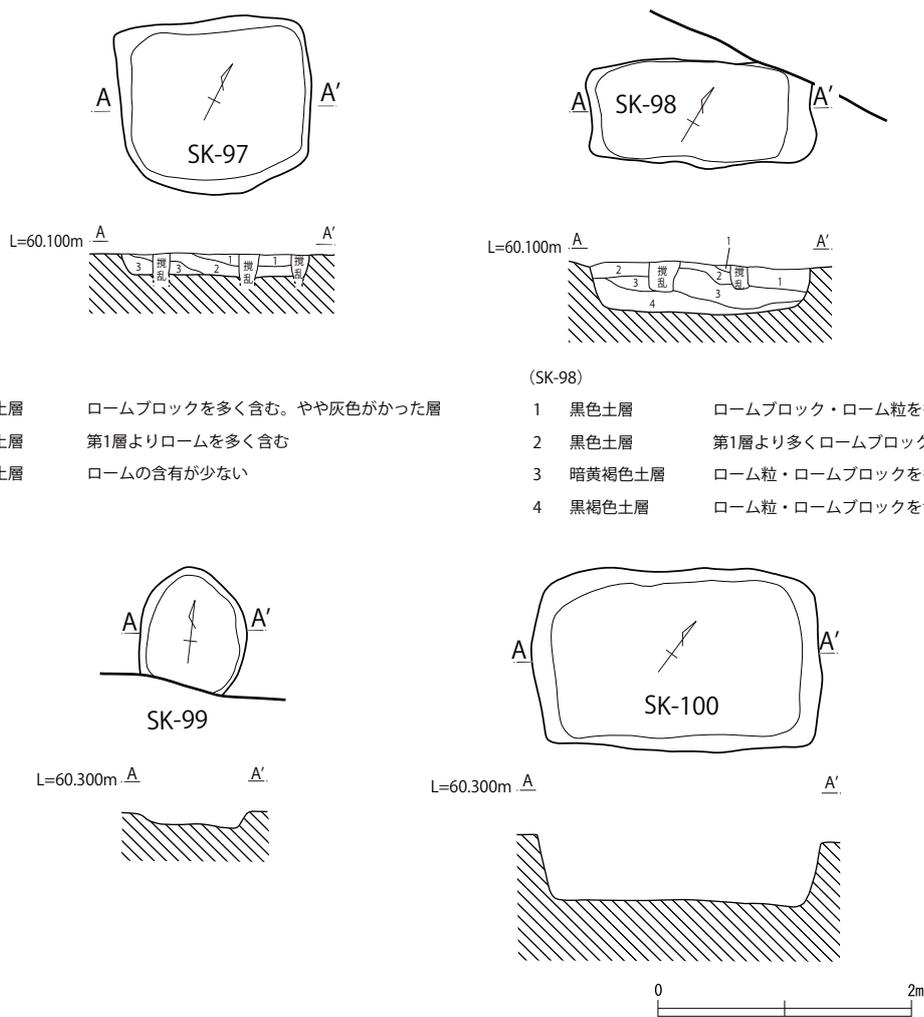
出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

### 第 100 号土壇 (第 45 図)

本遺構は調査区西側の T-6 グリッドで検出している。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は長軸長 2.30m、短軸長 1.44m、深さ 0.52m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性はある。



(SK-97)

- |         |                        |
|---------|------------------------|
| 1 暗褐色土層 | ロームブロックを多く含む。やや灰色がかった層 |
| 2 暗褐色土層 | 第1層よりロームを多く含む          |
| 3 黒褐色土層 | ロームの含有が少ない             |

(SK-98)

- |          |                    |
|----------|--------------------|
| 1 黒色土層   | ロームブロック・ローム粒を多く含む  |
| 2 黒色土層   | 第1層より多くロームブロックを含む  |
| 3 暗黄褐色土層 | ローム粒・ロームブロックを多量に含む |
| 4 黒褐色土層  | ローム粒・ロームブロックを含有する  |

第 45 図 第 97 ~ 100 号土壇

# Ⅵ 小山ノ上遺跡第11次調査

## 1 調査の経過と概要

調査原因が圃場整備のため、確認調査は行わず、本調査を平成9年11月17日から平成9年12月15日にかけて実施した。調査の経過は以下のとおりである。

平成9年度

11月17日(月) 人力による表土除去。調査区壁の切りそろえ。遺構確認調査開始。

11月26日(水) 第11号住居跡、第21号掘立柱建物跡、第2号不明遺構断面図作成。

12月2日(火) 第11号住居跡、第21号掘立柱建物跡完掘、全景写真撮影。

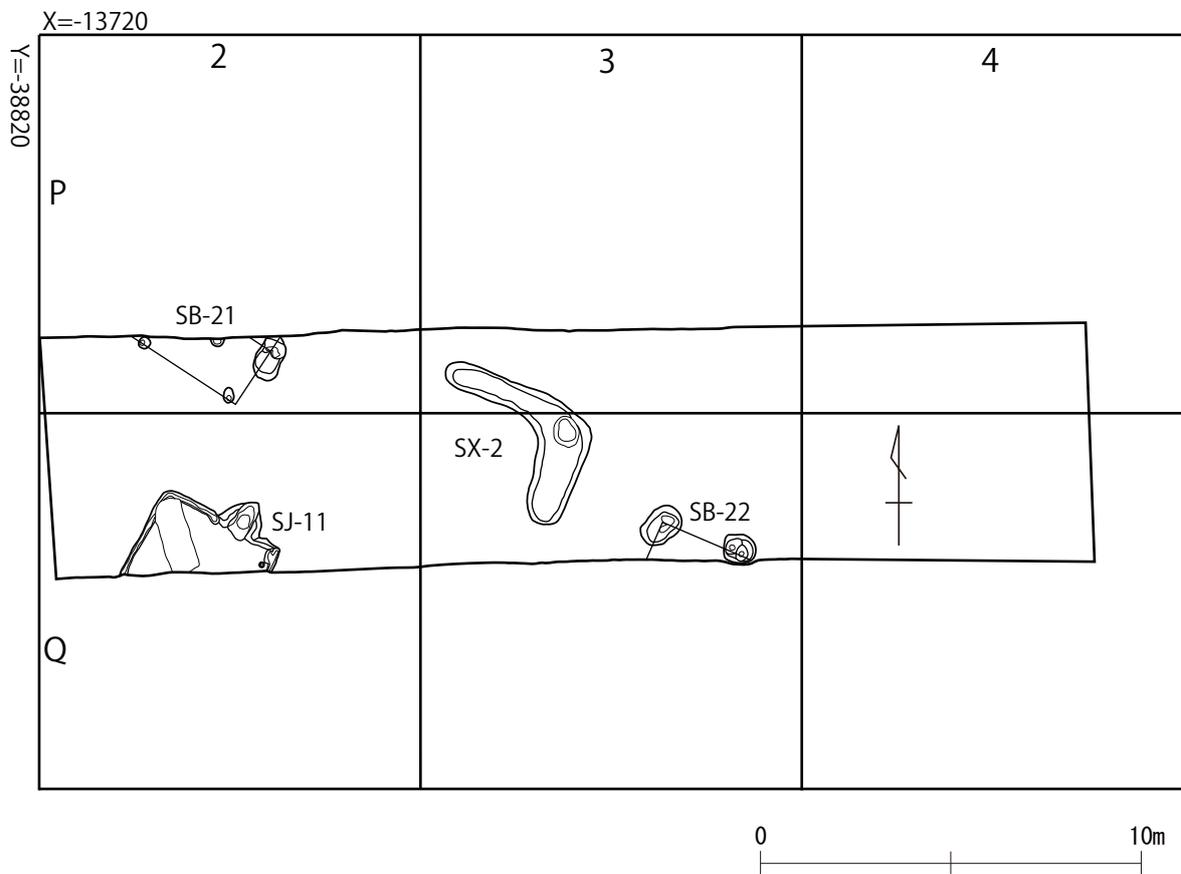
12月3日(水) 第11号住居跡カマド断面図作成、完掘。

12月4日(木) 第11号住居跡カマド、第22号掘立柱建物跡平面図作成。

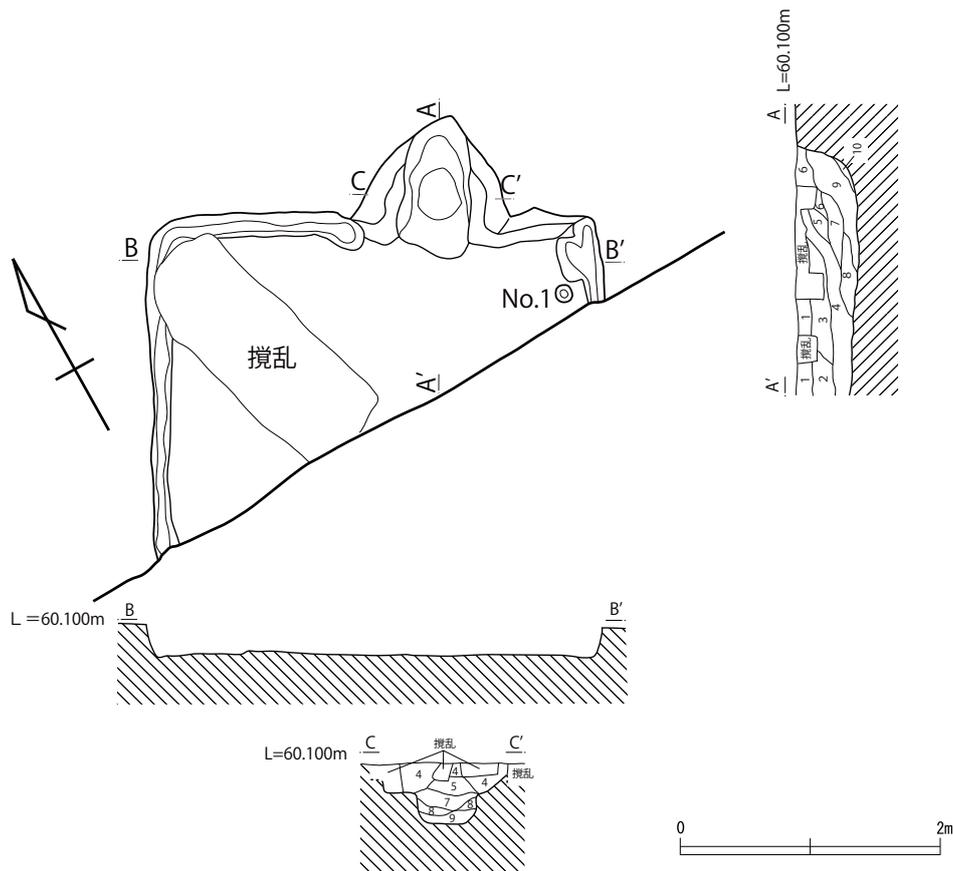
12月5日(金) 第22号掘立柱建物跡、第2号不明遺構平面図作成。

12月15日(月) 調査終了。機材撤収。

調査の結果、検出された遺構は奈良・平安時代の住居跡1軒、掘立柱建物跡2棟、不明遺構1基である。なお、昭和60年に狭山市教育委員会が実施した第2次調査からの通し番号で、竪穴住居跡が第11号住居跡、掘立柱建物跡が21・22号掘立柱建物跡、不明遺構が第2号不明遺構となる。



第46図 小山ノ上遺跡第11次調査全測図



(SJ-11)

- |          |                             |
|----------|-----------------------------|
| 1 黒褐色土層  | ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む。しまりやや不良   |
| 2 黒褐色土層  | 黒色土をブロック状に含む                |
| 3 黒褐色土層  | ロームブロックを多く含む                |
| 4 暗茶褐色土層 | ローム粒・ロームブロックを多量に含む          |
| 5 暗茶褐色土層 | 粘土ブロックを含有                   |
| 6 暗灰色土層  | 粘土を多量に含む。ロームブロック・焼土が混入している。 |
| 7 暗灰色土層  | 粘土層                         |
| 8 黒褐色土層  | ローム粒・焼土・粘土を少量含む             |
| 9 暗赤褐色土層 | 焼土を多量に含む。炭化物も含有。しまり不良       |
| 10 黒褐色土層 | 焼けたロームブロック・焼土・粘土を少量含む       |

第 47 図 第 11 号住居跡

## 2 検出遺構

### 住居跡

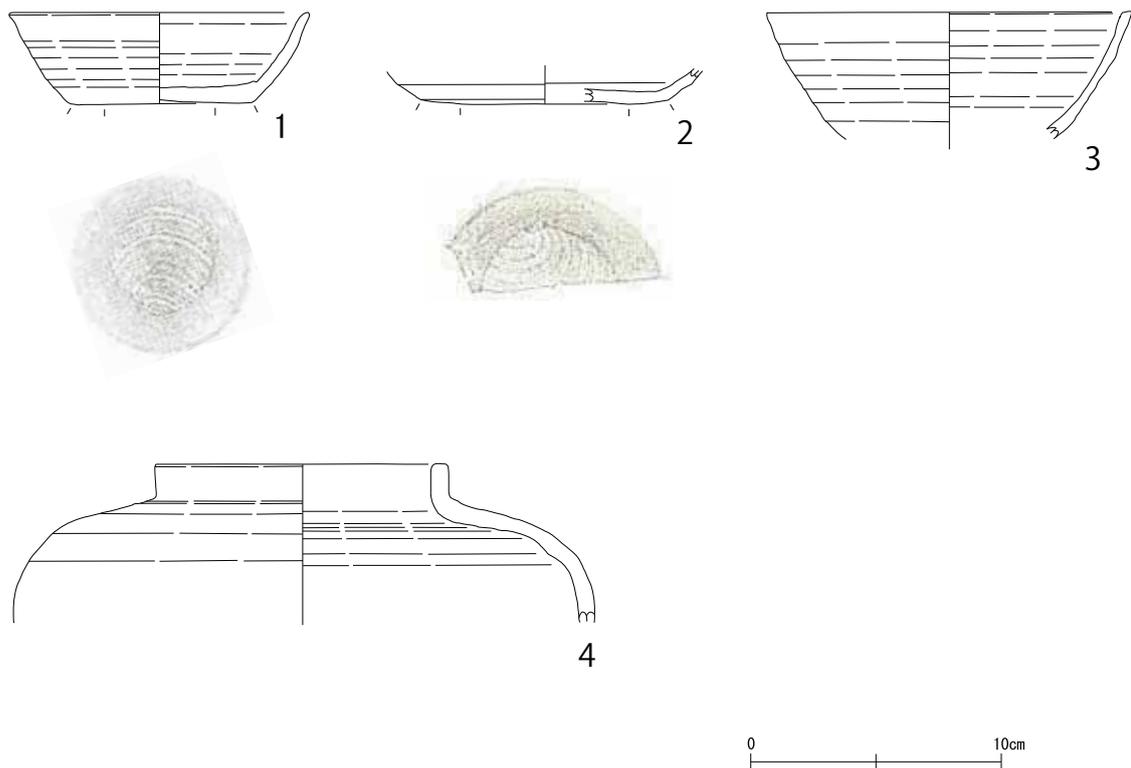
#### 第 11 号住居跡 (第 47 図)

本遺構は調査区東側の Q-2 グリッドで検出し、南側の一部が調査区外になる。遺存状態は良好。

遺構南側が調査区外のため平面形は不明。規模は、東西長 3.50 m、南北長は不明、深さ 0.40 ~ 0.47m を測る。主軸方位は N-30°-E を指す。

床面は平坦である。壁溝はカマド付近を除いて全周していると考えられる。規模は溝幅 0.14m ~ 0.18m、深さ 0.03m ~ 0.05m を測る。壁体はほぼ垂直に立ち上がっている。

カマドは北壁から検出され、遺存状態は良好である。平面形は三円形を呈し、規模は縦軸長 1.10m を



第 48 図 第 11 号住居跡出土遺物

第 11 号住居跡出土遺物観察表

NO	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	須恵器杯	11.9	7.3	3.7	100%	白色粒・砂粒・小礫	良好	青灰色	回転糸切り後周辺回転ヘラ削り。東金子産
2	須恵器杯	(14.6)	—	(5.1)	破片	白色粒・黒色粒・小礫	良好	灰色	内面に墨付着。東金子産
3	須恵器碗	—	(9.9)	(1.4)	破片	白色粒・砂粒・小礫	良好	灰色	回転糸切り後周辺回転ヘラ削り。東金子産
4	須恵器壺	11.5	—	(6.4)	10%	白色粒・黒色粒・砂粒	良好	灰色	ロクロ目なめらか。東金子産

測る。両袖間は 1.25 m を測る。

出土遺物は須恵器杯・須恵器碗・須恵器壺が出土している（第 48 図）。1・2 は須恵器杯である。1 は全体的に器厚が均一だが、底部中央がへこむ。口縁部はやや外反し、体部は湾曲、底部はやや上げ底になっている。内底部外周に爪先技法が施されている。東金子産。2 は口縁部から体部下位の破片である。器厚は均一である。口唇部はほぼ面になっている。体部は湾曲している。内面に墨が付着しており、硯として再転用されていた可能性がある。東金子産。3 は須恵器碗の底部である。器厚はほぼ均一で、底部から体部への立ち上がりは直線的である。東金子産。4 は須恵器壺の口縁部から肩部の破片である。器厚は全体的に厚い。口縁部は垂直に立ち上がっている。ロクロ目は滑らかで、作りは非常に丁寧である。東金子産。

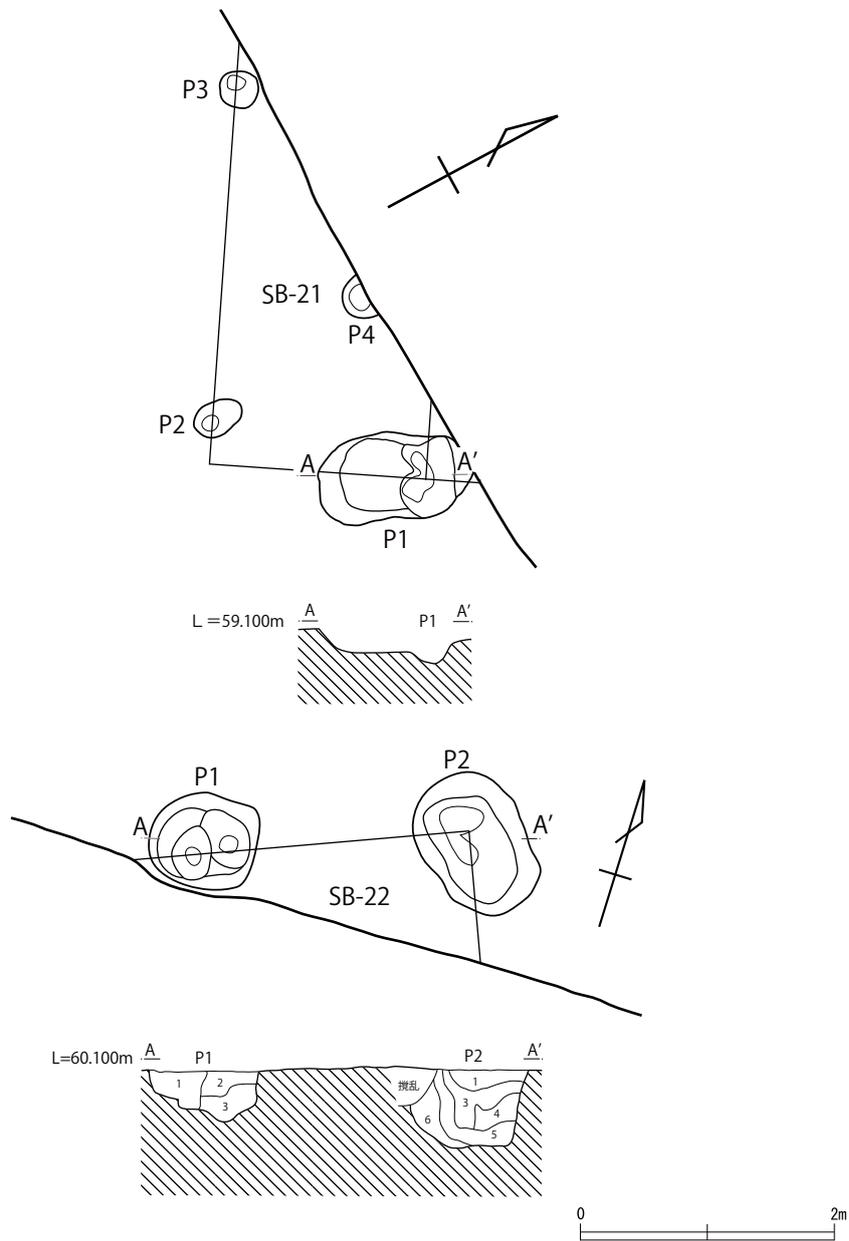
### 掘立柱建物跡

#### 第 21 号掘立柱建物跡（第 49 図）

本遺構は調査区東側の P-2 グリッドで検出しているが、北側大部分が調査区外となっている。

P 1 は建物の柱穴で、P 2、3 は庇の柱穴と推測する。主軸方向は N-58°-W を指すと思われる。大部分は調査区外のため規模等の詳細は不明である。

遺物は出土していない。



(SB-22)

- |   |        |                           |
|---|--------|---------------------------|
| 1 | 黒色土層   | ローム粒・焼土粒を少量含む。しまり良        |
| 2 | 暗黄褐色土層 | ローム粒を多量に含む。しまり良           |
| 3 | 黒褐色土層  | ローム粒・ロームブロック (小) を含む。しまり良 |
| 4 | 暗黄褐色土層 | ローム粒を主体とする。しまり良           |
| 5 | 黒褐色土層  | ロームブロックを少量含む。しまり良         |
| 6 | 黄褐色土層  | ロームブロックを主体とする。しまり良        |

### 第 49 図 第 21・22 号掘立柱建物跡

#### 第 21 号掘立柱建物柱穴一覧表

No	形状	規模 (直径)	深さ	No	形状	規模 (直径)	深さ
P1	楕円形	(114) × 70	23	P3	円形	31 × 32	不明
P2	円形	38 × 25	不明	P4	円形	35 × (18)	不明

#### 第 22 号掘立柱建物柱穴一覧表

No	形状	規模 (直径)	深さ	No	形状	規模 (直径)	深さ
P1	円形	75 × 85	42	P2	楕円形	100 × 106	60

※規模は南北×東西、単位は cm、( ) 内は残存部分

**第 22 号掘立柱建物跡 (第 49 図)**

本遺構は調査区中央やや東側の Q - 3 グリッドで検出しているが、南側大部分が調査区外のため詳細は不明である。推定になるが、おそらく主軸方向は N - 22° - W を指すと思われる。

柱穴は楕円形のものが 2 基検出されており、柱穴間は 1 箇所だけが 2.00 m を測る。柱痕は検出されなかった。

遺物は出土していない。

**不明遺構**

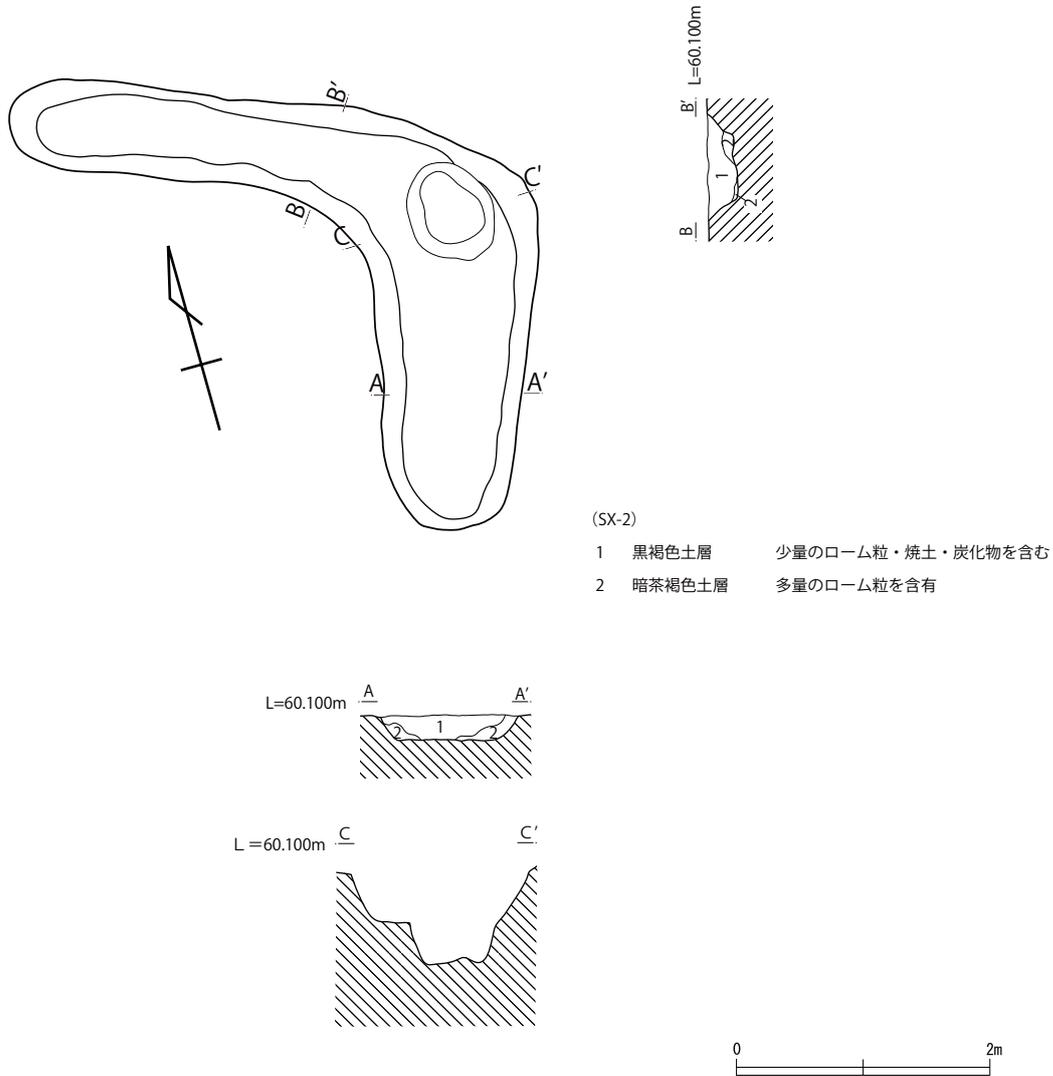
**第 2 号不明遺構 (第 50 図)**

本遺構は調査区中央 P・Q - 3 グリッドで検出している。

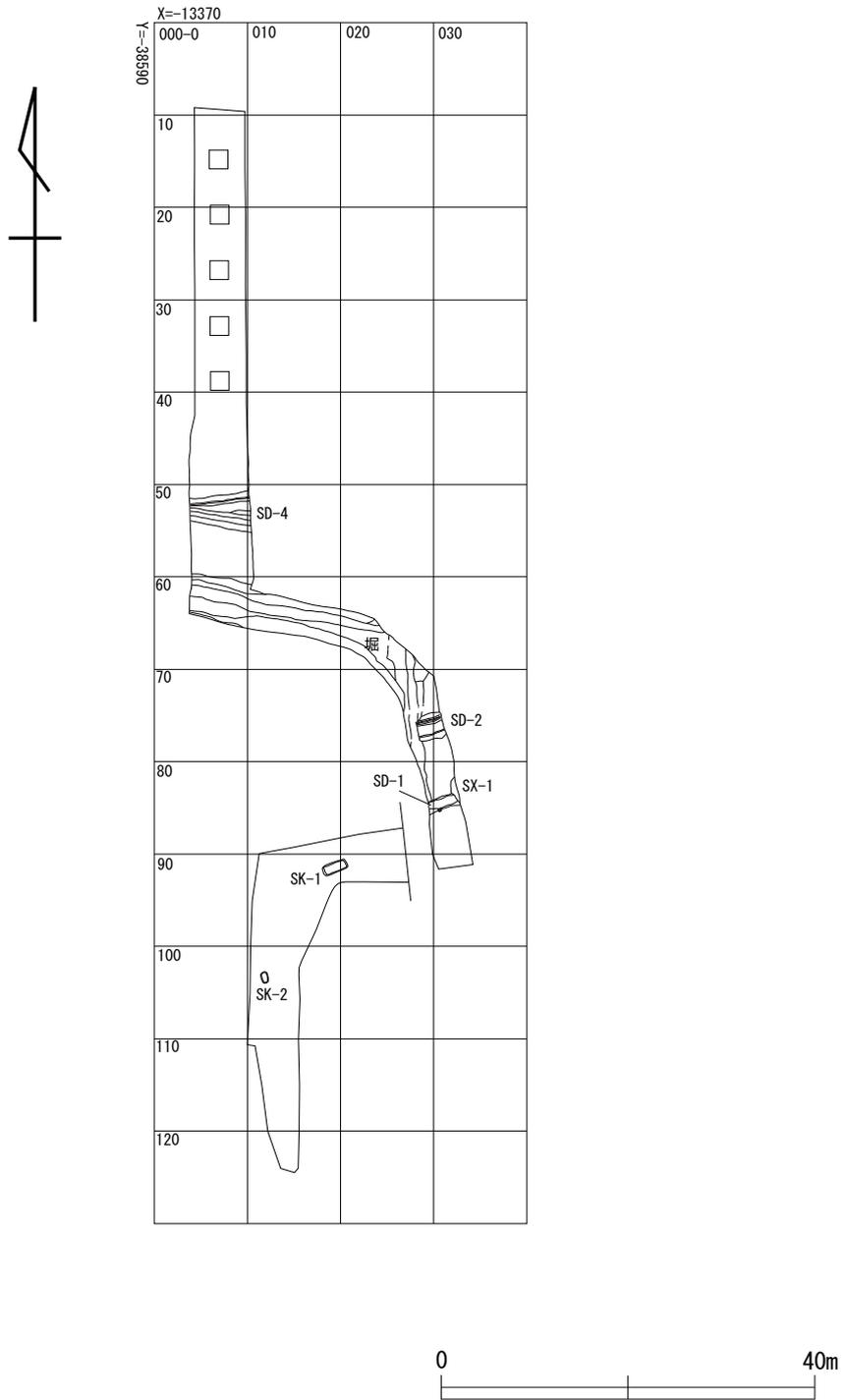
平面形は L 字型をしており、コーナーの部分に土壇状の穴が検出されている。

全体の規模は長軸長 4.10m、短軸長 3.00m、深さ 0.15 ~ 0.10m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。



第 50 図 第 2 号不明遺構



第 51 図 英遺跡第 1 次調査全測図

# Ⅶ 英遺跡第 1 次調査

## 1 調査の経過と概要

調査原因が圃場整備のため、確認調査は行わず、本調査を平成 6 年 2 月 21 日から平成 6 年 9 月 5 日にかけて実施した。調査の経過は以下のとおりである。

平成 9 年度

2 月 21 日(月) 人力による表土除去。調査区壁の切りそろえ。遺構確認調査開始。

3 月 24 日(木) 第 1 号堀断面図 A・B 作成。

3 月 28 日(月) 第 1・2 号溝完掘、全景写真撮影、平面図作成。

3 月 30 日(水) 第 1・2 号土壇完掘、全景写真撮影、平面図作成。

9 月 2 日(金) 第 1 号堀、第 3・4 号溝完掘、平面図作成

9 月 5 日(月) 第 1 号堀断面図 C 作成。作業終了。

調査の結果、検出された遺構は溝 3 条、堀 1 条、土壇 2 基である。なお、本調査が当遺跡内での初めての調査となるため、遺構番号は、溝が第 1～4 号溝、堀が第 1 号堀、土壇が第 1・2 号土壇となる。

## 2 検出遺構と出土遺物

### 溝

#### 第 1 号溝 (第 52 図)

本溝は調査区中央やや南 020・030－80 グリッドに位置し、東西方向に伸びるものを検出している。東西ともに調査区外まで伸びており、本遺構の東側は不明遺構に破壊されており、また、西側は第 1 号堀を破壊している。

規模は検出されているところで、全長は 1.30 m、溝幅は 0.52 m、深さは 0.31m～0.33m を測る。

出土遺物はなく遺構の性格等詳細は不明である。

#### 第 2 号溝 (第 52 図)

本溝は調査区中央やや南 020・030－70 グリッドに位置し、2 条の溝が W 状に平行して東西方向に伸びるものが検出されている。東の調査区外まで伸びており、西は第 1 号堀があり、堀の縁で溝が止まっている。北側の溝は明確に溝とわかるが、南側の溝は、地面を多少抉ったような感じであり、おそらく明確に溝として掘ったものとは考えにくい。

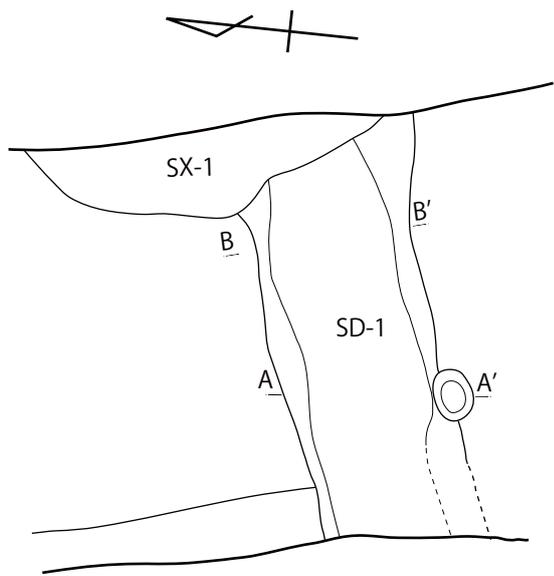
北側の溝の規模は検出されているところで、全長は 1.14 m、溝幅は 0.14 m、深さは 0.40m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、堀の縁で明確に止まっていることを考えるとおそらく堀に付随する溝の可能性がある。

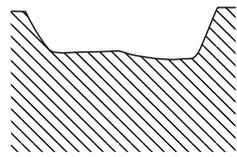
#### 第 3 号溝 (第 53 図)

本遺構は調査区北側 000－50 に位置し、2 条の溝が W 状に東西方向に伸びるものが検出されている。南側の溝が、北側の溝を破壊している。

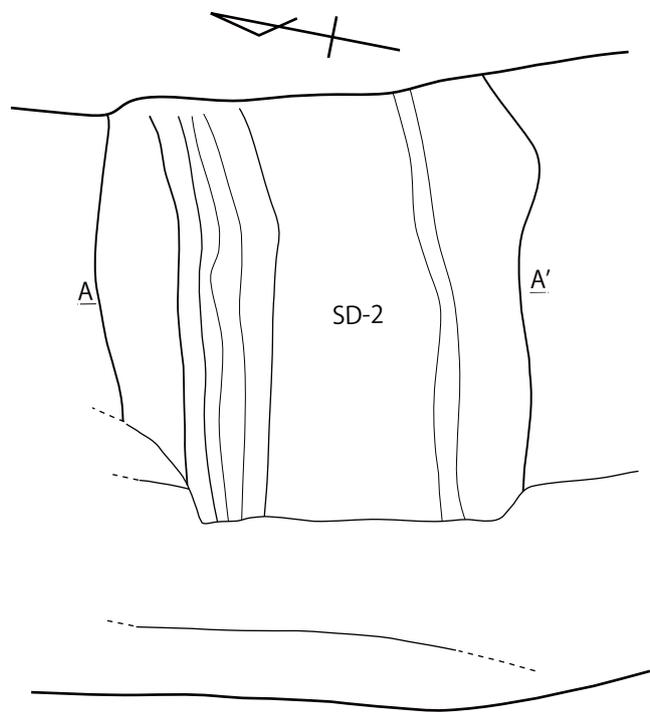
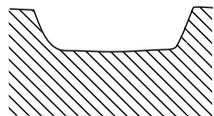
規模は検出されているところで、北側が全長は 6.42 m、溝幅は 2.23m m、深さは 0.75～0.80m、南側が全長 6.60m、溝幅 1.80m、深さ 0.85m を測る。



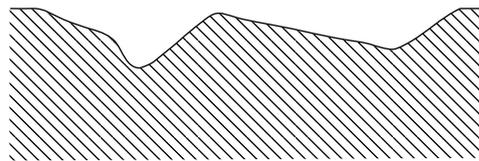
L=58.000m A A'



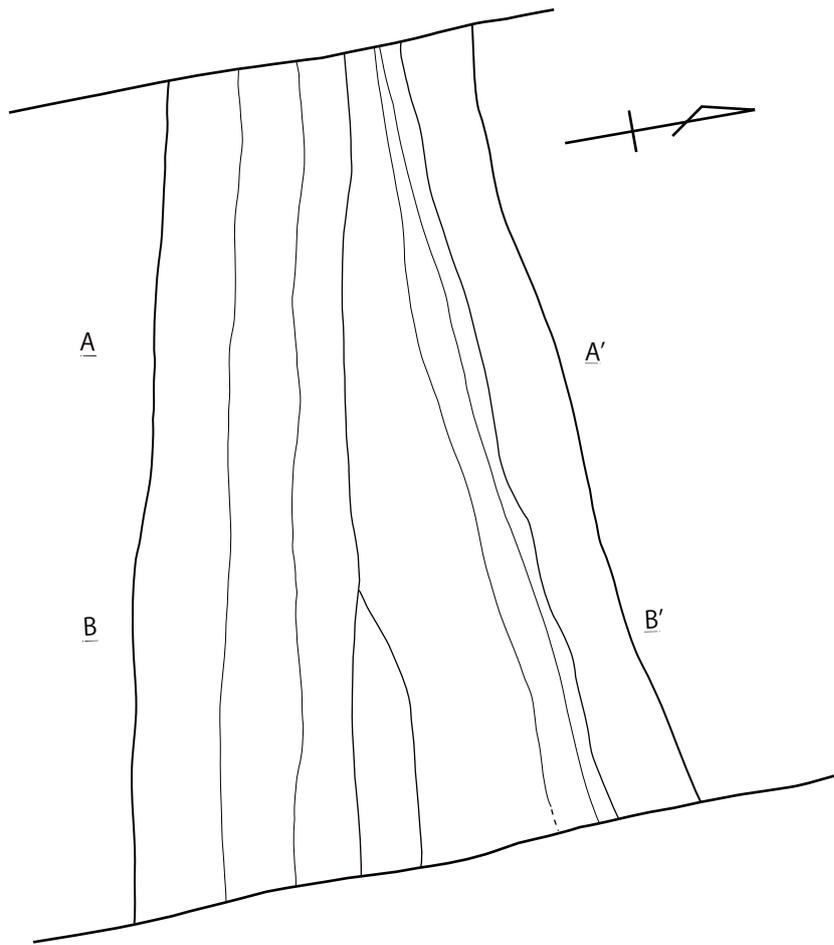
L=58.000m B B'



L=58.000m A A'

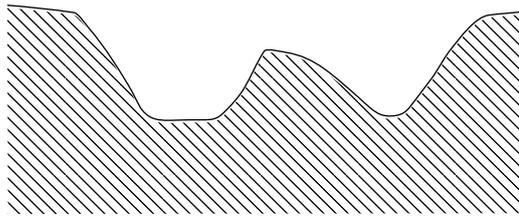


第 52 図 第 1・2 号溝



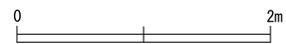
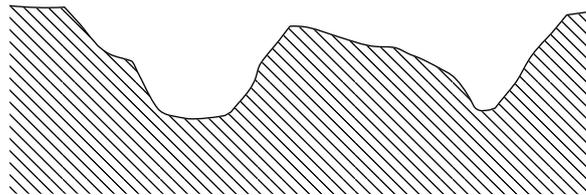
L=59.500m A

A'



L=59.500m B

B'



第 53 图 第 3 号沟

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

## 堀

### 第1号堀（第54・55・56図）

本堀は調査区中央の000・010・020－60、020－70・80グリッドに位置し、南東から北東方向に伸びるものが検出されている。

規模は検出されているところで、全長28.50m、幅4.00m以上、深さ2.75mを測る。堀の形状は、薬研掘りである。北東部分で北に伸びる堀と西に伸びる堀が直角に合流している。

土層の特徴は、堀C－C'をみるに、第1層から第5層までが近現代、第6層から第16層までが近世、第17層から第27層が中世から近世にかけて埋没したと推測できる。近世の層では第6・8・13・14層で硬化面が検出されており、おそらく当時の生活道路が埋没を繰り返しながら長く使用されていたと推測できる。また、第16層において軟質な黒色土層が検出されており、おそらく有機物の堆積によってできた層だと考えられ、埋没感覚に前層との明確な時間差があったことが伺える。中世から近世のそうでは、第22層がもっとも特徴的で、この層の上部から内耳鍋が出土している。おそらく、土塁の崩壊による流れ込みの層だと考えられる。また、土塁の流れ込みがC側から流れ込んでいるため、土塁自体は堀の南および西側に築かれていたことがわかる。

出土遺物は、かわらけと内耳鍋が検出している（第57図）。他にも板碑片や須恵器、土師器などが出土しているが、破片であったため、これらは図示していない。1、2はかわらけである。ともに完形品で堀の土塁部分と推測される箇所から出土している。1は器厚が全体的に均一で、体部、口縁部ともに直線的である。内外面ともにこげ痕があり、底部内面になで痕がある。2の器厚は底部中央が若干薄く、他は均一である。体部、口縁部ともに直線的である。内外面ともにこげ痕があり、底部内面に布による調整痕が見られる。1、2ともに山内上杉系のかわらけだと考えられる。3は内耳鍋である。器厚はほぼ均一で、重量感がある。内耳の部分は少し細めの粘土紐で形作られている。外体部の下半分に被熱痕があり、内体部の下三分の二が真っ黒にこげている。

### 第1号堀出土遺物観察表

NO	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	かわらけ	12.2	8.0	2.7	50%	白色粒・赤色粒・石英	良好	淡褐色	回転糸切りのみ。内外面にこげ痕あり
2	かわらけ	15.9	10.8	3.3	90%	白色粒・赤色粒・石英・小礫	良好	淡褐色	回転糸切りのみ。内外面にこげ痕あり
3	内耳鍋	28.6	20.7	15.5	50%	白色粒・黒色粒・石英	良好	明褐色	堀の土塁の流れ込み上部から出土

## 土壇

### 第1号溝（第57図）

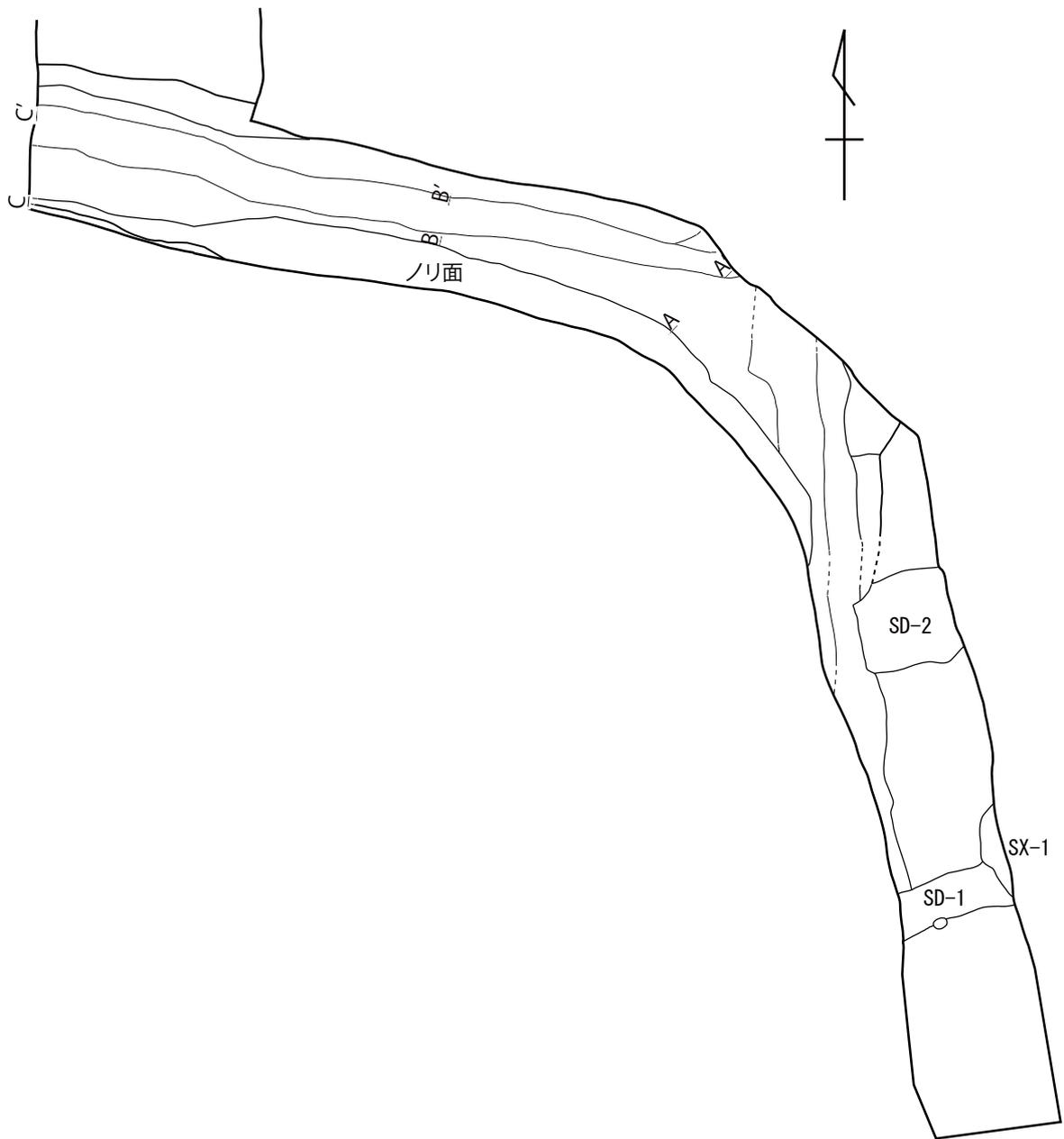
本土壇は調査区南側010－90グリッドに位置する。

平面形は長方形を呈し、全体の規模は、長軸長2.74m、短軸長1.10m、深さ0.35～0.37mを測る。出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性が高い。

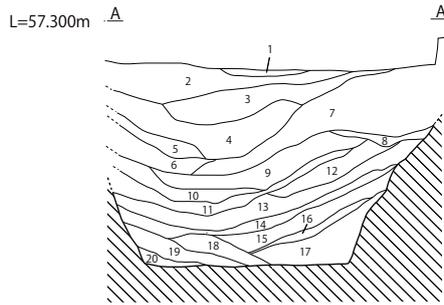
### 第2号溝（第57図）

本土壇は調査区南側010-100グリッドに位置する。

平面形は楕円形を呈し、全体の規模は、長軸長1.22m、短軸長0.76m、深さ0.05～0.07mを測る。出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明であるが、おそらく近世以降の芋穴の可能性が高い。

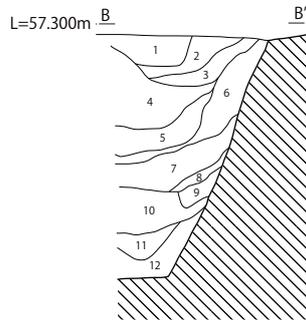


第54図 第1号堀



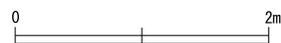
(堀A)

1	黒褐色土層	ローム粒を多量に含有する。しまり良	11	黒褐色土層	ドロドロ状を呈す。粘性あり
2	黒褐色土層	第1層よりローム粒の含有が少ない。しまりやや不良	12	暗黄褐色土層	ロームブロックを主体とする。しまり不良
3	黒褐色土層	第2層に類似するが、ロームブロックが混入している	13	暗黄褐色土層	第12層に類似するが、ロームブロック含有が多い
4	黒褐色土層	粒子粗く、ローム混入多し。第3層より軟弱	14	黒褐色土層	第11層に類似。しまり不良。粘性強い
5	暗黄褐色土層	ローム粒を主体とする。茶色が強い層。しまり不良	15	暗黄褐色土層	第13層と酷似。ロームブロックは大きい
6	茶褐色土層	ローム粒を主体とする。しまり不良	16	暗黄褐色土層	黒色土を多く含む
7	黒色土層	上部右側にロームブロックをサンドイッチ状に含む。しまり良。	17	暗黄褐色土層	ロームブロック（小）を主体とする。しまり不良
8	茶褐色土層	ローム粒を主体とする。しまり不良	18	暗黄褐色土層	ロームブロック（大）を主体としている
9	暗黄褐色土層	ローム粒・ロームブロックを主体とする。しまり不良	19	暗黄褐色土層	黒色土混入。色調は暗い
10	暗黄褐色土層	ロームブロックを含まない。しまり不良	20	暗黄褐色土層	第17層に類似。しまり不良

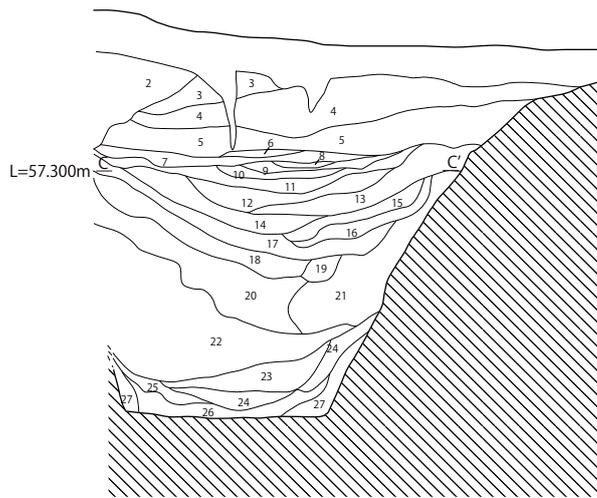


(堀B)

1	黄褐色土層	ローム粒を主体とする。固くしまっている	} 地境溝覆土
2	黒褐色土層	ローム粒を多量に含む。しまりやや不良	
3	黒褐色土層	ローム含有少なく、しまり不良	
4	黄褐色土層	ローム粒・ロームブロックを主体とする。しまり不良	
5	暗茶褐色土層	黒色土のブロックが混入。しまり不良	
6	暗黄褐色土層	ロームブロックを主体とする	
7	暗黄褐色土層	第6層のロームブロックより大きいものを主体とする	
8	暗黄褐色土層	ローム粒を主体とする	
9	暗黄褐色土層	第7層に類似	
10	黒色土層	堀Aの第7層に対応	
11	黒褐色土層	堀Aの第11層に対応	
12	暗黄褐色土層	堀Aの第20層に対応	



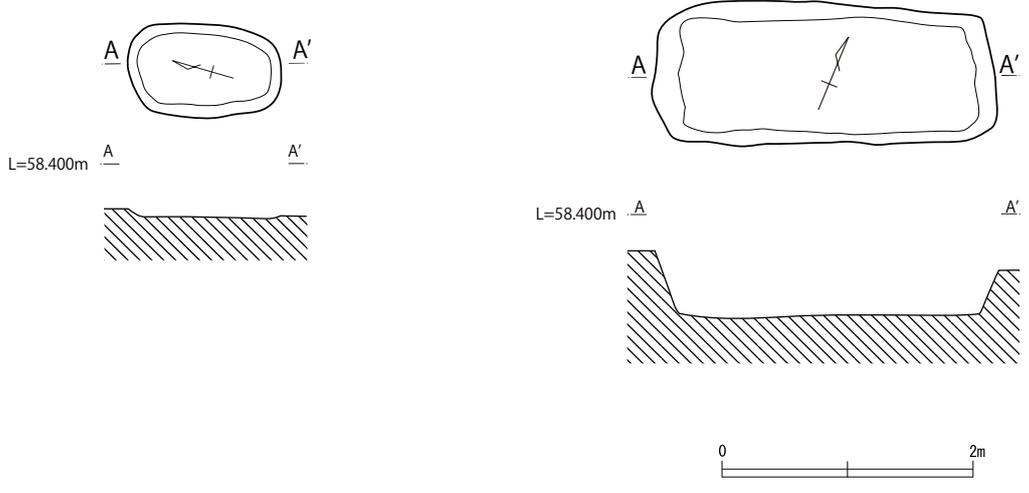
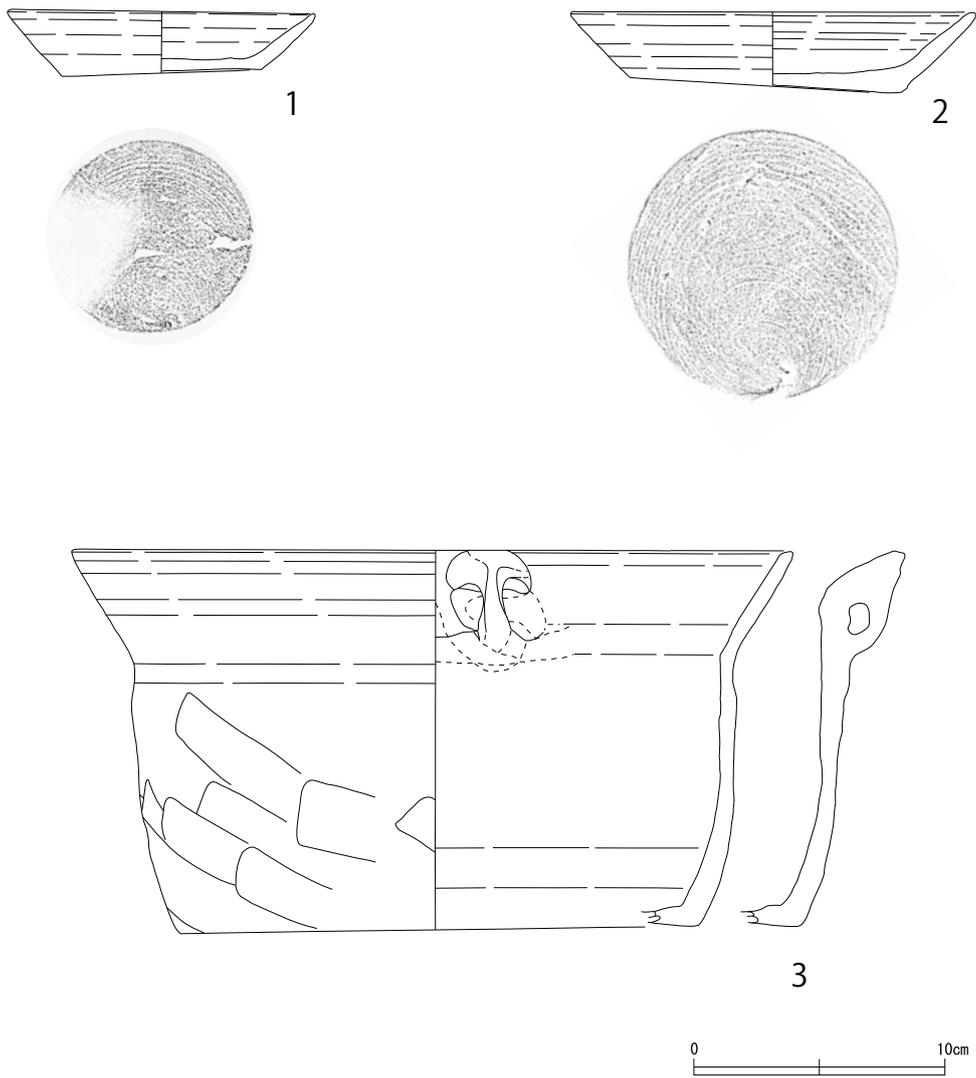
第 55 図 第 1 号堀 A・B 断面図



(堀C)

1	耕作土		
2	黒褐色土層	ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む。地境溝フク土	} 近現代
3	黒褐色土層	ローム粒・ロームブロックを多く含む	
4	黒褐色土層	第2層に類似。黒色が強い。しまり良	
5	黒褐色土層	第4層より黒色が強い。しまり良	
6	暗茶褐色土層	ローム粒を多く含有。固くしまっている。路面状	} 近世
7	黒色土層	第6層よりは軟らかい。しまり良	
8	茶褐色土層	第6層に類似。ローム粒を多く含む。固い。路面状	
9	黒色土層	第7層に類似。ロームブロックを少量含む	
10	暗茶褐色土層	ローム粒を多く含む。やや軟弱	
11	黒褐色土層	ローム粒・ロームブロックを多く含有。しまりやや軟	
12	黒褐色土層	第11層よりローム含有が少ない。しまりやや軟	
13	黒褐色土層	左側部分が固くしまっている。路面状	
14	黒褐色土層	ロームブロックを多く含む。固くしまっている。路面状	
15	暗黄褐色土層	多量のロームブロックを含む。しまり不良	
16	黒色土層	ドロドロ状を呈す。軟質	
17	暗黄褐色土層	ロームブロック (小) を主体とする。しまり不良	} 中世～近世
18	暗黄褐色土層	ロームブロック (大) を主体とする。黒色土塊が混在	
19	暗茶褐色土層	砂質。しまり良	
20	暗黄褐色土層	第17層に類似。しまり不良	
21	暗黄褐色土層	ローム塊を多く含む	
22	黒色土層	ロームブロックを多く含有 (下部に多い)。しまり良。粘性あり。上部より内耳鍋出土。土壘か？	
23	暗黄褐色土層	黒色土とロームブロックの混在層。しまり良	
24	暗黄褐色土層	第17層に類似。崩落ロームを主体とする。しまり不良	
25	暗黄褐色土層	ロームブロックを主体とする	
26	暗黄褐色土層	第23層に類似。かたい	
27	黄褐色土層	壁の崩落ロームを主体としている。粘性あり	

第 56 図 第 1 号堀 C 断面図



第 57 图 第 1 号堀出土遺物・第 1・2 号土壇

# VIII 英遺跡第2次調査

## 1 調査の経過と概要

圃場整備に伴った確認調査を行い、一部で遺構が検出されたため本調査を平成9年4月20日から平成9年5月9日にかけて実施した。調査の経過は以下のとおりである。

平成9年度

4月20日(日) 人力による表土除去。調査区壁の切りそろえ。遺構確認調査開始。

5月1日(木) 第1号住居跡断面図作成。

5月2日(金) 第1号住居跡完掘、全景写真撮影。

5月5日(月) 第1号住居跡平面図作成。

5月9日(金) 作業終了。機材撤収。

調査の結果、検出された遺構は奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒、土壌1基である。なお、遺構番号は平成9年に実施された第1次調査からの通し番号で、第1号住居跡、第3号土壌となる。

## 2 検出遺構と出土遺物

### 住居跡

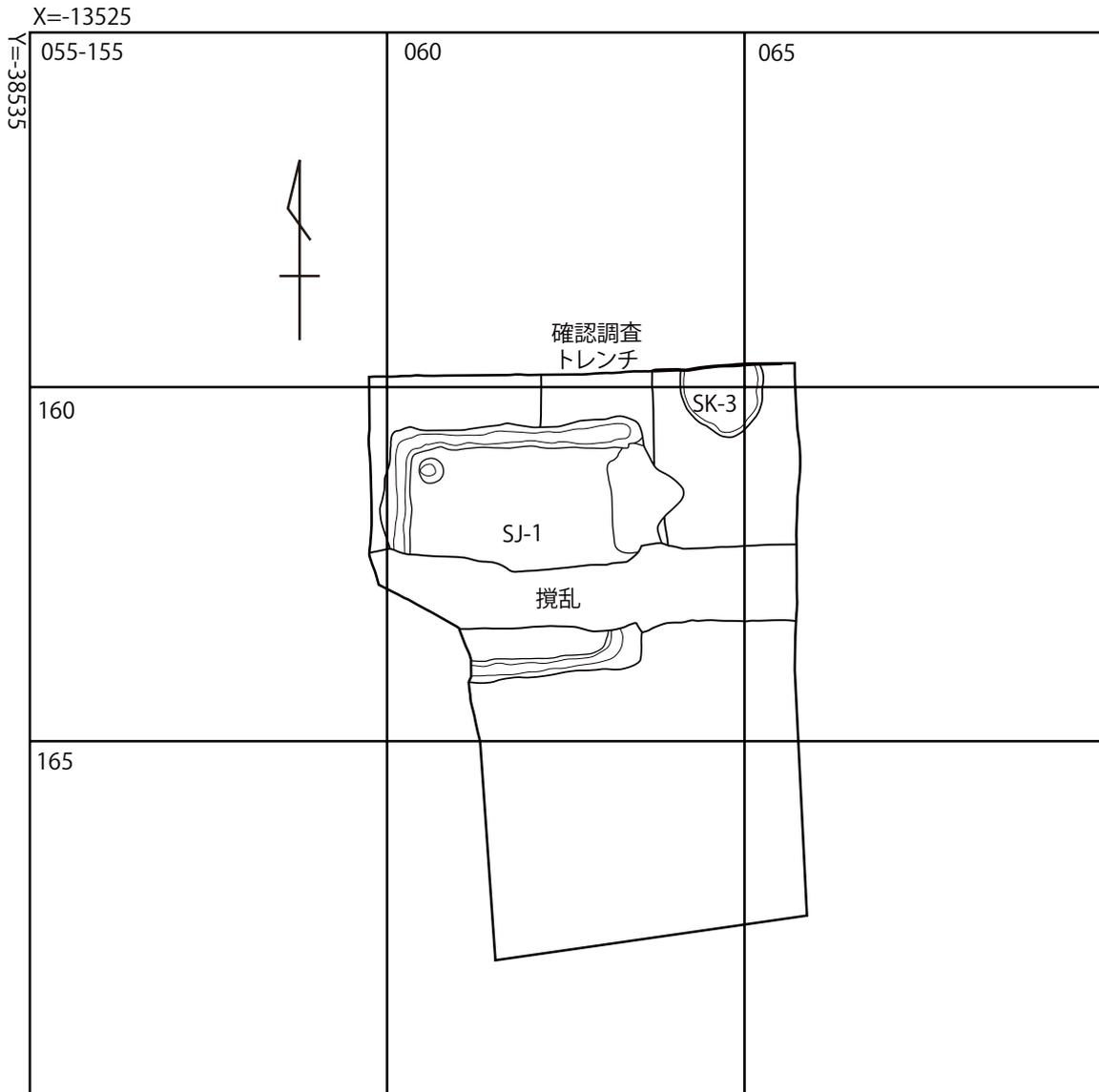
#### 第1号住居跡(第59図)

本住居跡は調査区北側060-160グリッドに位置する。南西部が一部調査区外になる。住居内に幅1.00m程の攪乱が縦断しているが、全体的に遺存状態は良好。平面形は1辺3.55mの正方形を呈し、深さは0.30mを測る。主軸方向はN-88°-Eを指す。

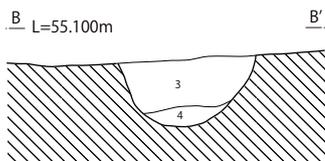
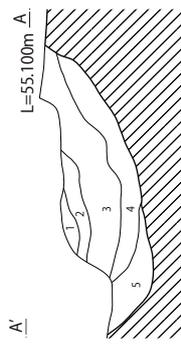
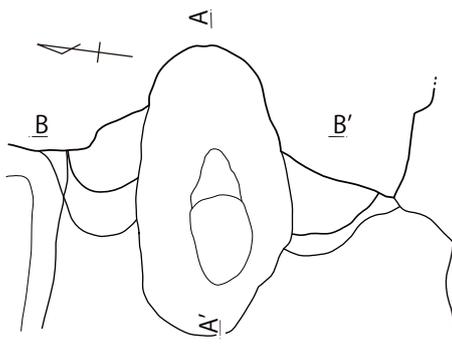
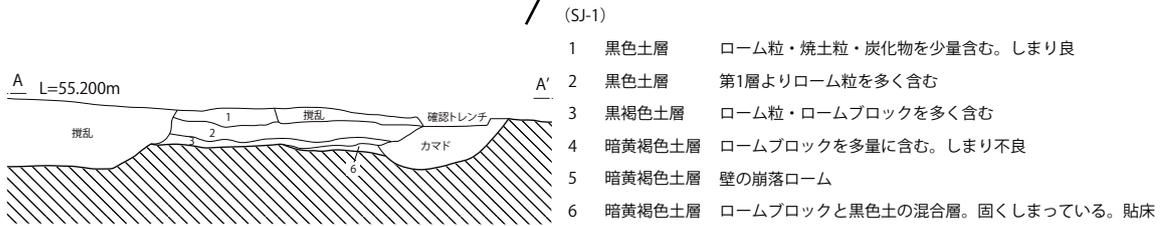
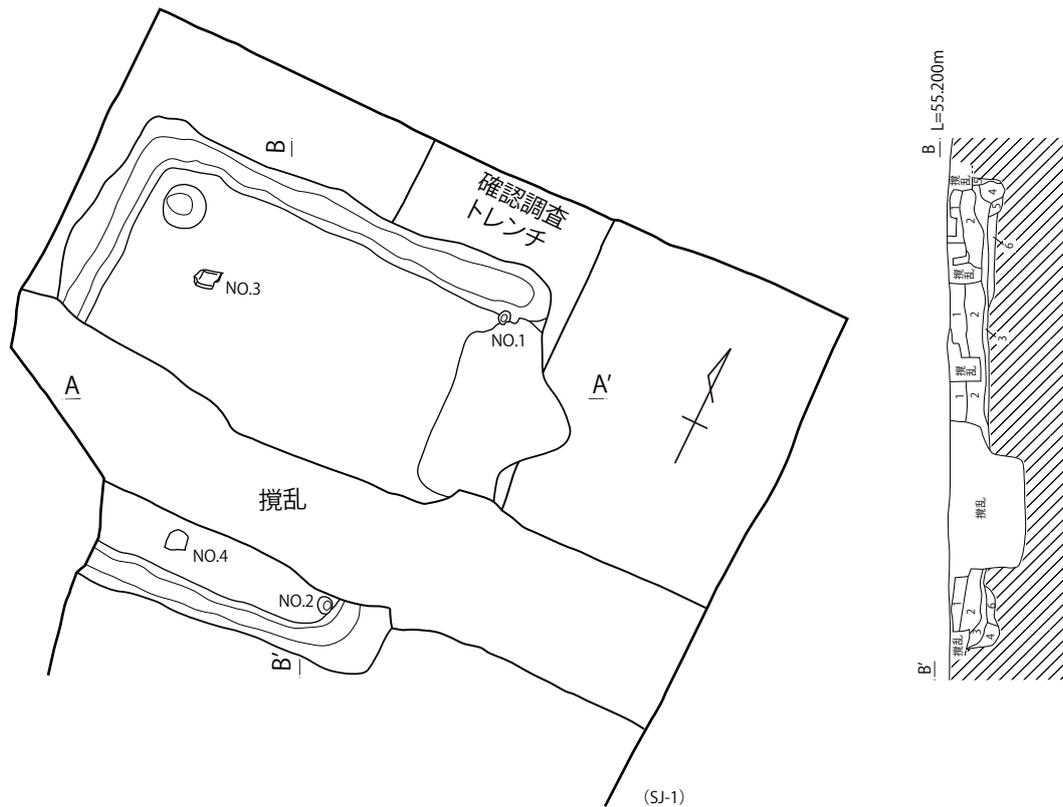
床面は平坦である。壁溝はカマドのある東壁以外で全周し、溝幅0.30m~0.45m、深さ0.05mを測る。壁体は垂直に立ち上がっている。

カマドは東壁から検出され、遺存状態は良好である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸長2.23m、短軸長1.20m、深さ0.54m、両袖長2.85mを測る。

出土遺物は須恵坏、須恵蓋、灰釉陶器、土師器台付甕、土師器甕が出土している(第60・61図)。1~5は須恵坏である。1の器厚は均一である。口縁部は外反し、体部は直線的、底部は上げ底である。南比企産。2の器厚は全体的に厚いが、底部中央のみ凹んでいる。口縁部、体部ともに直線的で、底部からの立ち上がりのみやや丸みを帯びている。破損のない完形で出土しており、内外面の丁度半分に煤が付着していることから、火掻き具として使用していた可能性がある。東金子産。3の器厚は口縁部が薄く、底部に向かって厚くなっている。口縁部は若干外反し、体部は丸みを持っている。底部は若干上げ底になっている。東金子産。4の器厚は口縁部、体部が薄く、底部が厚い。口縁部は若干外反し、体部は直線的、底部は若干の上げ底である。底部外面に煤が多量に付着しているため、おそらく火にかけて使用していたと思われる。東金子産。5は底部から体部中位の破片である。器厚は体部がかなり薄く、底部が厚い。体部はかなり丸みを持っている。底部糸切りの痕が明瞭に残っている。東金子産。6は須恵器蓋である。ボタン鈕を持ち、裾に返しを持っているがかなり丸い返しである。ロクロ目は顕著だが、全体的に歪んでいる。東金子産。7は灰釉陶器の底部から体部下位の破片である。器厚はかなり厚い。外面は全体的に灰釉



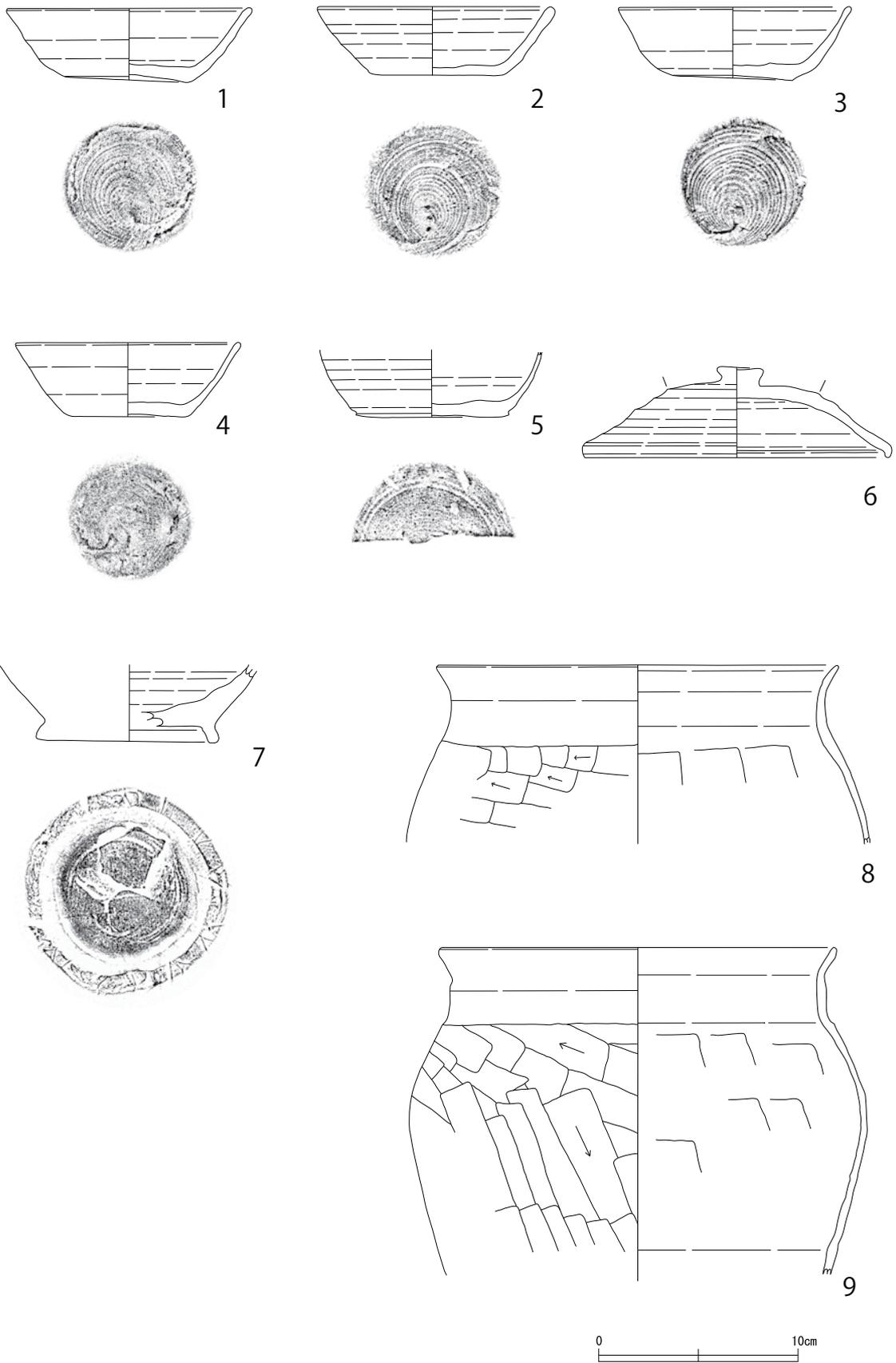
第58図 英遺跡第2次調査全測図



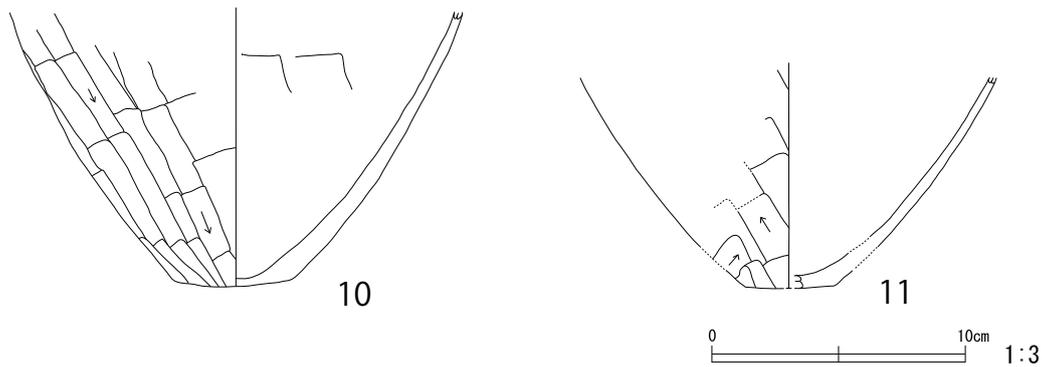
- (SJ-1 カマド)
- |   |       |                         |
|---|-------|-------------------------|
| 1 | 黒褐色土層 | ローム粒・焼土・粘土粒を多量に含む       |
| 2 | 黒褐色土層 | 粘土が斑状に混在する              |
| 3 | 赤灰色土層 | 焼けた粘土層。焼土を含む            |
| 4 | 暗灰色土層 | 粘土層。焼土を含むがあまり焼けていない。灰層か |
| 5 | 黒褐色土層 | ロームブロック・焼土・焼土ブロックを含有    |



第 59 図 第 1 号住居跡・カマド



第 60 图 第 1 号住居跡出土遺物 1

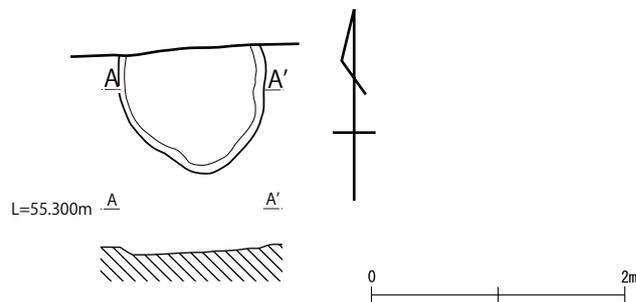


第 61 図 第 1 号住居跡出土遺物 2

第 1 号住居跡出土遺物観察表

NO	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	須恵器坏	12.2	6.4	3.7	95%	白色粒・白色針状・黒色粒・小礫	良好	暗青灰色	No.1. 回転糸切り。南比企産
2	須恵器坏	11.6	6.4	3.5	100%	白色粒・黒色粒・赤色粒・石英	良好	橙色	回転糸切り。火掻き具として使用か？東金子産
3	須恵器坏	11.6	6.0	3.7	100%	白色粒・黒色粒・石英	良好	褐色	回転糸切り。東金子産
4	須恵器坏	11.2	6.0	3.3	80%	白色粒・黒色粒・赤色粒	不良	浅黄橙色	回転糸切り。底部に煤多量に付着。東金子産
5	須恵器坏	—	(7.6)	(3.4)	20%	白色粒・砂粒・小礫	普通	灰白色	回転糸切り。東金子産
6	須恵器蓋	15.2	—	4.6	95%	白色粒・黒色粒・赤色粒・石英	良好	灰白色	ボタン鈕。全体的に歪んでいる。東金子産
7	灰釉陶器	—	9.1	(3.9)	破片	白色粒・黒色粒	良好	灰白色	外面全面灰釉。猿投産
8	土師器台付甕	(20.0)	—	(9.0)	破片	白色粒・黒色粒・石英・長石	不良	黄褐色	口縁部「く」から「コ」の字状への移行期
9	土師器甕	(19.6)	—	(16.6)	20%	白色粒・黒色粒・石英・長石	不良	明赤褐色	口縁部「コ」の字状。口縁部歪みあり
10	土師器甕	—	4.4	(10.9)	20%	白色粒・黒色粒・石英・長石	不良	赤褐色	長石の含有率が高い
11	土師器甕	—	3.5	(8.4)	破片	白色粒・黒色粒・石英・長石	不良	にぶい褐色	底部から体部下位の一部分

がついており、内面は灰釉のしづきが少し見られる。脚部と体部の接合面は乖離しかけており、灰釉によって強固に繋がっている。猿投産。8は土師器台付甕の口縁部から体部の一部である。口縁部は「く」から「コ」の字状への移行期のもので、器厚はおおよそ均一で、若干口縁部と体部の接合部が厚くなっている。口縁部は外反している。9～11は土師器甕である。9は口縁部から体部下位の破片で、口縁部は「コ」の字状を呈している。器厚は均一であるが、内面体部下位に若干厚くなっている場所があり、また、明確なロクロ目が見られることから、補強した後だと思われる。10は底部から体部下位の破片である。器厚は底部と体部の接合部が厚くなっている。底部は若干丸底になっている。胎土の特徴として長石の含有率が高い。11は底部から体部下位の破片である。器厚はほぼ均一で、底部は若干丸底になっている。



第 62 図 第 3 号土壌

土壌

第 3 号土壌 (第 62 図)

本土壌は調査区北東部 060 - 160 グリッドに位置する。北側の一部分が調査区外となる。平面形は楕円形を呈すると思われる。全体の規模は、長軸長は不明だが、短軸長 1.15m、深さ 0.07m を測る。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

# XI 結語

## 検出住居跡の年代

小山ノ上遺跡では、昭和 60 年の県埋蔵文化財調査事業団（以後、県事業団）の調査以降、10 回に渡る発掘調査が実施されている。調査原因は、道路建設と圃場整備が中心で、その他に個人住宅建設が挙げられる。今回報告する第 7、9、10、11 次調査は圃場整備に伴う発掘調査で、遺跡内に小規模なトレンチを入れたような調査区となっている。出土遺構が少ないため、集落俯瞰での遺構分布について論じることが難しい。よって、本格的な集落の検討については今後の発掘調査に期待する。ここでは検出された遺構、遺物について、中村倉司氏の編年表（中村 1988）に当てはめて、その時期について若干述べたい。

今回報告した 6 軒の住居跡は出土遺物から第 7 次調査第 6 号住居跡がⅢ期前半（8 世紀第 4 四半期）、第 7 号住居跡はⅡ期（8 世紀第 3 四半期）、第 10 次調査第 8 号住居跡がⅤ期（9 世紀第 3 四半期）、第 9 号住居跡がⅤ期（9 世紀第 3 四半期）、第 10 号住居がⅤ期（9 世紀第 3 四半期）、第 11 次調査第 11 号住居跡がⅢ期（8 世紀第 4 四半期～9 世紀第 1 四半期）に比定される。掘立柱建物跡では出土遺物は全て無く、時期は不明である。それぞれの同時期の遺構は既報告書の遺構群にも見られ、各遺構の時期、遺構数から推測するに、8 世紀前半に集落が成立し、8 世紀末から 9 世紀にかけて興隆期を迎え、10 世紀頃には廃絶していた可能性が高い。これらの事は、文献史学における高麗郡建郡（8 世紀初頭）から国分寺創建（8 世紀中葉）、国分寺の塔再建（9 世紀）、東金子窯跡群の廃絶（10 世紀）にも合致していることから、本遺跡は東金子窯跡群の工人に関連する集落だと考えられる。

英遺跡では、今回報告した平成 6 年の第 1 次調査、平成 9 年の第 2 次調査の計 2 回発掘調査が実施されている。調査原因は、ともに圃場整備である。出土遺構が少ないため、集落俯瞰での遺構分布について論じることが難しい。よって、本格的な集落の検討については今後の発掘調査に期待する。ここでは検出された遺構、遺物の時期について若干述べたい。

今回報告した第 1 号住居跡出土遺物の特徴は、須恵器坏で、法量が口径 12cm 前後、底径 6cm 以上、器高 3.5cm 前後で、底径が口径の 2 分の 1 以上、底部が回転糸きりのみとなる。これらの特徴は東金子窯跡群内で 8 世紀第 4 四半期に比定される。

今回報告した小山ノ上遺跡、英遺跡の出土遺物の中で多数を占める須恵器は、主要供給源である東金子窯跡群の製品が大多数であるが、若干数南比企産のものが認められる。これは、須恵器の産地比率が、この地域における一般的な様相を示していると考えられる（入間地区文化財担当者部会 1995）。

## 小山ノ上遺跡・英遺跡検出の堀について

今回報告した小山ノ上遺跡第 7 次調査および英遺跡第 1 次調査において、堀の検出が確認されている。これら検出された堀の規模や性格等について簡単に述べたい。

両遺跡において、今回報告した 2 カ所以外に、県事業団の調査で 1 カ所、市で行った小山ノ上遺跡第 5 次調査で 1 カ所の計 4 カ所で堀の検出を確認している。ここでは便宜的に南から堀 A、B、C、D とする。（図 1）各堀の規模は表 1 のとおりである。

まず、堀 A と B について述べると、両堀は位置的に近く、規模がほぼ同じで、土層注から考えられる土塁

の位置がともに東側に位置するため、同一の堀の可能性が高い。同一の堀だとして、堀の推定ラインは図1で示されたものになると考えられる。その根拠は、1つに、堀Bの北側延長線上に当たる第5次調査で堀が検出されていないため、北には伸びず、東もしくは西に延びると考えられること。2つに土塁が東側にあるため、城内も東側部分になり、城内を囲うには堀Bから東に延びると考えられること。3つに、推定ラインのある現道路は、切り通しの道路になっており、堀の名残が見られることの3点が挙げられる。また、新編武蔵国風土記稿巻之百八十高麗郡之五に掲載されている砦跡之圖においても推定ラインと同様の土塁跡が描かれており、南側に崖を利用した1つの廓があった可能性は非常に高いと考える。

次に、堀C、Dについて述べる。堀Cは北側部分で直角に西に曲がっているが、調査担当者の見地を聞くに、堀が西に延びるといよりも、そこで途切れ、土橋を挟んで更に北に延びる可能性が高いと思われる。現状の地割を見ても、不自然に斜めに区画されていることから、堀が区割りのラインを通過していたと考えられる。延びた先には、堀Dが西側に延びた部分とぶつかるため、そこで繋がっていたと思われる。堀Cの南側は、直線的に延び、堀A、Bを含む堀のぶつかると考えられる。堀Dの南側は英遺跡第2次調査の確認調査によってあまり南に延びないことがわかっているため、現状住宅地になっている東に曲がり、現在切り通しの道路である県道笠幡狭山線にぶつかることと推定される。堀A・B同様、新編武蔵国風土記稿巻之百八十高麗郡之五に掲載されている砦跡之圖に同じ位置あたりに土塁の跡が描かれていることから推定ラインの可能性は高いと考える。よって、多少不整形な廓があったと考えられる。

これらのことから、同地域には少なくとも2つの廓を持った平城もしくは陣城があったのではないかと考える事が出来る。時代や性格については、新編武蔵国風土記稿において、義貞砦跡もしくは足利利基氏の入間川陣営の可能性を推定しているが、出土遺物として、かわらけや内耳鍋が出土しており、また点数が少ないことから、これら2つの可能性は否定できる。城の性格等詳細は、遺構の検出状況および遺物の出土量が少ないため明らかにすることが難しいが、今後同地域での発掘調査により解明されることを期待したい。

表1

	遺跡名	調査回数	上幅	下幅	深さ	土塁
A	小山ノ上	県調査	4.30m	1.28m	1.70m	東側
B	小山ノ上	5次	5.65m	1.24m	2.00m	東側
C	小山ノ上	7次	7.60m	2.00m	2.80m	東側
D	英	1次	4.30m以上	1.60m	2.75m	西側

#### 引用・参考文献

- 入間地区文化財担当者部会 1995『入間郡における須恵器産地推定について』
- 小淵良樹他 1988『狭山市埋蔵文化財調査報告7 小山ノ上遺跡2次～5次他』狭山市文化財報告14
- 小淵良樹 1989『狭山市埋蔵文化財調査報告書8 小山ノ上遺跡6次』狭山市文化財報告16
- 狭山市 1980『狭山市史 原始・古代資料編』
- 中村倉司 1988『小山ノ上遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 渡辺一他 1990『鳩山窯跡群Ⅱ窯跡編(2)』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会



新編武蔵野国風土記稿より抜粋

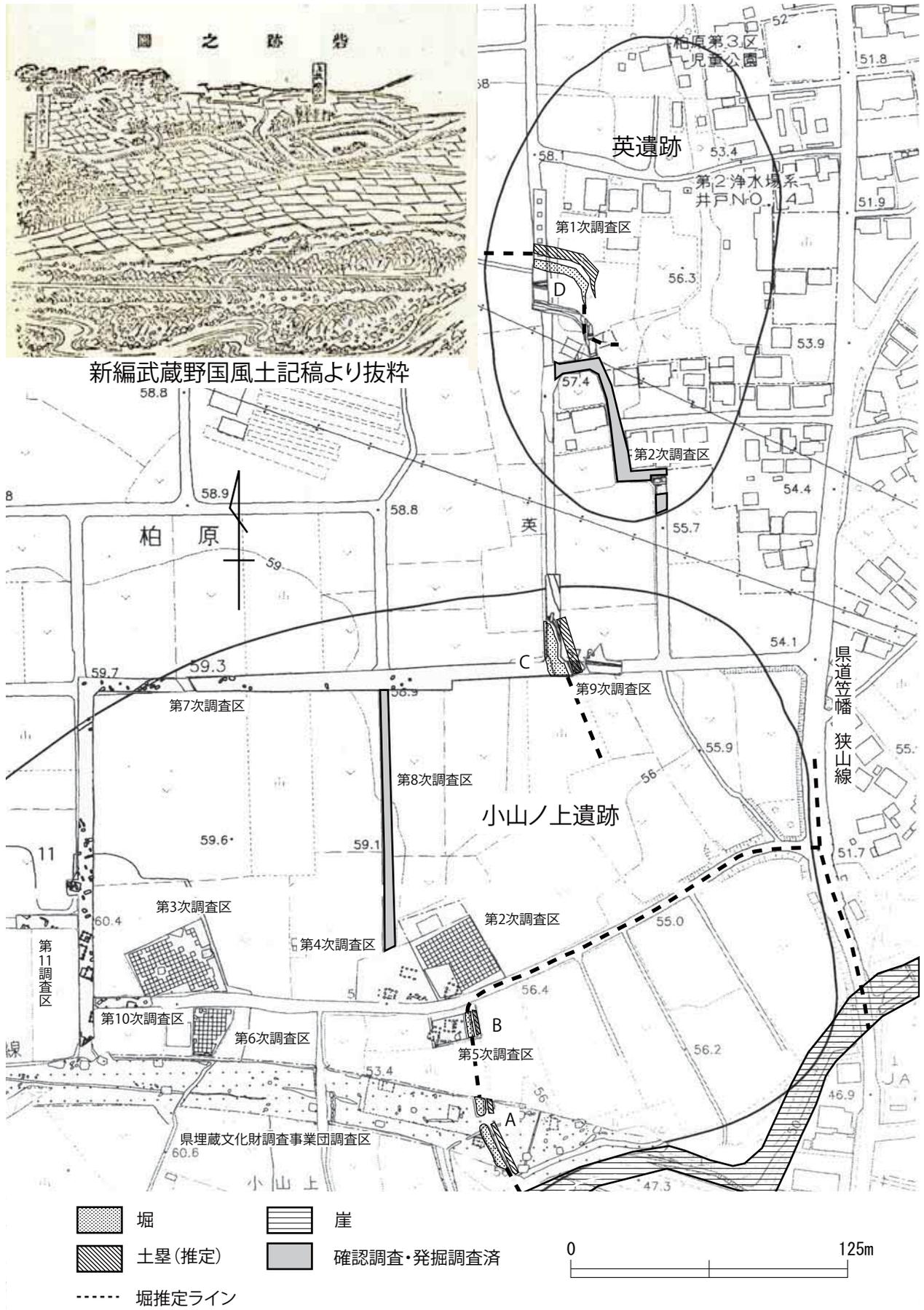


図1 小山ノ上・英遺跡堀関係図(1/2,500)

# 写真図版

図版 1



小山ノ上第7次調査A区全景(北から)



小山ノ上第7次調査B区全景



第 6 号住居跡全景



第 7 号住居跡全景



第 12 号掘立柱建物跡全景



第 13 号掘立柱建物跡全景



第 15 号掘立柱建物跡全景



第 16 ~ 20 号掘立柱建物跡全景



集石土壌検出状況



第 2 ~ 5 号集石土壌検出状況

图版 3



第 6 号住居跡出土遺物 (第 6 图 3)



第 6 号住居跡出土遺物 (第 6 图 9)



第 6 号住居跡出土遺物 (第 6 图 8)



第 6 号住居跡出土遺物 (第 7 图 14)



第 7 号住居跡出土遺物 (第 10 图 1)



第 7 号住居跡出土遺物 (第 10 图 2)



第 7 号住居跡出土遺物 (第 11 图 11)



第 7 号住居跡出土遺物 (第 11 图 15)



第 2 号堀全景 1



第 2 号堀全景 2

図版 5



小山ノ上遺跡第9次調査区全景



第96号土壌



小山ノ上遺跡第 10 次調査区全景



第 8 号住居跡全景



第 9 号住居跡全景



第 10 号住居跡全景

图版 7



第 8 号住居跡出土遺物 (第 41 图 2)



第 8 号住居跡出土遺物 (第 41 图 3)



第 8 号住居跡出土遺物 (第 41 图 4)



第 8 号住居跡出土遺物 (第 41 图 10)



第 9 号住居跡出土遺物 (第 43 图 1)



第 9 号住居跡出土遺物 (第 43 图 2)



第 10 号住居跡出土遺物 (第 44 图 3)



第 10 号住居跡出土遺物 (第 44 图 4)



小山ノ上遺跡第 11 次調査第 11 号住居跡全景



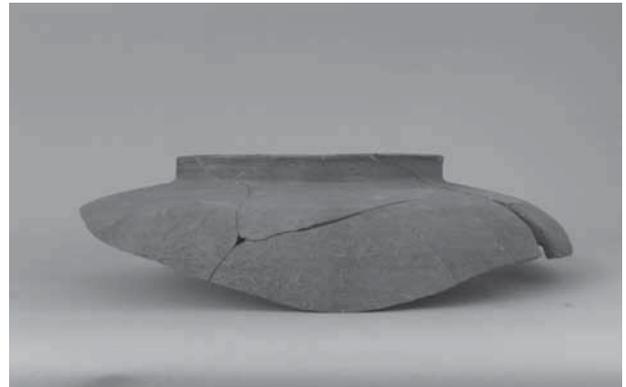
第 11 号住居跡出土遺物 (第 48 図 1)



第 11 号住居跡出土遺物 (第 48 図 2)



第 11 号住居跡出土遺物 (第 48 図 3)



第 11 号住居跡出土遺物 (第 48 図 4)

図版 9



英遺跡第 1 次調査区全景（調査区北）



第 1 号堀全景（北から）



第 1 号堀全景（北西から）



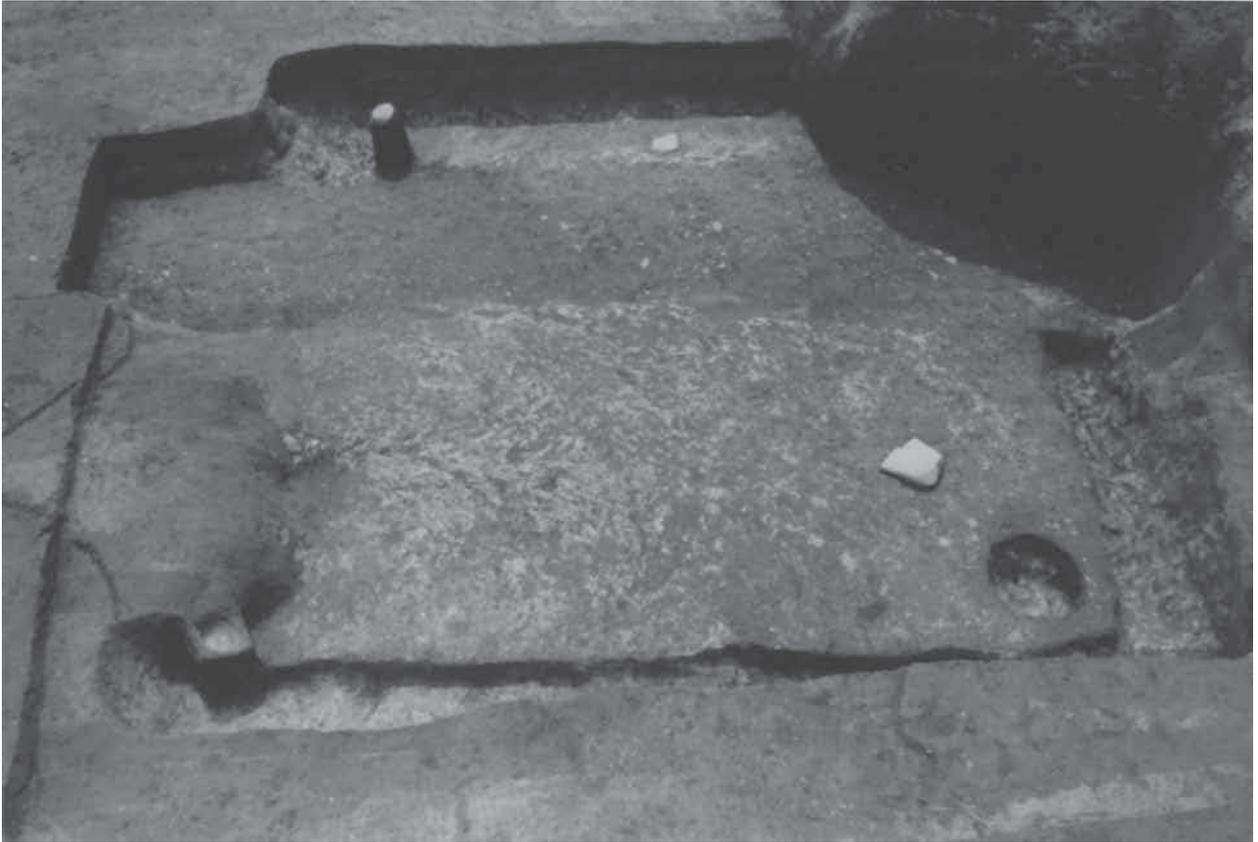
第 1 号堀出土遺物（第 57 図 1）



第 1 号堀出土遺物（第 57 図 2）



第 1 号堀出土遺物（第 57 図 3）



英遺跡第 2 次調査第 1 号住居跡全景



第 1 号住居跡出土遺物 (第 60 图 2)



第 1 号住居跡出土遺物 (第 60 图 4)



第 1 号住居跡出土遺物 (第 60 图 6)



第 1 号住居跡出土遺物 (第 60 图 7)

## 報告書抄録

ふりがな	こやまのうえいせき だい7・9～11じちょうさ はなぶさいせき だい1・2じちょうさ							
書名	小山ノ上遺跡—第7・9～11次調査— 英遺跡—第1・2次調査—							
副書名	圃場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	狭山市文化財調査報告 第31集							
シリーズ名	狭山市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	19							
著者氏名	三ツ木康介							
編集機関	埼玉県狭山市教育委員会							
所在地	〒350-1380 埼玉県狭山市入間川1-23-5				TEL04-2953-1111			
発行年月日	西暦2012(平成24)年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		東経	北緯	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
	さいたまけんざやましかしわぼら 埼玉県狭山市柏原							
こやまのうえいせき 小山ノ上遺跡	1280-1 外	22	11	139° 24' 1"	35° 52' 45"	19930610～ 19940220	2,060	圃場整備
	1501 外			139° 24' 12"	35° 53' 47"	19970107～ 19970118	179	
	1280-1			139° 24' 2"	35° 52' 41"	19970506～ 19970519	173	
	1288			139° 24' 0"	35° 52' 43"	19971117～ 19971215	149	
はなぶさいせき 英遺跡	1450 外	22	74	139° 24' 11"	35° 52' 51"	19940221～ 19940331	990	
	1533-1			139° 24' 12"	35° 52' 49"	19970420～ 19970509	45	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小山ノ上遺跡								
第7次調査	集落跡	縄文時代 奈良・平安時代 中世 近代	集石土壇	5基	石器 須恵器 土師器			
第9次調査		不明	溝	1条		須恵器片 土師器片		
第10次調査		奈良・平安時代	竪穴住居跡	3軒		須恵器 土師器		
第11次調査			土壇	4基				
			竪穴住居跡	1軒				
英遺跡			掘立柱建物跡	2棟				
第1次調査	集落跡	奈良・平安時代 中世	堀	1条	須恵器 土師器 かわらけ 内耳鍋	山内上杉系のかわらけ		
第2次調査			溝	3条				
			土壇	2基				
			土壇	多数				
			土壇	1基				
			土壇	1基				

狭山市文化財調査報告 第31集

狭山市埋蔵文化財調査報告書 19

小山ノ上遺跡

第7・9～11次調査

英 遺 跡

第1・2次調査

圃場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24年3月31日 印刷

平成24年3月31日 発行

発行 埼玉県狭山市教育委員会

埼玉県狭山市入間川1丁目23番5号

TEL 04 - 2953 - 1111

印刷 有限会社 ミネ五十子印刷